

1860 年代から 1950 年代の写真資料による建築類型を基にした
アイヌ民族における集落の実態と建築物の歴史的変遷過程

The Actual Conditions of Ainu Villages and the Buildings' Historical Transformation Process
Based on Building Types in Photographic Materials from the 1860s to the 1950s

2015年3月

札幌市立大学大学院
デザイン研究科 博士後期課程

佐久間 学

博士論文要旨

キーワード: アイヌ民族, 写真資料, 集落 (コタン), 建築類型, 通史

本研究は、写真資料「毛民青屋集」を基に 1940 年の二風谷村及び白老村のアイヌ集落にみられた建築物の実態を明らかにすること、建築物の類型化を基に通史として建築物の変遷過程を考察することを目的とした。

本論文は全 8 章の構成からなる。

第 1 章「序論」では、研究の背景、研究の課題、研究の目的、研究の手順を明記した。

第 2 章「研究対象年代別にみた既往研究の整理」では、アイヌ民族の建築に関する既往研究の成果を研究対象年代別にまとめ、本研究の役割と意義を明確にした。

第 3 章「資料の検証」では、本研究資料となる写真資料の評価基準を定め、また、二風谷村及び白老村アイヌ集落の建築物の配置図を作成し、本研究の信頼性を裏付けた。

第 4 章「平地式建築物の類型化手法」では、写真資料からわかる外観意匠の特徴を基にした平地式建築物の類型化手法を確立した。

第 5 章「毛民青屋集に基づいた 1940 年の二風谷村アイヌ集落にみられた建築物の実態」では、建築物の外観の特徴及び平面規模の特徴から、二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態を明らかにした。

第 6 章「毛民青屋集に基づいた 1940 年の白老村アイヌ集落にみられた建築物の実態」では、建築物の外観の特徴、平面規模の特徴、建築物の所有状況から、白老村アイヌ集落に見られた建築物の実態を明らかにした。

第 7 章「毛民青屋集を基にした 1940 年に見られた集落の比較と歴史的変遷過程の考察」では、二風谷村及び白老村アイヌ集落について、歴史的変遷の中で、集落の建築物にどのような違いが見られたのかを比較した。また、既往研究の成果と本研究の成果から、通史として建築物の変遷過程を考察した。

第 8 章「結論」では、本研究の成果をまとめた。

結論 1. 1940 年の二風谷村及び白老村アイヌ集落の建築物の実態

二風谷村及び白老村アイヌ集落に見られた建築物は、大きく「茅壁茅葺屋根の寄棟建築物（類型 A）」、「マサ壁茅葺屋根の寄棟建築物（類型 B）」、「茅葺屋根の切妻建築（類型 C）」、「改良住宅（類型 D）」の 4 つであり、さらに「セムの平面形」から細分化し、各集落にみ

られた建築物の特徴を明らかにした。

(1)二風谷村アイヌ集落

【集落の成り立ち】以前から住んでいた場所に給与地が指定された集落

【土地区画】南北に走る道路沿い、給与地の大きさは一定ではない

【生活状況】アイヌ民族と和人が共に生活、主に農業

【住居の配置】主屋長軸が南北軸（南北道路と一致）、入口位置は道路に面する

【建築物】アイヌ民族の多くは、類型 B（平面形Ⅰa：「セム」を伴わない、平面形Ⅲ：「3面壁-簡易屋根構造」の「下屋」、平面形Ⅴ：「4面壁-簡易屋根構造」の「下屋」）に住み、1937年以降、類型 D（平面形Ⅰa）の改良住宅に住むことが提唱されていたが、1940年には普及していなかった。類型 A（平面形Ⅰa）も見られたが、復元建築に見られるセムを伴った建築物は見られなかった。用途別に建築物を使い分けていた事も確認でき、特に類型 C（平面形Ⅰa）は納屋や厩舎のみの利用であった。高床倉庫等の付属建築物は見られなく、類型 A 及び類型 C を納屋として用いていた。

【通史での位置付け】同化政策の影響の中で、変容した集落

(2)白老村アイヌ集落

【集落の成り立ち】移住者による集落

【土地区画】グリット状の土地区画、450坪を一単位としてアイヌ民族に割り渡されている

【生活状況】集落内はアイヌ民族のみが生活、主に観光業

【住居の配置】主屋長軸が各土地区画の東西軸

【建築物】「村長及び村長に準ずる人」は、類型 A（平面形Ⅳ：「3面壁-小屋根型構造」の「下屋」）に住み、住居の他に「高床倉庫」や「熊檻」等の「付属建築物」を所有していた。一方で「その他の人」は、類型 A 又は類型 B（平面形Ⅰa、平面形Ⅰb：「2面壁-簡易屋根構造」の「小庇」、平面形Ⅱ：「2面壁-簡易屋根構造」の「下屋」）に住み、住居以外には類型 C（平面形Ⅰa）を所有していた。

【通史での位置付け】同化政策の影響の中で、アイヌ民族としての生活を保った集落

結論 2. 歴史的変遷過程から見た建築物の特徴

「主屋屋根部」により類型化した、「茅葺の寄棟屋根建築物」、「茅葺の切妻屋根建築物」、「茅葺の変形屋根（稜線の不明瞭な屋根を持つ）建築物」、「改良住宅」について、13世紀前後から1940年代前後までの変遷過程から、各建築物の特徴を考察した。

(1)茅葺の寄棟屋根建築物

アイヌ民族を代表する建築物であり、その中で、平面形Ⅳの「3面壁-小屋根型構造」の「下屋」を伴う建築物は、元来、村長クラスの住居であった可能性が高い。

(2)茅葺の切妻屋根建築物

元来、住居以外の用途で用いられていた可能性が高い建築物である。

(3)茅葺の変形屋根建築物

他の類型よりも早くに消滅した可能性が高い建築物である（1940年代には見られない）。

(4)改良住宅

1940年において存在したが、まだ普及していない建築物である。

Abstract

Keywords : Ainu people, Photographic materials, Ainu Villages, Building types, Historical transformation process

This study, based on an album of photographs of “Collection of Thatched-Roof Houses of the Ainus” by Fukuhei Takabeya and conducted through the investigation of old maps and aerial photographs, revealed layout features and features of building appearance, surface scale, and ownership details of the Nibutani and Shiraoi Village Ainu settlement in 1940. In addition this study was aimed to discuss the buildings’ historical transformation process based on building types. The results of this study are as follows.

Conclusion 1: Actual conditions of architectural structures of Ainu settlement at Nibutani and SHIRAOI IN 1940

(1) Nibutani

The Ainu settlement at Nibutani was confirmed to have had at least 35 ethnic Ainu houses and at least three ethnic Japanese houses, which indicates that both the Ainu people and the Japanese were living together.

The architectural buildings found at the settlement are categorized into four types based on their external shapes: "thatched-wall thatched-roof hipped-roof architectural structure" (Type A), "spindle-wall thatched-roof hipped-roof architectural structure" (Type B), "thatched-roof gable-roof architectural structure" (Type C), and "roof-shingle or tin-roof architectural structure" (Type D).

Many ethnic Ainus lived in Type B architectural structures, using architectural structures of Type A or Type C as barns or stables. It has been suggested that by 1937, the Ainu people were living in modified residential housing of Type D. However, many of the ethnic Ainus lived in architectural structures in which the roof structures were retained, but the thatched walls were replaced with those made of spindle and further modified with glass pane windows and wooden doors, as observed in Type B. Therefore, Type D modified residential housing is considered to have become more prevalent only after 1940.

(2) Shiraoi

The Shiraoi Village Ainu settlement was laid out such that there were two north-south roads and four east-west roads intersecting perpendicularly to form a grid. A single section area was maintained to be approximately 1,485 square meters (27 m x 55 m). The settlement that Takabeya investigated in 1940 was divided among the villagers such that each Ainu family household was allotted one section of land.

Another avenue of investigation was conducted by way of examining village houses. There were observed differences in house design upon separating villagers into either “village chief/equivalent” or “other people” categories. Houses belonging to “village chief/equivalent” villagers had elongated floor space and both the main and auxiliary structures were larger in scale than those belonging to the “other people” villagers. Furthermore, “village chief/equivalent” villagers owned structures such as elevated storehouses, bear pens, and attached buildings containing inaws (ritual prayer sticks). “Other people” villagers did not possess such structures and what they did possess was apparently intended only for habitation. It is also possible that gabled roof houses were used both for habitation as well as for auxiliary activities.

In addition, there were traits common among the houses of both groups. For example, construction was arranged such that houses had their longer axis parallel to the east-west axis of the settlement. One or two windows were installed facing south in order to maximize lighting. Houses with an east-facing “holy window” had seven or more partitions. Finally, houses containing walls made from the Japanese spindletree (*Euonymus japonicus*) and possessing a glass window were divided into five partitions.

Conclusion 2: Characteristics of the each building types discussed from the buildings’ historical transformation process

(1) Thatched-roof hipped-roof architectural structure

This type is a building that representative of the Ainu. Among them, the buildings with large entrance, originally, is likely to be the residence of the village chief/equivalent.

(2) Thatched-roof gable-roof architectural structure

This type, originally, are likely buildings to use in applications other than residential.

(3) Thatched-roof deformation-roof architectural structure

This type is likely to have disappeared earlier than other types.

(4) Roof-shingle or tin-roof architectural structure (improved housing)

This type was present in the 1940s, but it was not yet popular buildings.

目次

第1章 序論

1-1	研究の背景と課題	001
1-2	研究の目的	002
1-3	研究の意義	004
1-4	資料の特徴	007
1-5	研究の手順	007
1-6	論文の構成	008

第2章 研究対象年代別にみた既往研究の整理

2-1	はじめに	012
2-2	整理の手順	012
2-3	「アイヌ民族の建築物の起源・原形」を対象とした研究の概要	014
2-4	「13世紀前後から18世紀中期」を対象とした研究の概要	016
2-5	「18世紀中期から19世紀後半」を対象とした研究の概要	018
2-6	「1860年代から1950年代」を対象とした研究の概要	032
2-7	既往研究の整理	035
2-8	小結	041

第3章 写真資料の検証

3-1	はじめに	042
3-2	写真資料の評価基準の設定	042
3-3	写真資料の所蔵先の選定	045
3-4	「毛民青屋集」の検証について	054
3-5	「毛民青屋集」5～6の検証	054
3-6	「毛民青屋集」7～8の検証	064
3-7	研究資料の整理	074
3-8	小結	078

第4章 平地式建築物の類型化手法

4-1	はじめに	080
4-2	既往研究における類型化に関連する記載	080
4-3	分析対象の整理	084
4-4	類型化の検討	088
4-5	類型化の手順	089
4-6	小結	098

第5章 「毛民青屋集」に基づいた1940年の二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態

5-1	はじめに	099
5-2	集落の建築物の配置状況	100
5-3	二風谷村アイヌ集落の建築物の類型化	102
5-4	類型化した建築物の用途と平面形と外観形状から見た特徴	108
5-5	類型化した建築物の平面図から見た特徴	112
5-6	小結	114

第6章 「毛民青屋集」に基づいた1940年の白老村アイヌ集落に見られた建築物の実態

6-1	はじめに	118
6-2	土地区画の特徴	118
6-3	白老村アイヌ集落の建築物の類型化	121
6-4	「茅葺寄棟屋根の建築物」(類型a)の特徴	121
6-5	「茅葺切妻屋根の建築物」(類型b)の特徴	130
6-6	付属建築物の特徴	130
6-7	イナウ	132
6-8	所有者別に見た建築物の所有状況と比較	133
6-9	所有する建築物の比較	136
6-10	小結	138

第7章 「毛民青屋集」を基にした1940年に見られた集落の比較と歴史的変遷過程の考察

7-1	はじめに	140
7-2	集落の成り立ちと土地区画	140
7-3	生活状況	141
7-4	類型別にみた建築物の比較による考察	141
7-5	二風谷村アイヌ集落と白老村アイヌ集落の位置付け	142
7-6	類型を用いた建築物の歴史的変遷過程の考察	142
7-7	小結	147

第8章 結論

8-1	はじめに	149
8-2	平地式建築物の類型化手法	149
8-3	1940年の二風谷村及び白老村アイヌ集落の建築物の実態	151
8-4	歴史的変遷過程から見た建築物の特徴	152
8-5	平地式建築物の類型化手法の整合性	153
8-6	写真資料の位置付けについて	154
8-7	今後の展望	154

研究業績	156
------	-----

謝辞	157
----	-----

第1章 序論

1-1 研究の背景と課題

アイヌ民族の建築に関する研究（表 1-1）は、1920 年代にアイヌ民族の建築物の現地調査の報告^{注1)}により始まり、主要な研究は 1930 年代後半から 1940 年代前半にかけて行われた。特に鷹部屋福平氏の研究^{注2)}と棚橋諒氏の研究^{注3)}はアイヌ民族の建築に関する研究の礎となった。その後、建築学の他、言語学や文化人類学や地理学を専門とした研究者による研究も行われたが、建築物に関する考察は鷹部屋氏と棚橋氏の論考の再録にとどまっている^{注4)}。近年の研究には 2008 年の小林孝二氏^{注5)}の研究があり、発掘報告書^{注6)}と絵画資料^{注7)}を基に、アイヌ文化成立期（13 世紀前後）から近世紀末（19 世紀後半）までのアイヌ民族の建築物の特徴を明らかにしている。

1920 年代から行われてきた研究の背景には、伝統的なアイヌ民族の建築物^{注8)}が激減していたことがあり、研究の課題は、現存していた伝統的なアイヌ民族の建築物の実測調査から、アイヌ民族の建築物の起源・原形を明らかにすることであった。既往研究の成果は、その後の復元建築の建造やアイヌ民族の啓蒙書の建築物の解説等に用いられ、アイヌ民族の建築物を後世に伝えることに貢献し、研究の果たした役割は大きい。しかし、歴史的な事実の積み重ねによって行われる建築史の研究の観点から見ると、既往研究の成果は、歴史的な事実の証明ではなく、あくまでアイヌ民族の建築物の起源・原形に対する仮説であり史的研究ではなかった。また、それは、歴史的な事実の証明の積み重ねが無いために、アイヌ民族の建築を通史と見ることが出来ず、結果として、歴史的視点や歴史的変遷に対する視点の欠如した普遍的なアイヌ民族の建築物像を現在まで固定化させてしまった事になり、そのことにアイヌ民族の建築に関する研究の課題が見えた。近年に行われた歴史的に意義のある資料から研究対象年代を特定して行った小林氏の研究は、建築史としてのアイヌ民族の建築に関する研究の嚆矢となる重要な論文であった。

これまでに行われてきたアイヌ民族の建築に関する研究の背景から、研究の課題は、アイヌ民族の建築物に対して歴史的視点や歴史的変遷に対する視点を持ち、これまでの研究により歴史的変容がない固定化されつつあるアイヌ民族の建築物像を改めることにある。そのためには、資料に記されている歴史的事実から資料成立年のアイヌ民族の建築物の実態を証明し、その積み重ねにより最終的に通史としてアイヌ民族の建築物をみることが重要である。

表 1-1 主要な既往研究

研究者	発表年	主な研究資料	研究者	発表年	主な研究資料
村上二郎	1925	現地調査	三田克彦	1953	小屋組の部材名称
石原憲治	1932	東北地方の農民住宅	小倉強	1955	三脚叉首構造
関野克	1938	鐵山秘書(天明4年)	大林太良	1956	文化人類学
棚橋諒	1938~39	現地調査	杉本尚次	1969	地理学
鷹部屋福平	1939~43	現地調査	越野武	1984	既往研究
杉野謙三	1940	現地調査	乾尚彦	1989	鷹部屋氏の研究
金田一京助	1942	移築した住居	宮澤智史	1989	既往研究
村田治郎	1950	鷹部屋氏の研究	遠藤明久	1992	江戸期以降の文献
知里真志保	1950	言語学(アイヌ語)	小林孝二	2008	発掘報告書
太田博太郎	1951	鐵山秘書(天明4年) 鷹部屋氏の研究			絵画資料

1-2 研究の目的

アイヌ民族の建築に関する研究の終点は、前述の通り、資料に記されている歴史的事実から資料成立年のアイヌ民族の建築物の実態を明らかにすることの積み重ねによりアイヌ民族の建築を通史として見ることであるが、これまでに資料に記されている歴史的事実から資料成立年のアイヌ民族の建築物の実態を証明した既往研究の成果を研究対象時代別に見ていくと、研究が十分に行われていないのは、「1860年代から1950年代」である事が分かった。それは、「1860年代から1950年代」のアイヌ民族の建築物が記載される研究を見ると、前述の通り、アイヌ民族の建築物の起源・原形に関する研究が主眼にあるため、「伝統的と考えられる建築物」のみが研究対象となっていたからである。「1860年代から1950年代」は、「伝統的と考えられる建築物」と「改良を加えた建築物」とが顕在した時代であり、この2つの建築物が存在するようになった歴史的な変遷過程が最もこの時代の建築物の実態を示すからである。

次に、通史としてアイヌ民族の建築を捉えるには、各年代のアイヌ民族の建築物の実態を明らかにでき、かつ、点として存在する各年代のアイヌ民族の建築物の実態をつなぐ手法の必要性が窺える。その分析法には、写真資料に基づいた建築物の類型が適していると仮定した。その理由として、アイヌ民族の歴史的建造物が現存していない現在において、写真資料はアイヌ民族の建築物の実像を写す資料として歴史的な価値を見いだせるからである。また、写真が撮影された年代は「1860年代から1950年代」であることから、写真資料には「伝統的と考えられる建築物」と「改良を加えた建築物」とが共に写されており、写真資料に基づいた建築物の類型は、全ての年代に存在した建築物を網羅できると考えた

からである。この類型化は、写真資料から分かる外観意匠というデザイン学の見地から検討される物であり、また、写真を研究資料としたアイヌ民族の建築に関する研究がこれまで行われていないことに新規性があり、これまでのアイヌ民族の建築に関する研究に見られない新たな知見を得るという起点から研究を始めた。

実際に写真資料を収集したところ、写真には、「絵画資料」に描かれている建築物と類似する「伝統的と考えられる建築物」と下見板張りの外壁やガラス窓を設置した「改良を加えた建築物」が共に写されていた（図 1-1）。写真資料の中で特出した資料としては、鷹部屋氏が 1940 年に行った二風谷村アイヌ集落と白老村アイヌ集落の建築物の実測調査記録（「毛民青屋集」）があり、集落内に存在した建築物の写真の他に平面図が添付しており、研究が十分に行われていない「1860 年代から 1950 年代」のアイヌ民族の建築物の実態の一端を担う、1940 年の 2 つのアイヌ集落に見られた建築物の実態を明らかにする資料としての価値が窺えた。その理由として「1860 年代から 1950 年代」の「伝統的と考えられるアイヌ民族の建築物」と「改良を加えた建築物」の顕在した状況を現在に伝える事の出来る資料は、集落単位で写真を収録している「毛民青屋集」以外に見ることができないからである。また、二風谷村と白老村は、アイヌ民族が古くから生活をしていた場所として知られているが、集落の成り立ちや生活状況等の異なる歴史的変遷の中で、1940 年の鷹部屋氏の 2 つの集落の建築物の調査時に違いが見られるのかどうかについて、建築物の類型化を用いて比較できる対象となるからである。

以上のことから、本研究は、研究の背景と課題を前提に、各年代のアイヌ民族の建築物の実態を明らかにでき、かつ、点として存在する各年代のアイヌ民族の建築物の実態をつなぐ手法として、建築史学を念頭に置いたデザイン学の見地から建築物の類型化手法を確立し、類型化の整合性をかねて、これまでに十分に研究が行われていない「1860 年代から 1950 年代」を対象とした研究の一端をになう「毛民青屋集」を基に、1940 年の二風谷村及び白老村のアイヌ集落にみられた建築物の実態と建築物の歴史的変遷過程を明らかにすることを目的とした。



図 1-1 「伝統的と考えられる建築物」と「改良を加えた建築物」

資料：「毛民青屋集」5～6 調査票 52n の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

1-3 研究の意義

アイヌ民族の建築に関する研究において、通史としてアイヌ民族の建築物を捉える学術的意義は、アイヌ民族の建築史から、北海道建築史そして日本建築史を補うことである。現在、北海道に移り住んだ和人の歴史的視点、特に明治期の開拓使設置以降から北海道建築史は語られているが、北海道には、古くから縄文人、続縄文人、擦文人、オホーツク人、そして、アイヌ民族が住んでおり、歴史学における本州にみられた時代区分と相違な文化を歩んできたことは、考古学の知見を基礎とした編年からも理解できる。日本建築史では、先史時代の建築物像として奈良県佐味田古墳出土の家屋文鏡に描かれる4つの建築様式や群馬県赤堀村茶臼山古墳出土の家形埴輪に見られる建築様式から建築物の原像を求め、以後、アジア大陸南部との交易の中で建築物の歴史的変遷過程を見ることが出来る。しかし、日本列島における建築史を考えると、アジア大陸北部との交易の中で建築物の歴史的変遷過程があったことは、江戸期のアイヌ民族と山丹人との交易品が発見されていることから否定することが出来ず、北方的な流れから日本建築史を考えることもまた重要である。

以上のことから、通史としてのアイヌ民族の建築史は、北海道建築史をアイヌ文化期(13

世紀前後の遺跡から平地式住居の柱穴が見られることを理由に、13 世紀前後以降の北海道の時代区分はアイヌ文化期と呼ばれる）までさかのぼることができ、また、日本建築史を北方的な流れから補うことができるという学術的意義がある。その中で、点として存在する各年代のアイヌ民族の建築物の実態をつなぐ指標として建築物の類型を検討し、また、実態が明らかになっていない「1860 年代から 1950 年代」を対象とした研究の一端を担う、1940 年の二風谷村及び白老村アイヌ集落にみられた「伝統的と考えられる建築物」と「改良を加えた建築物」の両建築物の実態及び歴史の変遷過程からアイヌ民族の建築史を補う本研究は、通史としてのアイヌ民族の建築物を捉える研究の起点となり、学術的意義を持つ。

一方、本研究の社会的意義について考えると、これまでの北海道建築史及び日本建築史の見方を変えて通史としてのアイヌ民族の建築史の重要性を発信することは、歴史が浅いと考えられている北海道の歴史観を変えることにつながる視点として意義がある。また、「改良を加えた建築物」に対し、通史としてのアイヌ民族の建築史の中で「一時代のアイヌ民族の建築物の形態である」と発信することは、「アイヌ民族の建築物が同化政策の影響により消滅したのではなく変化したと見なすこと」であり、それは世界規模でさまざまな文化の影響を受けた現代建築をどのように捉えるかを問うことにもつながるが、アイヌ民族がアイヌ民族の建築物を今後、どのように伝承していくかを問う視点として重要な意義がある。この 2 つの社会的意義は、デザイン学の根底にある、社会的状況の変様の中で新たな見方や価値を見出だす視点によるものであり、本研究で明らかとなる新たな知見と共に、通史としてのアイヌ民族の建築物の重要性、あるいは、アイヌ民族を始め北海道に住む全ての人々がアイヌ民族の建築物をどのように伝承していくかを考えるきっかけとなれば、本研究の果たす役割は大きなものとなる。

以下に、研究の背景、課題、目的、意義についての概要をまとめた（表 1-2）。

表 1-2 研究の概要

研究の背景

歴史的な事実の積み重ねによって行われる建築史の研究の観点から見ると、既往研究の成果は、歴史的な事実の証明ではなく、あくまでアイヌ民族の建築物の起源・原形に対する仮説であり史的研究ではなかった。

研究の課題

既往研究の成果ではアイヌ民族の建築を通史として見る事が出来ず、歴史的視点や歴史の変遷過程が欠如した普遍的なアイヌ民族の建築物像が現在まで固定化されている。

研究の目的

【アイヌ民族の建築に関する研究の終点】

固定化されつつあるアイヌ民族の建築物像を改め、資料に記されている歴史的事実から資料成立年のアイヌ民族の建築物の実態を証明し、その積み重ねにより最終的に通史としてアイヌ民族の建築物をみること。

【本研究の目的】

これまでに明らかになっていない年代のアイヌ民族の建築物の実態を明らかにすることで通史として見る際のアイヌ民族の建築史を補うこと。また、アイヌ民族の建築に関する研究において、通史という視点から行われる研究の起点となること。

研究の意義

【学術的意義】

通史としてのアイヌ民族の建築史は、明治期の開拓使設置以降から語られている北海道建築史をアイヌ文化期（13 世紀前後）までさかのぼることができる。また、通史としてのアイヌ民族の建築史は、南方的な流れから語られている日本建築史を北方的な流れから補うことができる。

【社会的意義】

これまでの北海道建築史及び日本建築史の見方を変えて通史としてのアイヌ民族の建築史の重要性を発信することは、歴史が浅いと考えられている北海道の歴史観を変える視点となる。また、「改良を加えた建築物」に対し、通史としてのアイヌ民族の建築史の中で「一時代のアイヌ民族の建築物の形態である」と発信することは、アイヌ民族の建築物を今後、どのように伝承していくかを問う視点となる。

1-4 資料の特徴

写真資料は、それ自体では撮影年代、撮影場所等を特定することが難しく、また、異文化への興味から演出の可能性のある写真があるため、厳密な資料評価が必要である。そこで本研究で用いる写真資料の評価基準は、撮影年、撮影者または所持した研究者、撮影地が明らかとなっていることとした。さらに、異文化への興味から演出の可能性のある写真があるため、評価基準に商業用に撮影された絵葉書や印刷アルバムは除外し、研究及び資料収集用に撮影された原写真のみを用いる事を加え、資料の信頼性の向上をはかった。評価基準を満たす写真資料を所蔵している研究機関は、北海道大学附属図書館北方資料室、北海道立アイヌ民族文化研究センター、ロシア民族学博物館、北海道立文書館の4箇所であった。

資料の特徴として、建築物の外観を写したものが大半であり、屋根形状、セム^{注9)}の形状、入口位置、壁材といった外観の特徴を抽出する事が出来る。特色のある資料としては、1-2節（資料の目的）において記した「毛民青屋集」があり、1940年に鷹部屋氏が行った二風谷村及び白老村アイヌ集落の現地調査記録であり、簡易な地図にアイヌ民族の居住者名が記載された人名表と建築物の写真と平面図が添付した調査票からなる。集落単位でまとめ、かつ、平面図の添付する資料は、「毛民青屋集」以外になく、資料的な価値が高い反面、研究資料とするには、調査票の写真の建築物と居住者名の不一致、人名表に記載のない建築物が写真に写る等があるため、資料の検証が必要である。

1-5 研究の手順

研究の手順は、最初に既往研究が明らかにしたアイヌ民族の建築物の特徴を研究対象年代順にまとめ、既往研究の成果と研究課題の所在を明確にする（第2章）。次に、本研究資料となる写真資料の評価基準を定め、資料の検証を行う（第3章）。資料の検証により信頼できる写真資料を基に、各研究対象年代の建築物の特徴を分析することができ、かつ、点として存在する各年代のアイヌ民族の建築物の実態をつなぐ、平地式建築物の類型化手法を確立する（第4章）。次に、1940年の二風谷村と白老村のアイヌ集落内のアイヌ民族の建築物の写真と平面図を記録した資料を用い、二風谷アイヌ集落（第5章）と白老村アイヌ集落（第6章）に見られた建築物の実態を明らかにし、明らかとなった内容について（第7章）において比較研究から、この2つの集落に見られた歴史的変遷過程について考察する。最後に、本研究で明らかとなった新知見についてまとめる（第8章）。

1-6 論文の構成

本研究の構成とそれぞれの章における研究の概要は、以下の通りである。

第1章 序論

アイヌ民族の建築に関する研究の背景から課題を明示し、本研究の目的を明確にする。
また、本研究で使用する資料の特徴と研究方法を記し、本研究を進める手順を明確にした。

第2章 研究対象年代別にみた既往研究の整理

アイヌ民族の建築に関する既往研究の成果をまとめ、研究対象年代別にこれまでに明らかになっているアイヌ民族の建築物についての実態を明らかにすると共に、既往研究における課題を検討し、本研究の役割を明確にした。

第3章 写真資料の検証

写真資料を基にした本研究の信頼性を裏付けることを目的に、これまでアイヌ民族の建築に関する研究で用いられてきた研究資料と写真資料との比較から写真資料の評価基準を設定し、資料の検証を行い、本研究資料を取りまとめた。

第4章 平地式建築物の類型化手法

第3章により信頼性の高い写真資料から抽出した平地式建築物 104 件を基に、平地式建築物の類型化手法を確立することを目的とした。

第5章 「毛民青屋集」に基づいた 1940 年の二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態

第3章により信頼性の高い写真資料である「毛民青屋集」5～6 を基に、伝統的なアイヌ民族の建築物だけではなく、これまで研究対象とされなかった改良型のアイヌ民族の建築物を研究対象とし、第4章の「平地式建築物の類型化手法」にしたがい、1940 年の二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態を明らかにすることを目的とした。

第6章 「毛民青屋集」に基づいた 1940 年の白老村アイヌ集落に見られた建築物の実態

第3章により信頼性の高い写真資料である「毛民青屋集」7～8 を基に、第5章と同様に 1940 年の白老村アイヌ集落に見られた建築物の実態を明らかにすることを目的とした。

第7章 「毛民青屋集」を基にした、1940年の集落の比較と歴史的変遷過程の考察

第5章及び第6章で明らかにした二風谷村と白老村について、集落の成り立ちや生活状況等の異なる歴史的変遷の中で、1940年の調査時に集落の建築物にどのような違いが見られたのかを比較し、通史としてアイヌ民族の建築を捉える際のこの2集落に見られた建築物の実態の重要性を明示した。また、既往研究の成果についても第4章の類型化を当てはめ、本研究の成果と合わせて建築物の歴史的変遷過程を考察した。

第8章 結論

本研究で明らかとなった新知見についてまとめると共に、今後の課題を記した。

注

注1) アイヌ民族の建築についての記述は、江戸時代の間宮林蔵や松浦武四郎等の蝦夷地（樺太も含む）に関する書物や明治期のハインリッヒ・フォン・シーボルトやイザベラ・バード等の旅行記に見られる。建築学の見地からの研究としては、1925年の村上二郎氏の研究報告が最初である。間宮林蔵：北夷分界余話，1811年。松浦武四郎：初航、再航、三航蝦夷日誌，1850年。ハインリッヒ・フォン・シーボルト：小シーボルト蝦夷見聞記，平凡社，1996年。イザベラ・バード：日本奥地紀行，平凡社，2001年。村上二郎：北海道の住家，建築雑誌，第40輯 第485号，1925。

注2) 鷹部屋福平氏は構造力学の研究者・北海道帝国大学工学部教授であり、また、アイヌ民族の建築に関する研究の第一人者である。代表する研究は以下の通りである。鷹部屋福平：アイヌ屋根の研究と其構造原基體について，北方文化研究報告，第一輯，pp.107-161，1939年3月。同：アイヌ住居の研究，北方文化研究報告，第二輯，pp.1-123，1939年10月。同：アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 -，北方文化研究報告，第三輯，pp.209-265，1940年5月。同：アイヌ民族の使用したる計量の単位並びに「音」の名称に関する研究，北方文化研究報告，第四輯，pp.113-135，1941年2月。同：アイヌ住居の研究 - 日高平取方面に於ける地方性 -，北方文化研究報告，第五輯，pp.103-142，1941年7月。同：アイヌの生活文化，アルス，1942年6月。アイヌの住居，彰国社，1943年3月。同：北方圏の家，彰国社，1943年12月。

注3) 棚橋諒氏は鷹部屋氏と同様に構造力学の研究者であり、以下の論文に一連の研究を発表している。棚橋諒：アイヌの住居，民家，民家研究会，第Ⅱ輯 12号，1938年12月。同：アイヌの住居（2），民家，民家研究会，第Ⅲ輯 1号，1939年1月。同：アイヌの住居（3），民家，民家研究会，第Ⅲ輯 2号，1939年2月。

注4) 注1)、注2)、注3)以外の建築学の見地による研究は以下の通りである。石原憲治：日本農民建築の研究，建築雑誌，1932年10月。関野克：鐵山秘書高殿に就いて，考古学会 考古学雑誌，第28巻7号，1938年

7月．竹内芳太郎：アイヌの選ぶ住宅(1)，民家 民家研究会，第Ⅲ輯 2号，1939年2月．竹内芳太郎：アイヌの選ぶ住宅(2)，民家 民家研究会，第Ⅲ輯 3号，1939年3月．杉野謙三：アイヌ部落，満州建築雑誌，1940年．村田治郎：アイヌの家の史的解釈，建築学会大会梗概集，1950年8月．村田治郎：原始住居構造の一つの型，建築雑誌，775号，1951年7月．太田博太郎：古代住居の系統について，建築雑誌，775号，1951年7月．三田克彦：「えつり」と「こまい」-その語源とアイヌ住居の外殻構造-，日本建築学会論文集，第46号，1953年3月．越野武：北海道の住宅の歴史，寒地建築教材 概論編，1984年．乾尚彦：アイヌの住居，住宅建築 別冊37 北国の住まい，1989年．宮澤智士：日本列島民家史，住まいの学体系 022，1989年7月．遠藤明久：アイヌ住居の構造に影響を与えた松前藩の施策，日本建築学会大会梗概集，1992年9月．小林法道：白老地方の北海道アイヌ建築の平面形，民族建築，112号，1997年．国文学の見地による研究は以下の通りである．金田一京助：アイヌ芸術 木工編，1942年．言語学の見地による研究は以下の通りである．地里真志保：アイヌ住居に関する若干の考察，民族建築学，第14巻第4号，1950年5月．文化人類学の見地による研究は以下の通りである．大林太良：アイヌ家屋の系統に関する一試練 -ketun-ni-について，民族学研究，1956年12月．杉本尚次：日本民家の研究，ミネルヴァ書房，1969年9月．

注5) 小林孝二，大垣直明：近代以前の絵画資料に描かれたアイヌ民族の建築に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第608号，pp.127-134，2006年10月．同：アイヌ文化期の平地住居跡に関する基礎的研究-発掘資料から見たアイヌ民族住居の寸法体系に関する考察-，日本建築学会計画系論文集，第615号，pp.191-198，2007年5月．

注6) 考古学による発掘調査の成果資料である．建築学の立場から、建物跡の柱穴跡を分析し、アイヌ民族の建築を研究する．代表的な発掘報告書は以下の通りである．千歳市教育委員会：末広遺跡における考古学的調査(上)，1981年．末広遺跡における考古学的調査(下)，1982年．末広遺跡における考古学的調査(続)，1982年．末広遺跡における考古学的調査Ⅳ，1996年．梅川4遺跡における考古学的調査，2002年．ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査，2002年．トメト川3遺跡における考古学的調査，2004年．恵庭市教育委員会：カリンバ2遺跡，1987年．ユカンボシE7遺跡，1998年．柏木川13遺跡(Ⅲ)，2005年．平取町遺跡調査会：北海道平取町イルエカシ遺跡，1989年．

注7) 近代以前に描かれたアイヌ民族の建築の絵画や踏査記録に所載する挿図である．代表的な絵画資料は以下の通りである．村上島之允：蝦夷島奇観，1799年．谷元旦：蝦夷紀行，1799年．松浦武四郎：校訂蝦夷日誌 一遍巻之六誌，1845年．

注8) 本研究において、伝統的なアイヌ民族の建築物とは、現在復元されている茅葺屋根の茅壁といった定説的なアイヌ民族の建築物を指す。

注9) セムはアイヌ語で、主屋入口に接続する下屋（前室や庇や風除室の機能）をさす。本研究において、セムを伴わない建築物についても、屋根の小屋組下の室を主屋と表記する。なお、アイヌ民族の建築物に関する第一人者である鷹部屋氏と棚橋氏の両氏が論文において「セム」というアイヌ語を用いていることから、本研究においても「セム」を用いている。

第2章 研究対象年代別にみた既往研究の整理

2-1 はじめに

本章は、アイヌ民族の建築に関する既往研究の成果を研究対象年代別にまとめ、既往研究における課題を検討し、本研究の役割を明確にすることを目的とした。

2-2 整理の手順

(1) 本研究が対象とした既往研究

本研究が対象とした既往研究は、アイヌ民族の建築に関する本格的な研究が始まった1920年代以降の論文と、それ以前の外国人旅行記の記録やアイヌ民族に関する居住調査の記録とした(表2-1)。

(2) 整理方法

① 研究対象年代の特定

既往研究の多くは、研究対象年代を特定して行われた研究ではないため、各研究で用いられた研究資料から研究対象年代の特定を行った。各研究の資料分析部分は、その資料の成立年を研究対象年代とし、結論部分は総合的なアイヌ民族の特徴の考察となるため、「アイヌ民族の建築物の起源・原形」を対象とした研究として研究対象年代をくくった。例として、『1940年の建築物の実測調査を資料とし、アイヌ民族の建築物の起源に関する考察を行った研究』は、実測調査の記録部分を「1940年」を対象とした研究とし、結論部分を「アイヌ民族の建築物の起源・原形」を対象とした研究のように整理した。

② 研究対象年代

研究対象年代は、「アイヌ民族の建築物の起源・原形」を対象とした研究を含め、研究資料から以下の4つに分類し、各研究対象年代の研究概要をまとめた。

- i アイヌ民族の建築物の起源・原形(主に研究の結論部分)
- ii 13世紀前後から18世紀中期(研究資料:発掘調査の柱穴)
- iii 18世紀中期から19世紀前半(研究資料:絵画資料、江戸期古文書)
- iv 1860年代から1950年代(研究資料:旅行記、報告書、実測調査)

なお、以下に記す各研究対象年代のアイヌ民族の建築物の概要は、表2-1に示す論文、報告書、書籍から抜粋・引用した。

表 2-1 アイヌ民族の建築に関する既往研究

研究区分	研究者 (調査名)	研究年 (調査年)	論文・報告書・書籍等
アイヌ民族の建築物の起源・原形	石原憲治	1932	日本農民建築の研究, 日本建築学会, 建築雑誌, 1932年10月
	関野克	1938	鐵山秘書高殿に就いて, 考古学会 考古学雑誌, 第28巻7号, 1938年7月
	棚橋諒	1938~39	アイヌの住居(1), 民家 民家研究会, 第Ⅱ輯12号, 1938年12月
			アイヌの住居(2), 民家 民家研究会, 第Ⅱ輯1号, 1939年1月
			アイヌの住居(3), 民家 民家研究会, 第Ⅱ輯2号, 1939年2月
	鷹部屋福平	1939~43	アイヌ屋根の研究と其構造原基體について, 北方文化研究報告, 第一輯, 1939年3月
			アイヌ住居の研究, 北方文化研究報告, 第二輯, 1939年10月
			アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 -, 北方文化研究報告, 第三輯, 1940年5月
			アイヌ住居の研究 - 日高平取方面に於ける地方性 -, 北方文化研究報告, 第五輯, 1941年7月
	村田治郎	1950~51	アイヌの家の史的解釈, 建築学会大会梗概集, 1950年8月
			原始住居構造の一つの型, 日本建築学会, 建築雑誌, 775号, 1951年7月
	知里真志保	1950	アイヌ住居に関する若干の考察, 民族建築学, 第14巻 第4号, 1950年5月
	太田博太郎	1951	古代住居の系統について, 日本建築学会, 建築雑誌, 775号, 1951年7月
	三田克彦	1953	「えつり」と「こまい」 - その語源とアイヌ住居の外殻構造 -, 日本建築学会論文集, 第46号, 1953年3月
	小倉強	1955	東北の民家, 相模書房, 1955年
	大林太良	1956	アイヌ家屋の系統に関する一試練 - ketun-ni - について, 民族学研究, 1956年12月
	杉本尚次	1969	日本民家の研究, ミネルヴァ書房, 1969年9月
	越野武	1984	北海道の住宅の歴史, 寒地建築教材 概論編, 1984年
13C前後 ~ 18C中期	小林孝二	2007	アイヌ文化期の平地住居跡に関する基礎的研究 - 発掘資料から見たアイヌ民族住居の寸法体系に関する考察 -, 日本建築学会計画系論文集, 第615号, 2007年5月
18C中期 ~ 19C後半	遠藤明久	1992	アイヌ住居の構造に影響を与えた松前藩の施策, 日本建築学会大会梗概集, 1992年9月
	小林孝二	2006~07	近代以前の絵画資料に描かれたアイヌ民族の建築に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第608号, 2006年10月
			近代以前の絵画資料と発掘資料から見たアイヌ民族の住居に付属する建物に関する基礎的研究 - 熊檻と倉を中心とする住居に付属する建物の特徴 -, 日本建築学会計画系論文集, 第619号, 2007年9月
1860年代 ~ 1950年代	M・V・プラント	1865~67	ドイツ公使の見た明治維新, 新人物往來社, 1987年
	T・W・ブラキストン	1869	ブラキストン蝦夷地の旅, 北海道出版企画センター, 1985年
	H・W・シーボルト	1878	小シーボルト蝦夷見聞録
	イザベラ・バード	1878	日本奥地紀行, 平凡社, 2001年
	エドワード・S・モース	1882	日本の住まい内と外, 鹿島出版会, 1979年
	札幌(調査) 対雁村(調査) 室蘭(調査)	1883	旧土人衣食住其他取調書(写): アイヌ業績(一)(二), アイヌ史資料集(第二期)第五巻, 北海道出版企画センター, 1984年
	沙流川流域(調査)	1898	沙流川沿岸アイヌ状況: アイヌ聞取書, アイヌ史資料集(第二期)第七巻, 北海道出版企画センター, 1984年
	R・ヒッチコック	1888	アイヌ人とその文化, 六興出版, 1985年
	A・S・ランドー	1890	エゾ地一周一人旅, 未来社, 1985年
	平取(調査)	1907	平取町旧土人ノ現状: 殖民広報, 第35号, 1907年
	ヤン・ハヴラザ	1912~13	アイヌの秋日本の先住民族を訪ねて, 未来社, 1988年
	室蘭(調査)	1921	大正12年の室蘭アイヌ家屋: アイヌ聞取書, アイヌ史資料集(第二期)第七巻, 北海道出版企画センター, 1984年
	伏古(調査)	1926	伏古旧土人部落状態調: アイヌ史資料集(第二期)第三巻, 北海道出版企画センター, 1984年
	ジョン・パチラー	1927	アイヌの伝承と民俗, 青土社, 1995年
	アンドレ・ルロワ・グーラン	1938	アイヌへの旅, 大阪文化研究会, 1992年
	竹内芳太郎	1939	アイヌの選ぶ住宅(1), 民家 民家研究会, 第Ⅲ輯 2号, 1939年2月
			アイヌの選ぶ住宅(2), 民家 民家研究会, 第Ⅲ輯 3号, 1939年3月
	鷹部屋福平	1939~43	アイヌ屋根の研究と其構造原基體について, 北方文化研究報告, 第一輯, 1939年3月
			アイヌ住居の研究, 北方文化研究報告, 第二輯, 1939年10月
			アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 -, 北方文化研究報告, 第三輯, 1940年5月
			アイヌ住居の研究 - 日高平取方面に於ける地方性 -, 北方文化研究報告, 第五輯, 1941年7月
	杉野謙三	1940	アイヌ部落, 満州建築雑誌, 1940年
	金田一京助	1942	アイヌ芸術 木工編, 1942年

2-3 「アイヌ民族の建築物の起源・原形」を対象とした研究の概要

「アイヌ民族の建築物の起源・原形」を対象とした研究には、主に「北方的系統論と南方的系統論」の2つの流れによる論考と、北方的系統論と南方的系統論によらない各資料から得られた実態を基に考察した「アイヌ民族の建築物の起源・変遷」に関する論考がみられた（表 2-2）。

表 2-2 「アイヌ民族の建築物の起源・原形」を対象とした研究の概要

研究者	発表年	研究資料	論考	内容
石原憲治	1932	東北地方の農民住宅	北方的系統	アイヌ民族の住居の平面形の特徴と囲炉裏や空間領域のあり方に着目し東北・北陸の民家との同一性を指摘
関野克	1938	鐵山秘書(天明4年)	南方的系統	発表以後、中国地方の高殿(たたら)と呼ばれる建築の小屋組構造にアイヌ住居との類似性があるとして、他の論文に取り上げられる
棚橋諒	1938~39	現地調査	南方的系統	小屋組が垂木構造であり、内地の農民住居との類似性を指摘し、調査時点での住居は北方的要素よりは本州以南の農家建築に近い形態と報告
			平地住居の推移	名寄近郊の窓と柱の形態から、近い時期までアイヌ住居は軸部のない地上に合掌を建て、屋根に窓を開けた形態であることを暗示すると報告
鷹部屋福平	1939~43	現地調査	北方的系統	アイヌ住居の最大の特徴としてケトゥンニ構造を取り上げ、北方諸民族の持つ構造との類似性を指摘し、北方からの移住民族であると報告
			南方的影響	アイヌ住居の祖形はケトゥンニ構造で北方文化の要素が強いと指摘するが、それ以外的小屋組は本州以南の影響を受けた「変形」であると報告
村田治郎	1950	鷹部屋氏の研究	北方的系統	鷹部屋氏のアイヌ建築に関する論考にほぼ全面的に賛同しつつ、アイヌ民族の住居について、海外の周辺諸地域との比較研究の必然性を報告
知里真志保	1950	言語学(アイヌ語)	チセの起源	納屋を「セム」、母屋を「チセ」と呼び、母屋だけが「チセ」であることは、アイヌ小屋が本来は母屋だけであった事を示すものであると指摘
太田博太郎	1951	鐵山秘書(天明4年) 鷹部屋氏の研究	古代住居の系統	三脚叉首(ケトゥンニ)を根拠として、アイヌ住居と日本の古代住居の系統の関連性を報告
三田克彦	1953	小屋組の部材名称	チセの系統	アイヌ住居に関して、茅葺茅壁の外装は南方の仮装に過ぎず、アイヌ民族が南進により得た技術でその内部に北方的要素が包蔵されていると報告
小倉強	1955	三脚叉首構造	三脚叉首の起源	三脚叉首(ケトゥンニ)の発生過程をハセ(稲干し用の支柱)の構造原理に近いと報告
大林太良	1956	文化人類学	北方的系統	アイヌ民族の住居、特に小屋組の原形をテント構造に求め、その源流を北方ユーラシアに求める論考
杉本尚次	1969	地理学	北方的系統	三脚叉首構造に着目し、ユーラシア北方諸国の円錐形テントとの関連を考察し、北方系統の文化の影響を指摘
越野武	1984	既往研究	チセの系統	アイヌ民族の平地住居(チセ)の構造には、竪穴時代の名残があると報告
乾尚彦	1989	鷹部屋氏の研究	三脚叉首の起源	三脚叉首(ケトゥンニ)について、先史時代の記憶を残すものとし、その原形を先史時代の竪穴住居の小屋組構造に求める
宮澤智史	1989	既往研究	南方的影響	叉首組は、江戸時代に本州、四国、九州に広く分布し、江戸時代末から明治期にかけて、アイヌの家屋の小屋組にも影響を与えたと指摘
小林孝二	2008	発掘報告書	チセの変遷	付属屋(セム)を伴わない住居が先行、付属屋を伴う平面形が現れ、併存した時代が続く、付属屋を伴った住居が主体となったと指摘

(1) 北方的系統論と南方の系統論

北方的系統論と南方の系統論は、アイヌ民族の建築の起源がどの地域、どこに由来するものかを考察した論である。

以下に、代表的な論考を引用しまとめた。

〈北方的系統論〉北方文化の特徴があると考ええる論

- ・ 石原憲治氏は、論文（日本農民建築の研究，日本建築学会，建築雑誌，1932年10月）で、アイヌ民族の住居の平面形の特徴と囲炉裏や空間領域のあり方に着目し東北・北陸の民家との同一性を指摘している。
- ・ 鷹部屋福平氏は、論文（アイヌ屋根の研究と其構造原基體について，北方文化研究報告，第一輯，1939年3月）で、アイヌ住居の最大の特徴として小屋組のケトゥンニ構造を取り上げ、北方諸民族の持つ構造との類似性を指摘している。

〈南方の系統論〉南方文化の特徴があると考ええる論

- ・ 棚橋諒氏は、論文（アイヌの住居（1），民家 民家研究会，第Ⅱ輯12号，1938年12月）で、「小屋組が垂木であり、垂木が小屋組である処の構造は、真束を持たぬ合掌から発達する小屋組の原形であって、内地における簡素な農民住居にひろく行われる」とし、調査時点での現存する住居は北方的要素よりは本州以南の農家建築に近い形態と報告している。
- ・ 鷹部屋福平氏は、論文（アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 - ，北方文化研究報告，第三輯，1940年5月）で、アイヌ住居の祖形はケトゥンニ構造で北方文化の要素が強いと指摘しているが、それ以外的小屋組は、本州以南の影響を受けた「変形」であると報告している。

(2) 北方的系統論と南方の系統論によらない論

北方的系統論や南方の系統論によらない「アイヌ民族の住居の起源・変遷」は、各資料から得られた実態を基に考察した論である。

以下に、代表的な論考を引用しまとめた。

- ・ 棚橋諒氏は、論文（アイヌの住居（2），民家 民家研究会，第Ⅱ輯1号，1939年1月）で、名寄近郊のアイヌ住居には神窓以外に窓はなく、屋根に煙出し兼用の天窗がある事と軸部（柱）が低いことから、近い時期までアイヌ住居は軸部のない地上に合掌が建てられたもので、屋根に窓を開けた形態であることを暗示すると報告している。
- ・ 地里真志保氏は、論文（アイヌ住居に関する若干の考察，民族建築学，第14巻 第4号，

1950年5月)で、言語学の立場から、納屋を「セム」、母屋を「チセ」と呼び、母屋だけが「チセ」であることは、アイヌ小屋が本来は母屋だけであった事を示すものであると指摘している。

2-4 「13世紀前後から18世紀中期」を対象とした研究の概要

「13世紀前後から18世紀中期以前」を対象とした研究には、小林孝二氏の論文(アイヌ文化期の平地住居跡に関する基礎的研究 - 発掘資料から見たアイヌ民族住居の寸法体系に関する考察 -, 日本建築学会計画系論文集, 第615号、2007年5月)が該当した。平地式建築物について明らかにした内容は、平面規模、平面形の特徴、柱間の特徴、建築部材、建築行程の推測である(表2-3)。付属建築物については、7種類の柱配置形式、平面規模、柱穴の特徴である(表2-4)。

小林氏の論考は、発掘調査資料の柱穴を研究資料とした研究であることから、「13世紀前後から18世紀中期以前」のアイヌ民族の建築物の外観に関する特徴は明らかとされないが、実在したアイヌ民族の建築物の数値的なデータを基に明らかにした平面規模の特徴は、当時のアイヌ民族の建築物の特徴を指し示している。

以下に、「平地式建築物の特徴」と「付属建築物の特徴」に関する論考を引用しまとめた。

表 2-3 「13世紀前後から18世紀中期」を対象とした平地式建築物の特徴の概要

研究対象年代	研究者	発表年	研究資料	調査地域	柱間(数)の特徴	平面形の特徴		その他特徴
						セム	主屋規模	
13世紀前後 ～ 18世紀中期	小林孝二	2008	発掘調査 (柱穴)	平取 恵庭 千歳	(長辺) 奇数・偶数 ほぼ同数 (短辺) 奇数が多数 3か5に集中	セム無 全体の 60%強	小規模 20㎡前後 大規模 50㎡前後	<ul style="list-style-type: none"> ・セムを持たない主屋規模はセムを持たない主屋規模より小さい ・建築部材遺物の柱材は長さ142.3cm～240.0cm すべて自然木の丸太材である ・建設にあたって人体寸法を基本とする一定の基準寸法とこれを基礎とする寸法体系が存在した可能性が高い

表 2-4 「13 世紀前後から 18 世紀中期」を対象とした付属建築物の特徴の概要

研究対象年代	研究者	発表年	研究資料	調査地域	柱配置型式	件数	平面規模（平均）			柱穴構築方法				その他
							長辺	短辺	面積	打込	掘込	先尖	不明	
13世紀前後～18世紀中期	小林孝二	2008	発掘調査（柱穴）	平取恵庭千歳	4本柱型	14件	2.8m	2.1m	6.1㎡	9件	2件	1件	2件	・柱配置型式は、5本柱型式1例、7本柱型式3例、8本柱型式2例、内部複合形式2例も確認 ・倉は全ての柱配置型式、檻は4本柱型と関連性がある
					6本柱型	24件	3.2m	2.6m	8.7㎡	14件	5件	4件	1件	
					9本柱型	31件	3.5m	3.1m	11.0㎡	11件	6件	8件	6件	

（1）平地式建築物の特徴

①平地式建築物の平面規模

- ・主屋の規模は、小規模のもので 20 ㎡前後、大規模なもので 50 ㎡前後である。
- ・セムを接続する建築物は、セムを接続しない建築物より主屋面積が小さい傾向にある。

②平地式建築物の平面形

- ・セムを伴わない平地式建築物は、調査資料の 6 割強を占める。

③平地式住居のその他特徴

- ・主屋の長辺の柱間数は奇数及び偶数が同数程度存在するが、短辺については奇数が多数を占め、3 か 5 に集中している。
- ・建築部材遺物の柱材は、長さ 142.3cm～240.0cm で、全て自然木の丸太材であり、樹種はサクラ、コナラ、ナナカマド、ハンノキ、ハリギリを確認する^{注1)}。
- ・建設にあたって人体寸法を基本とする一定の基準寸法とこれを基礎とする寸法体系が存在した可能性が高い。

（2）付属建築物の特徴

①付属建築物の柱配置

- ・7種類の柱配置が確認でき、4本柱型と6本柱型と9本柱型の3形式で全体の89.6%を占める。
- ・檻は4本柱型との関連が高く、倉は4本柱型、6本柱型、9本柱型の全てと関連が高い。

②付属建築物の平面規模

- ・平面規模の平均は、4本柱型が6.1㎡、6本柱型が8.7㎡、9本柱型が11.0㎡である。

③付属建築物の柱穴

- ・ 柱穴の構築方法は、「打込み」が半数を占めるが、「掘込み」や「掘込んで打込む」ものも確認できる。

2-5 「18世紀中期から19世紀後半」を対象とした研究の概要

「18世紀中期から19世紀後半」を対象とした研究には、遠藤明久氏の論文（アイヌ住居の構造に影響を与えた松前藩の施策，日本建築学会大会梗概集，1992年9月）と小林孝二氏の論文（近代以前の絵画資料に描かれたアイヌ民族の建築に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第608号，2006年10月・近代以前の絵画資料と発掘資料から見たアイヌ民族の住居に付属する建物に関する基礎的研究－熊檻と倉を中心とする住居に付属する建物の特徴－，日本建築学会計画系論文集，第619号，2007年9月）が該当した。平地式建築物について明らかにした主な内容は、建築物の2類型、4種類の小屋組構造、建築行程、建築物の変遷（時代性のある変遷過程であり、2-3節とは別に扱った）についてである（表2-5）。付属建築物については、付属建築物の類型、檻の上蓋の分類、倉の特徴についてである（表2-6）。

以下に、「平地式建築物の特徴」と「付属建築物の特徴」に関する論考を引用しまとめた。

表 2-5 「18世紀中期から19世紀後半」を対象とした平地式建築物の特徴の概要

研究対象年代	研究者	発表年	研究資料	調査地域	小屋組の特徴				柱の特徴		平面形の特徴	変遷に関する考察
					組立法	構造	屋根形態	屋根材	柱・軒高	柱間(数)		
18世紀中期～19世紀前半	遠藤明久	1992	江戸期文献	北海道全般	記載なし	記載なし	記載なし	小径材	記載なし	記載なし	-	江戸期の変遷
	小林孝二	2008	絵画資料	類型1 和人地に近い蝦夷地	地上で組む	4種類	寄棟	草	身長より高い	記載なし	長方形セム有	アイヌ文化期から近世期の平面形の変遷過程
				類型2 東西蝦夷地の遠隔地	記載なし	記載なし	稜線が不明瞭	草 笹 樹皮	身長より低い	記載なし	長方形セム有	記載なし

表 2-6 「18 世紀中期から 19 世紀後半」を対象とした付属建築物の特徴の概要

研究対象年代	研究者	発表年	研究資料	調査地域	倉の特徴				檻の特徴		
					構造	屋根形状	仕上げ材料	その他	構造	柱数	上蓋の分類
18世紀中期 ～ 19世紀後半	小林孝二	2008	絵画資料	-	高床式分離型	大半が寄棟屋根 一部方形屋根	詞書より 茅・笹	鼠返しを描く事例あり	5種類	4本	①丸太を平行に並べる ②丸太を並べ上に石を置く ③板材を並べ上に石を載せる ④板材を並べて上に丸太を並べる

(1) 平地式建築物の特徴

① 平地式建築物の 2 類型とその特徴

・ 類型 1 (図2-1)

◇寄棟屋根で屋根高が高く、軒出があり、軒高が高く、壁は内傾あるいは垂直で壁に窓があり、セムは主屋と同程度の構造である。

◇小屋組構造は少なくとも4種類が推定できる

i 平又首による又首構造

ii 隅又首と斜又首および追又首の組み合わせによる又首構造あるいは三脚構造に類似する構造

iii 扇状に配置する垂木で棟木を支える垂木小屋組構造

iv 平又首を基本とし隅又首と追又首を組み合わせる構造

◇壁が内傾する住居を描く図からは、小屋組を地上で組み、その外周に柱を建て、小屋組を柱上に載せる構法の結果と推定できる。

◇柱、壁をほぼ垂直に描く図からは、柱を初めに建て、柱上で小屋を組み立てる構法が行われた可能性が推定できる。

◇外観形態は復元住居に類似する外観を持ち、比較的和人地に近い蝦夷地に建てられたものが多いと考えられる。

・ 類型 2 (図2-2)

◇変形屋根（稜線が不明瞭な屋根）で、軒出がなく、軒高が低く、壁は強く内傾し、壁に窓がなく、屋根に開口があり、入口は低い半円筒系屋根である。

◇外観形態は復元住居とは大きく異なり、西蝦夷地・東蝦夷地の中でも遠隔地に建てられたものが多いと考えられる。



図 2-1 類型 1 の外観

資料：蝦夷島奇観 乾／秦 憶丸 著 所蔵：函館市中央図書館

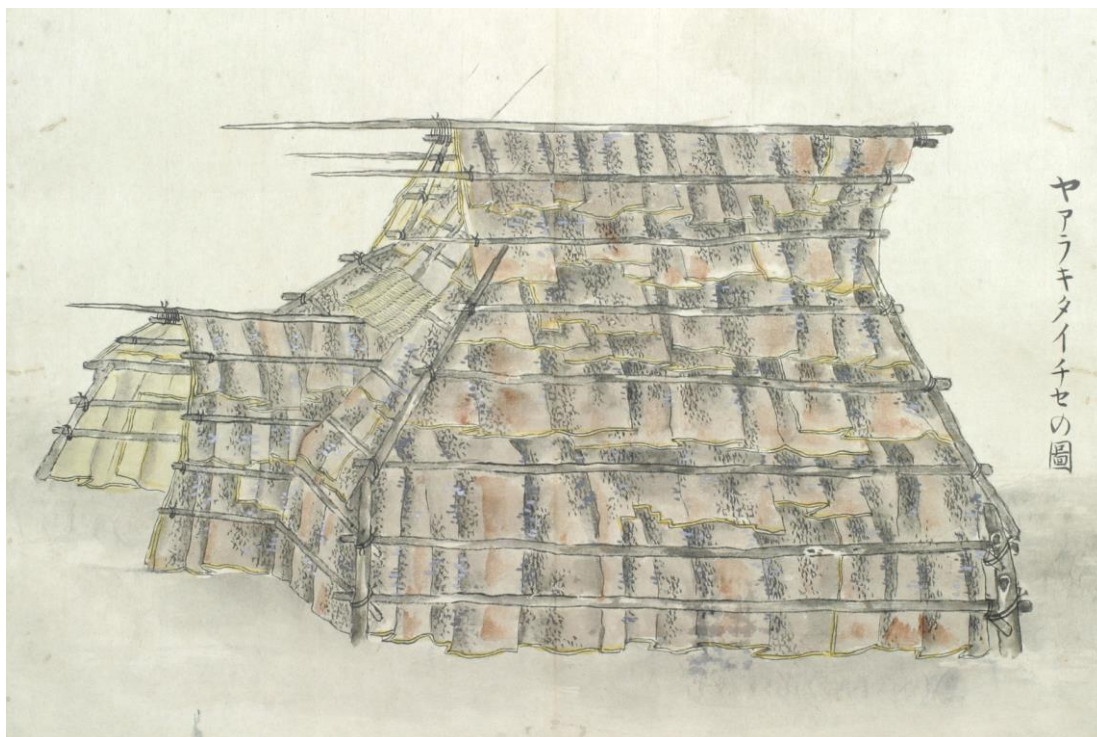


図 2-2 類型 2 の外観

資料：蝦夷嶋図説／秦 憶丸 著 所蔵：函館市中央図書館

②平地式建築物の建築行程（『蝦夷嶋図説』から見た建築工程）

i 材料を人体寸法によって計測する（図2-3）。



図 2-3 建築工程 i

資料：蝦夷嶋図説／秦 檉丸 著

所蔵：函館市中央図書館

ii 計測した材料を柱、桁、梁に加工する（図2-4）。柱の上部は股木を使用するか斧で矢筈状に加工（図2-5）、桁の交差部は相決り加工（図2-6）、又首尻も矢筈状に加工する（図2-7）。ノコギリは使用しない。



図 2-4 建築工程 ii

資料：蝦夷嶋図説／秦 億丸 著

所蔵：函館市中央図書館

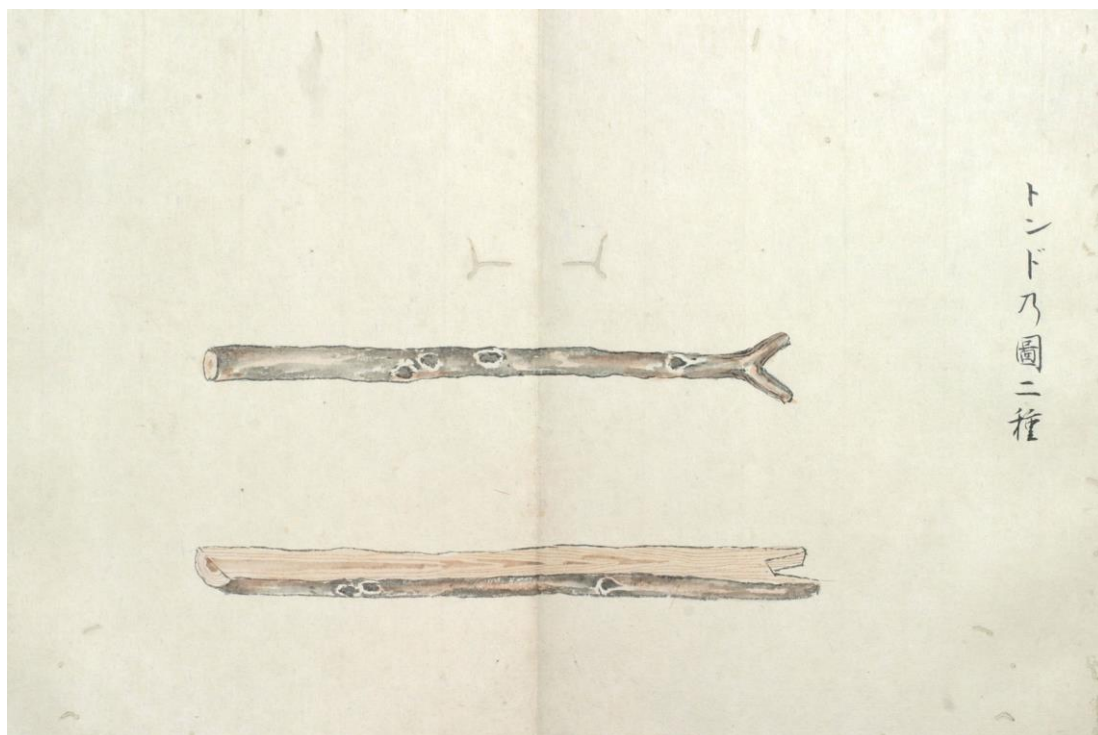


図 2-5 建築工程 ii による加工材 柱（図の上：股木の使用、図の下：矢筈状加工）

資料：蝦夷嶋図説／秦 億丸 著

所蔵：函館市中央図書館

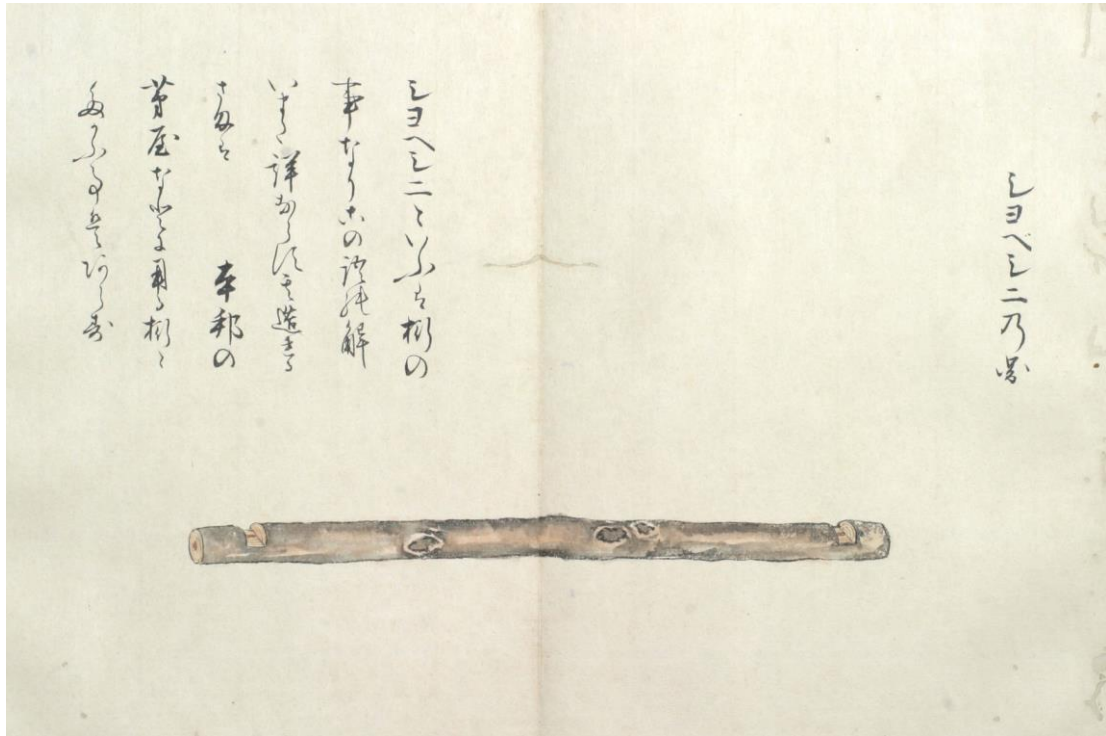


図 2-6 建築工程 ii による加工材 桁・梁（相決り加工）

資料：蝦夷嶋図説／秦 億丸 著

所蔵：函館市中央図書館

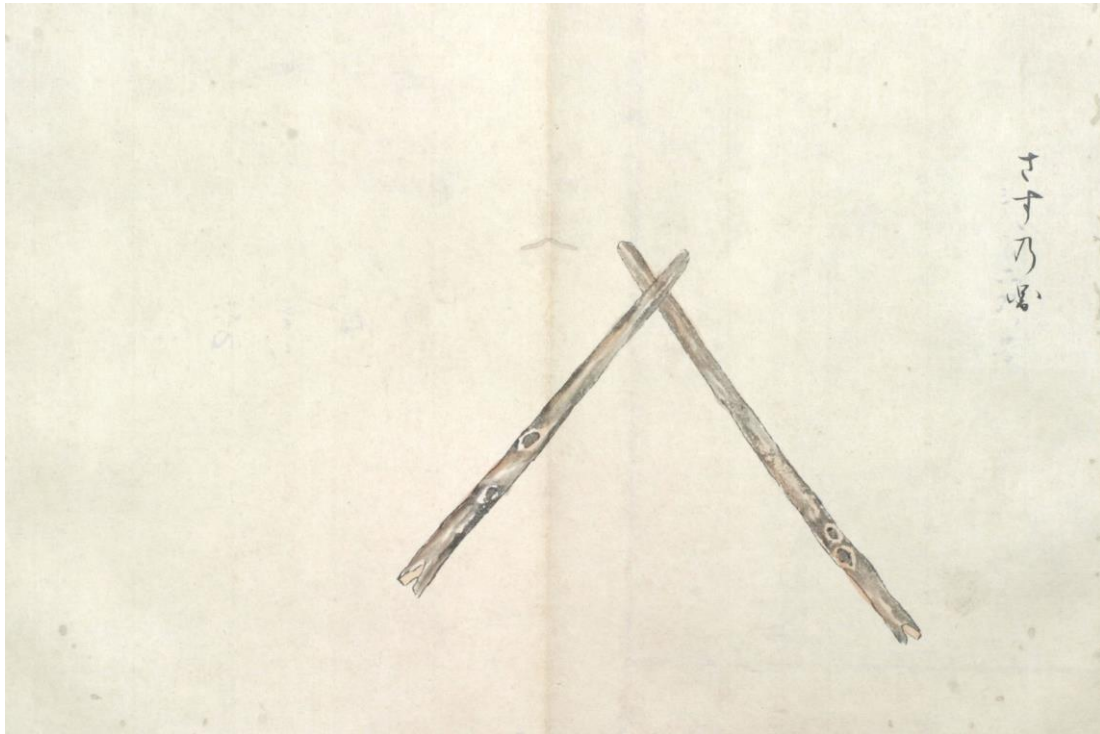


図 2-7 建築工程 ii による加工材 叉首（矢筈状加工）

資料：蝦夷嶋図説／秦 億丸 著

所蔵：函館市中央図書館

iii 又首はあらかじめ仮留め用の杭を打ち、平叉首を平行に並べて固定する（図2-8）。

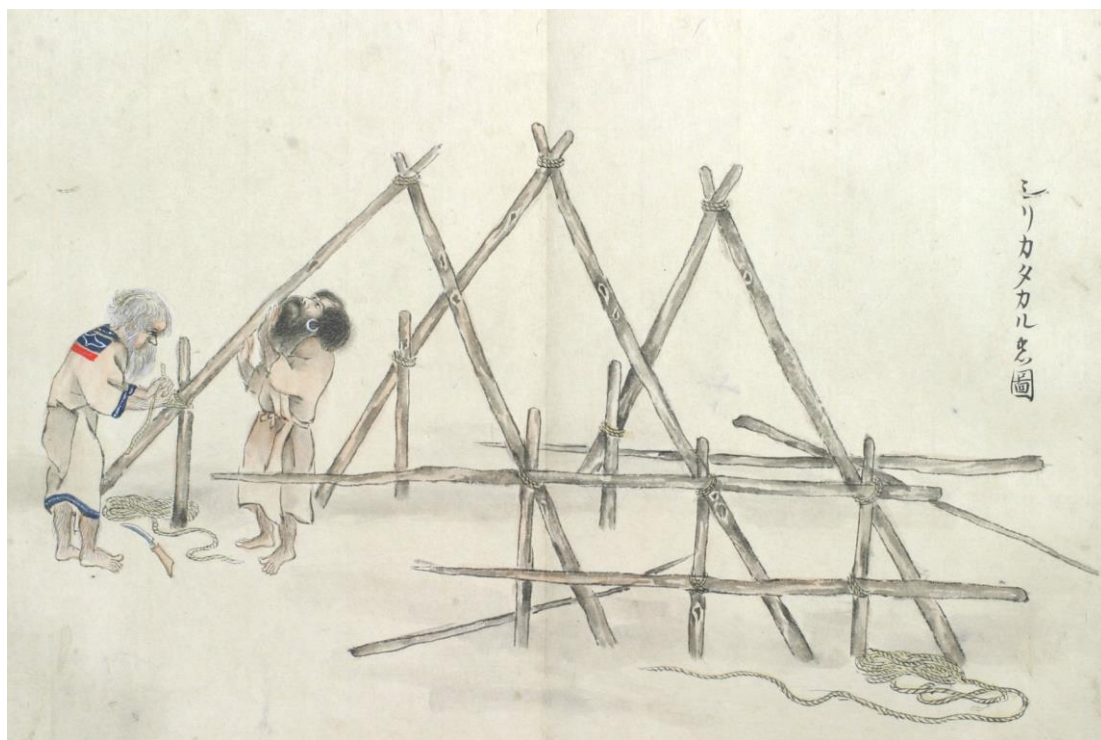


図 2-8 建築工程 iii

資料：蝦夷嶋図説／秦 億丸 著

所蔵：函館市中央図書館

iv 平叉首を5連建てた後、妻側に隅叉首、追い叉首を付加し、「えつり」を縛り付けて小屋組完成である。次に小屋組の外周に先端の尖った柱を打ち込む（図2-9）。

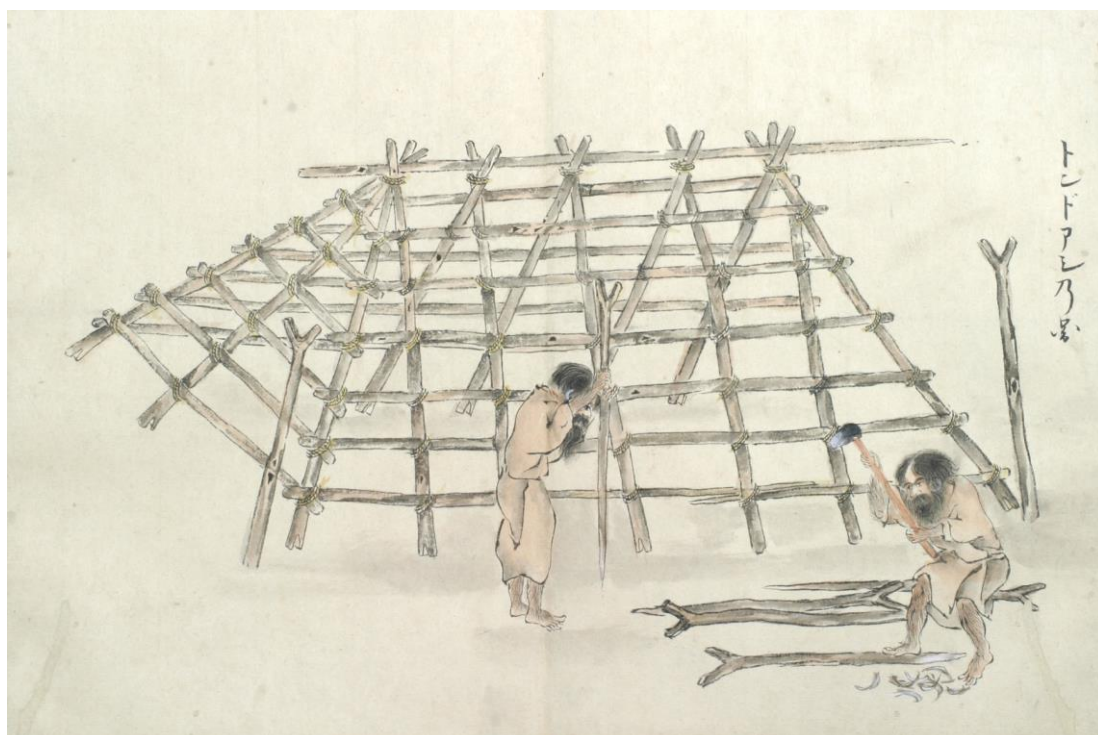


図 2-9 建築工程 iv

資料：蝦夷嶋図説／秦 憶丸 著

所蔵：函館市中央図書館

v 小屋組を柱の上部に持ち上げる（図2-10）。

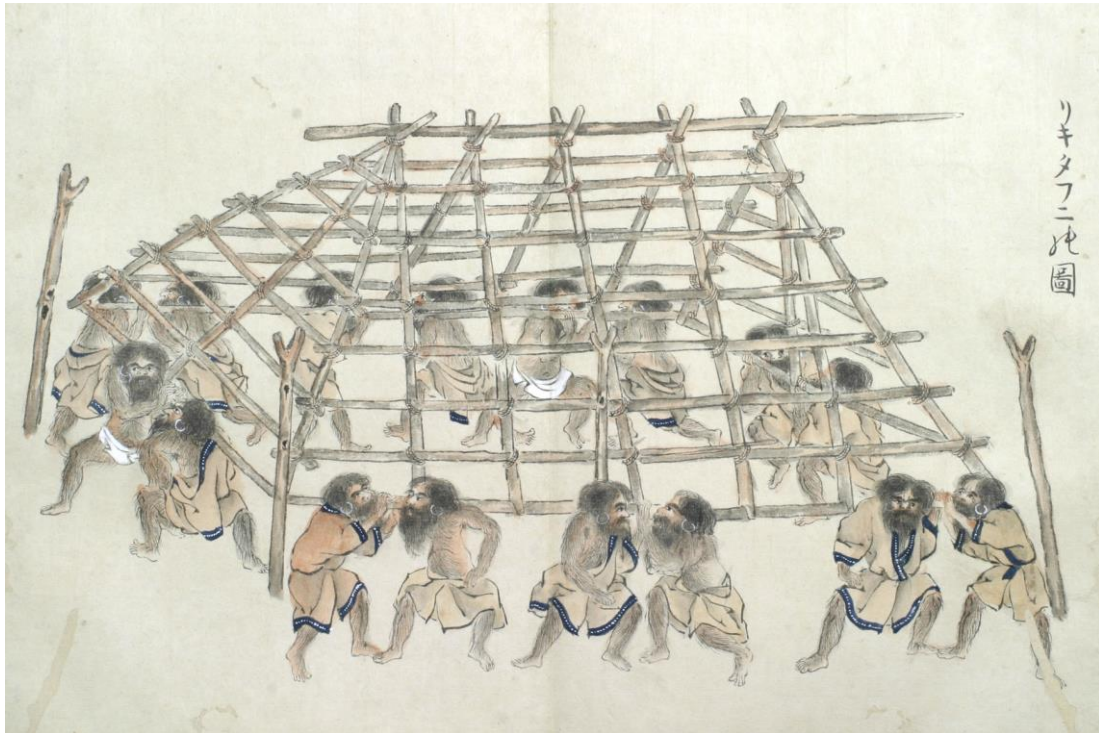


図 2-10 建築工程 v

資料：蝦夷嶋図説／秦 億丸 著

所蔵：函館市中央図書館

vi 屋根・壁を萱で葺き上げる（図2-11）。完成（図2-12）。



図 2-11 建築工程 vi

資料：蝦夷嶋図説／秦 億丸 著

所蔵：函館市中央図書館

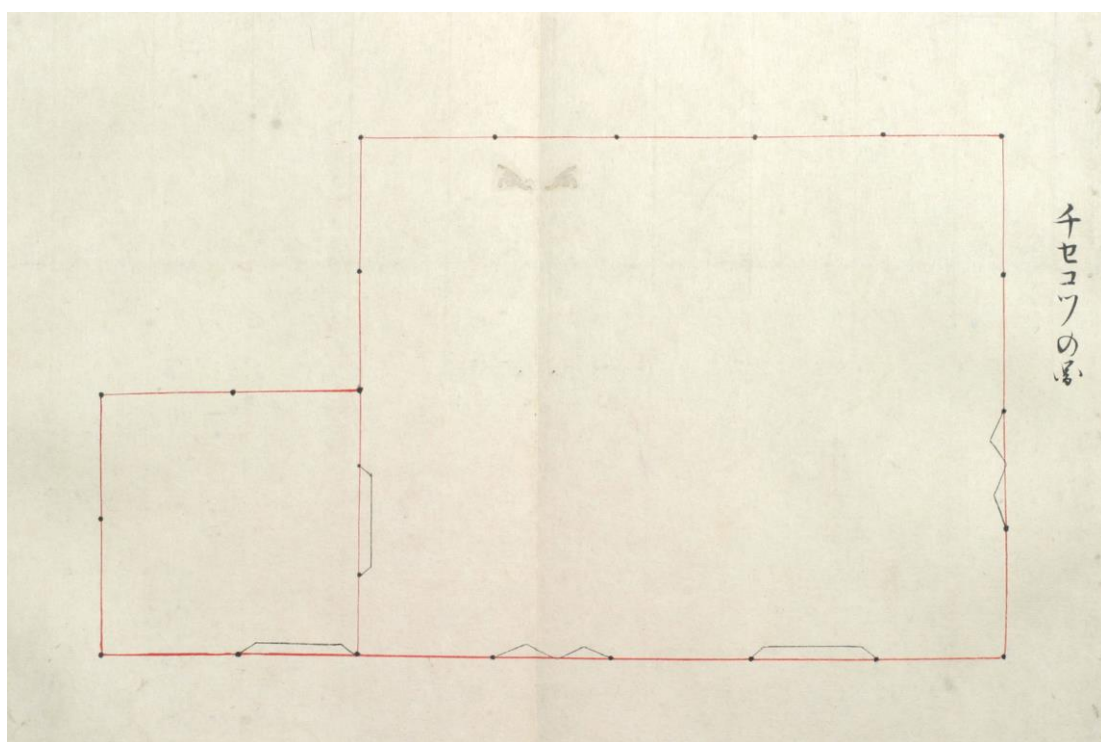
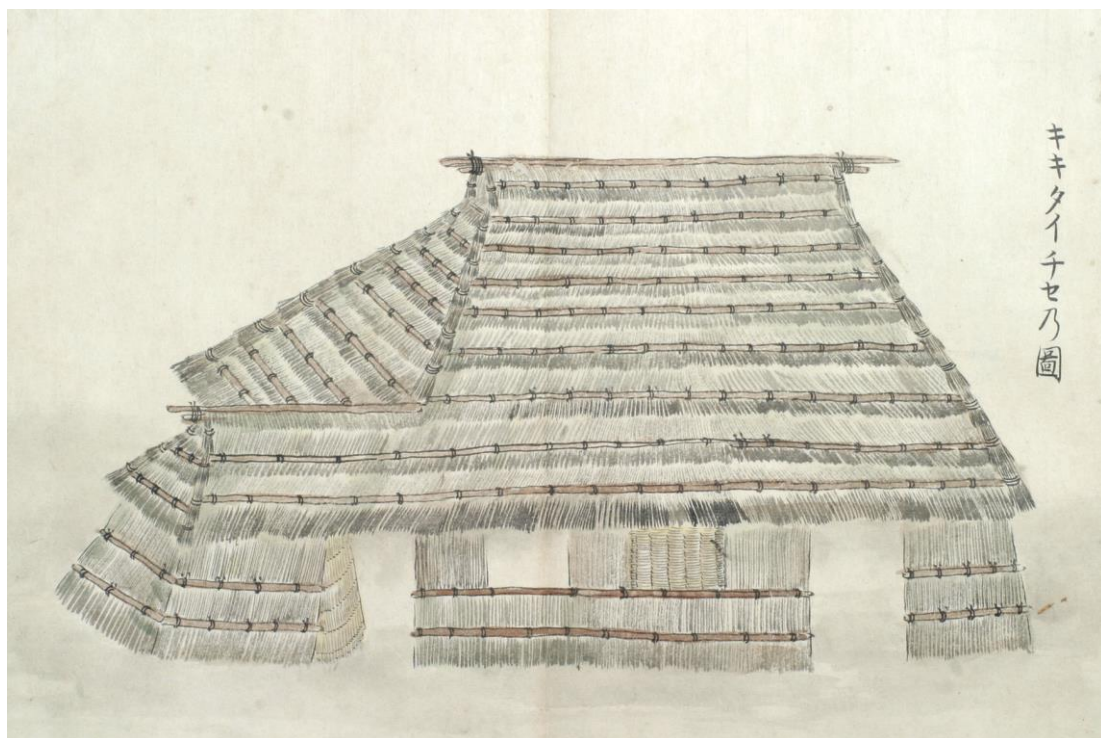


図 2-12 完成図（上：外観、下：平面形）

資料：蝦夷嶋図説／秦 檉丸 著

所蔵：函館市中央図書館

③建築物の変遷過程

- ・ 小林孝二氏は、発掘資料の柱穴跡から、付属屋を伴わない単室形住居が先行、その後、附加・分化を目的として付属屋を伴う平面形が現れ、単室形住居と付属屋を伴った住居が併存した時代が続き、絵画資料に見やれるように付属屋を伴った住居が主体となったと指摘している。
- ・ 遠藤明久氏は、江戸期以降のアイヌ住居の文献から、近世紀以降のアイヌ住居における割板材・大径材の不使用に関する解釈の問題を挙げ、和人は交易品として、鋼製品をアイヌ民族に渡すことは禁じ、アイヌ民族は鋼の付いた、のこぎり・かんなどの大工工具や造材器具を入手できなかった松前藩の制作が大きくかかわり、アイヌ住居の構造法は、この藩の規制の拘束によって発達を抑えられた構法であったと指摘している。

(2) 付属建築物の特徴

① 付属建築物の5種類の類型

- i 平地式・一体型・多柱建
- ii 平地式・一体型・隅柱建
- iii 高床式・一体型・隅柱建
- iv 高床式・一体型・（隅柱＋添柱）建
- v 高床式・分離型

② 檻の上蓋の4分類

- i 丸太を平行に並べるもの
- ii 丸太を並べ上に石を置くもの
- iii 板材を並べ上に石を載せるもの
- iv 板材を並べて上に丸太を並べるもの

③ 倉の特徴

- ・ 倉は総て高床式（高床式・分離型）で描かれている。
- ・ 柱間数は、比較的小規模なものについては熊檻と同様に柱間数1であるが、柱間数2のものも多く、平面のほぼ中央に柱（束）がある事例も確認できる。
- ・ 床の構造は、柱頂部を切りそろえ、柱頭上部に側桁を載せ、この上に床を敷くものが大半を占めるが、柱の上部が叉木でこれに側桁を載せ、床を敷く例も確認できる。

- ・ 一辺の柱間数 2 の事例では中央柱に大引を載せ、この上に床を敷く事例が多い。
- ・ 柱頂部と床組の間に板状の「鼠返し」を描く事例がある。
- ・ 外観は寄棟屋根が大半を占めるが、方形屋根も確認できる。
- ・ 仕上げ材料は、茅・笹と推定できる詞書きを伴った資料がある。

2-6 「1860 年代から 1950 年代」を対象とした研究の概要

「1860 年代から 1950 年代」の前半を対象とした研究には、外国人旅行記の記録や国の居住調査が該当した。旅行記及び居住調査には、平地式建築物及び付属建築物の形状や寸法等が記載されている。

研究対象年代の後半を対象とした研究には、現在までアイヌ民族の建築に関する研究の礎となっている鷹部屋福平氏と棚橋諒氏の研究や、竹内芳太郎氏、杉野謙三、金田一京助氏の研究が該当し、主に現存したアイヌ民族の建築物の現地調査を基に研究が行われた。研究内容は、主屋の小屋組構造に関する考察、平地式建築物及び付属建築物の形状や寸法等の調査報告となっている。なお、鷹部屋氏や棚橋氏らは、この実測及び聞き取り調査の結果を踏まえ、本章の 2-3 節に記載した「アイヌ民族の建築物の起源や建築物の原形」に関する論考を行った。

以下に、「平地式建築物の特徴」と「付属建築物の特徴」に関する論考を引用しまとめた。

(1) 平地式建築物の特徴

①外国人旅行記及び居住調査の記録

- ・ 屋根材：「茅」、「葦」、「藁」、「笹」、「昔は笹」、「草」、「木皮」、「板」
- ・ 外壁材：「藁」、「板」
- ・ 柱材：「白樺の丸太」
- ・ 床材：「葦」、「板」
- ・ 軒（梁）高：「頭がぶつかる高さ」、「1.3m」、「1.35m」、「約 1.5～1.8m」
- ・ 屋根高：「壁の 3 倍」、「約 6.7m」
- ・ 玄関（入口）高：「低い」、「約 1.1m」、「約 1.5m」
- ・ 柱間間隔：「約 1.2m」、「約 1.2～1.5m」
- ・ 平面形：「正方形」、「長方形」、「セムを有する」、「L 字型」
- ・ 煙出しの位置：「屋根の中央」

- ・ 主屋の平面規模：「200 人収容のチセがある」、「村長の家は他の家より少し大きい」、「約 $10.7 \times 7.6 \text{ m}^2$ 」、「 4×5 間（約 $7.3 \text{ m} \times 9.1 \text{ m}$ ）」、「約 $7.6 \times 7.6 \text{ m}^2$ 」、「 3×4 間（約 $5.5 \times 7.3 \text{ m}^2$ ）」、「約 $6.1 \times 6.1 \text{ m}^2$ 」、「約 $5.5 \sim 6.1 \text{ m}$ 四方」、「約 $5.2 \sim 5.5 \text{ m}$ 四方」「 2×3 間（約 $3.6 \times 5.5 \text{ m}^2$ ）」、「約 $3.0 \sim 3.7 \text{ m}$ 四方」
- ・ セムの平面規模：「約 $2.4 \sim 3.0 \text{ m}$ 角」
- ・ 爐の平面規模：「 3×3 尺（約 $91 \text{ cm} \times 91 \text{ cm}$ ）」
- ・ 建築行程：「屋根は地上で組み立てる」
- ・ 住居の配置：「南向き」

②実測調査及び聞き取り調査の記録

- ・ 平面規模：「 $5 \text{ 間} \times 6 \text{ 間}$ （大規模）」、「 $4 \text{ 間} \times 6 \text{ 間}$ （大規模）」、「奥行きは $5 \sim 6 \text{ m}$ 」
- ・ 屋根：「茅は三段重ね、段葺の段数は十三段が正式」、「太さ 20 cm ほどの束のまま葺足 45 cm 位に葺き、隅棟は小束のままで上部を覆い、棟は芝土砂を載せる」
- ・ 小屋組勾配：「 $0.6 \sim 0.7$ 寸」
- ・ 玄関高：「 1.8 m 」
- ・ 軒高：「 2.5 m 内外」
- ・ 軒出：「 30 cm 以内」
- ・ 窓・入口：「ガラスの利用」、「3 つある」、「 90 センチ幅に足りないほどの小窓で、床上 70 cm くらいの位置」、「片引戸が付き」
- ・ 窓位置：「神窓以外に窓はない（名寄）」、「屋根に煙出し兼用の天窗」、「南向き」
- ・ 内部：「天井はない」、「木の皮をはる」、「セム床は土間」、「主屋床は高さ 15 cm ほどの板張り」、「爐は室内の中央に位置し、幅 90 cm 、長さ 2 m 」

③平地式建築物の小屋組構造の 3 類型 9 種類

◇平叉首組系：平側の桁から棟木に直角に立つ叉首組を主体構造とする小屋組構造

- i 平叉首：平叉首数組と棟木だけによる小屋組
- ii 平叉首＋隅木：平叉首を両妻側に 2 組建て、隅木を掛ける小屋組
- iii 平叉首数組＋隅木：平叉首を 3 組以上建て、両妻の平叉首に隅木を掛ける小屋組
- iv 平叉首＋隅木＋斜材：平叉首を両妻側に 2 組建て、隅木を掛け、屋根面に斜材を付ける小屋組

◇斜叉首組系：桁から棟木に対して斜めに立つ叉首組を主体構造とする小屋組構造

- v 三脚叉首＋隅木：両妻側に三脚叉首（ケトゥンニ）を 2 組建て、その上に隅木を掛け

る小屋組

vi 斜叉首+隅木：斜叉首を両妻側に2組建て、その上に隅木を掛ける小屋組

vii 斜叉首+方杖：斜叉首を両妻側に2組建て、斜叉首の妻面上部に掛けたつなぎ梁に妻桁から支え斜材（方杖）を掛ける小屋組

◇垂木小屋組系：扇垂木状に配置した垂木全体が叉首材に替わって棟木を支える小屋組構造

viii 垂木：垂木と棟木だけの小屋組

ix 垂木+斜材：垂木と棟木で小屋組を造り、屋根面に斜材を付ける構造

（2）付属建築物の特徴

①外国人旅行記及び居住調査の記録

◇倉に関する記録

- ・ 床高は「1.35m」、「約1.8m」、「約1.8～2.4m」、「大人のアイヌ民族ぐらい」
- ・ 柱の本数は「6～9本」
- ・ その他、「木皮で覆う」、「鼠返しがある」

◇檻に関する記録

- ・ 床高は「約0.6～0.9m」
- ・ 焼き網式の檻

②実測調査及び聞き取り調査の記録

◇倉に関する記録のまとめ

- ・ 現存する地域：「白老」、「長万部」
- ・ 用途：「穀物倉で、一年の収穫物を貯える」、「鮭・鱒とうの燻製を貯蔵」
- ・ 分類：「高床式・一体型と高床式・分離型」、「オツマヌンプ（側壁のある高倉）とコウンパプ（側壁が無く坪み小屋を直に柱上にのせた高倉）」、「一本の木を曲げて柱と合掌を同一材で造った型式のものをピンネップ（男倉）と呼び、四注（寄棟）にしたものをマネップ（女倉）と呼ぶ」
- ・ 平面規模：「4m×4m」
- ・ 柱数：「4本（小規模）」、「8本、9本（大規模）」
- ・ 支柱高：「1.2m」、「1.5m」、「約1.8m」
- ・ 壁高：「2.0m」

- ・ 屋根形状：「寄棟屋根」、「切妻屋根」

◇檻に関する記録のまとめ

- ・ 用途：「小熊の飼育」
- ・ 支柱高：「0.8m」

③檻の建築行程

鷹部屋福平氏は、論文（アイヌ屋根の研究と其構造原基體について、北方文化研究報告、第一輯、1939年3月）で、古老による聞き取り調査から、檻の建築行程を記載している。鷹部屋氏が記した檻の建築行程は、以下の通りであった。

- i 柱（イクシベ）を四隅に建てる
- ii 柱の頂部に桁（セツニ・イッケウ）を平行に2本架ける
- iii その上に直角に床組（セツニ）を並べ土台を造る
- iv その上に校倉材（セッカウンニ）を組み合わせて積み上げる
- v 校倉材の端部を2本の木材ではさみ、上下を縛って固定

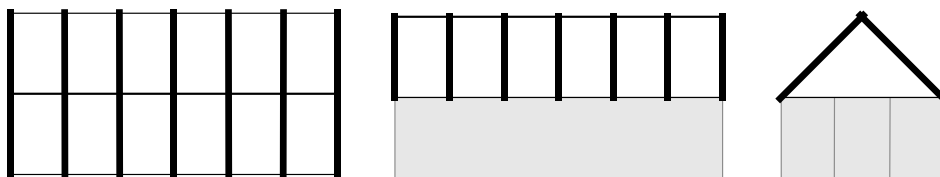
2-7 既往研究の整理

既往研究を建築史学の見地から見ると、「アイヌ民族の建築物の起源・原形」に関する研究は、第1章で記載した通り、歴史学の研究としては、歴史的事実が無く仮説にすぎないことが分かる。ただし、アイヌ民族の建築に関する研究としては、現代まで果たしてきた役割は大きかった。「13世紀前後から18世紀中期以前」、「18世紀中期から19世紀後半」を対象とした研究は、小林孝二氏の研究が中心であり、建築史学の研究として意義のある論考であった。「1860年代から1950年代」を対象とした研究は、記録資料として数値データを扱っているなど貴重であるが、建築物を総体的に語る記載が多く、全体像としてのアイヌ民族の建築物像は分かるが、単体が持つ建築物の姿は、読み取ることが出来なかった。また、伝統的という視点のもと研究が行われているため、「改良を加えたアイヌ民族の建築物」の記載は、ほとんど見られなかった。

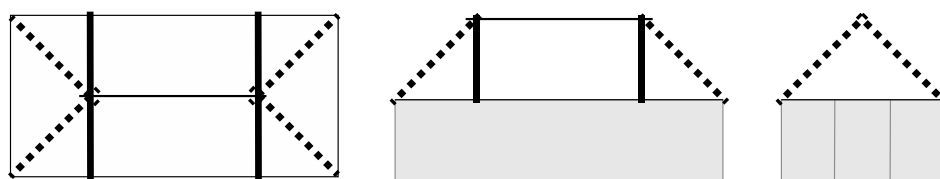
アイヌ民族の建築に関する研究は、工学及び構造力学の研究の功績が大きく、特に鷹部屋福平氏、棚橋諒氏、小林孝二氏の研究成果から、「平地式建築物の主屋屋根構造の分類（図2-13、図2-14、図2-15）」、「付属建築物の柱数による分類（図2-16）」、「付属建築物の構造による分類（図2-17、図2-18）」が明らかとなった。

平叉首組系：平側の桁から棟木に直角に立つ叉首組を主体構造とする小屋組構造

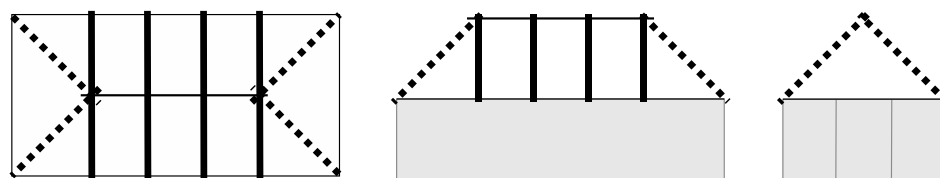
1. 平叉首：平叉首数組（太線）と棟木（細線）だけによる小屋組



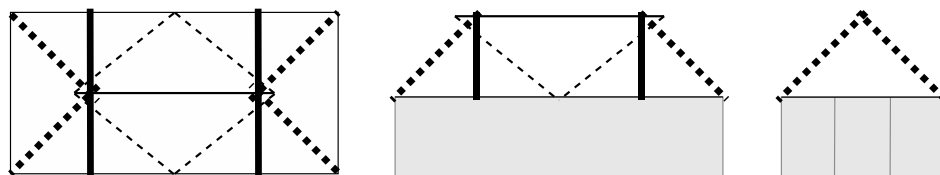
2. 平叉首+隅木：平叉首を両妻側に2組建て（太線）、隅木を掛ける（太点線）小屋組



3. 平叉首数組+隅木：平叉首を3組以上建て（太線）、両妻の平叉首に隅木を掛ける（太点線）小屋組



4. 平叉首+隅木+斜材：平叉首を両妻側に2組建て（太線）、隅木を掛け（太点線）、屋根面に斜材を付ける（細点線）小屋組



凡例

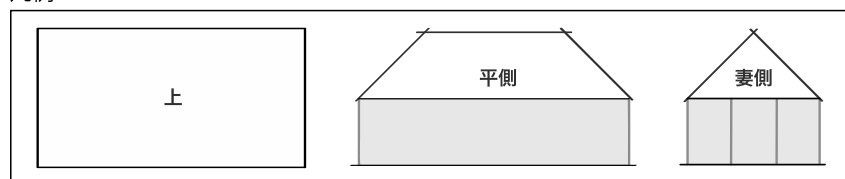
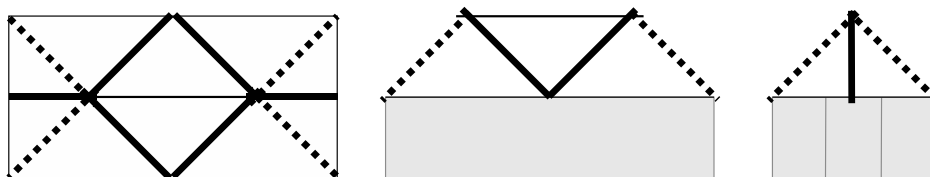


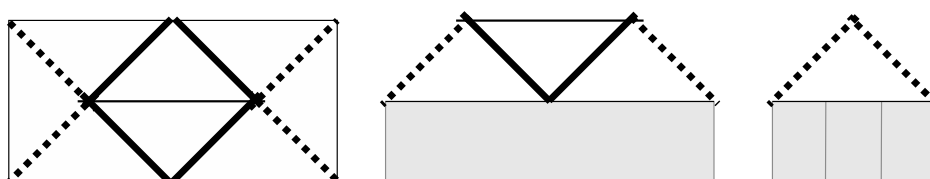
図2-13 平叉首組系の平地式建築物の分類

斜叉首組系：桁から棟木に対して斜めに立つ叉首組を主体構造とする小屋組構造

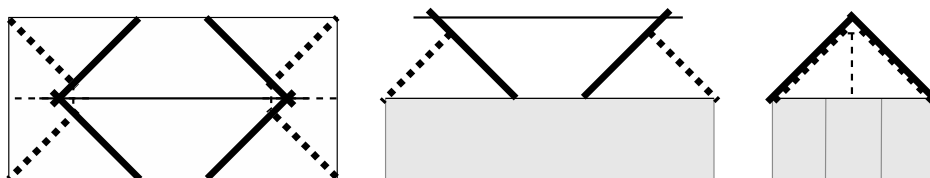
1. 三脚叉首+隅木：両妻側に三脚叉首を2組建て（太線）、その上に隅木を掛ける（太点線）小屋組



2. 斜叉首+隅木：斜叉首を両妻側に2組建て（太線）、その上に隅木を掛ける（太点線）小屋組



3. 斜叉首+方杖：斜叉首を両妻側に2組建て（太線）、斜叉首の妻面上部に掛けた「つなぎ梁（太点線）」に、妻桁から「支え斜材（方杖）」を掛ける（細点線）小屋組



凡例

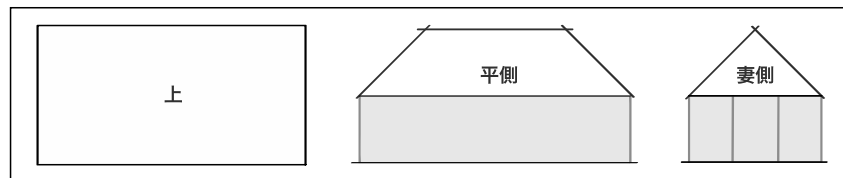
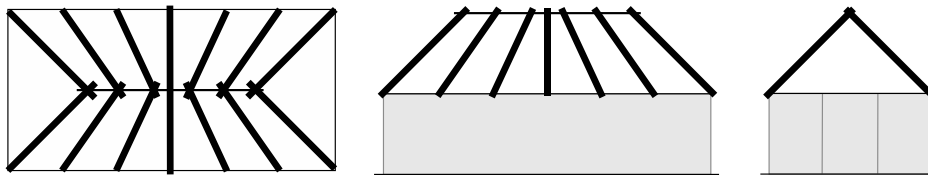


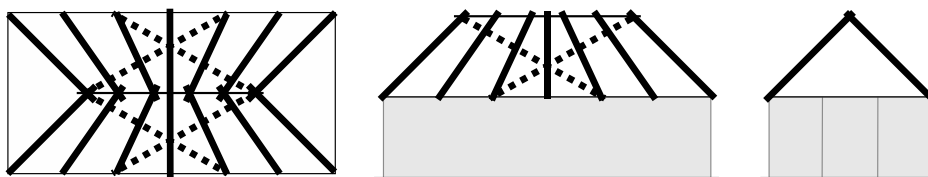
図2-14 斜叉首組系の平地式建築物の分類

垂木小屋組系：扇垂木状に配置した垂木全体が叉首材に替わって棟木を支える小屋組構造

8. 垂木：垂木（太線）と棟木（細線）だけの小屋組



8. 垂木+斜材垂木（太線）と棟木（細線）で小屋組を造り、屋根面に斜材（太点線）を付ける小屋組



凡例

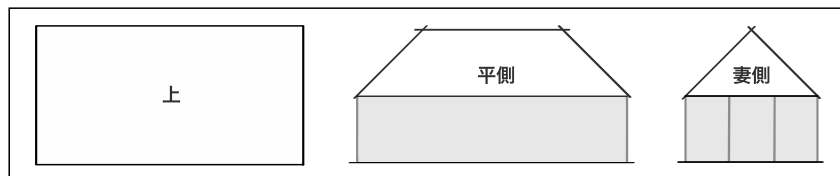


図2-15 垂木小屋組系の平地式建築物の分類

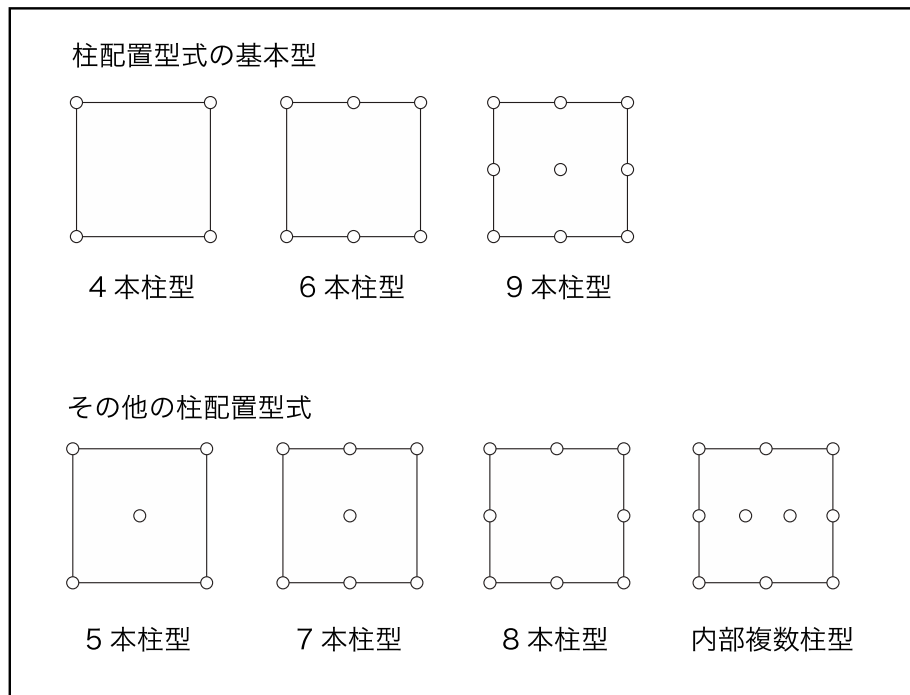


図2-16 柱数による付属建築物の分類

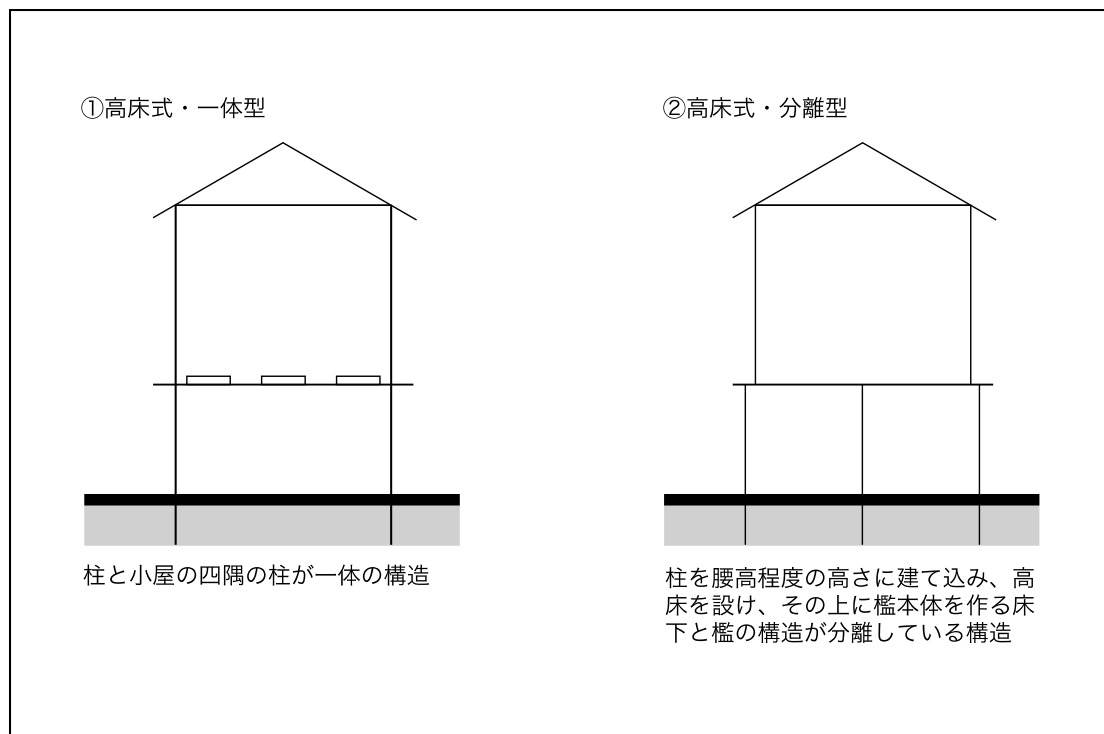
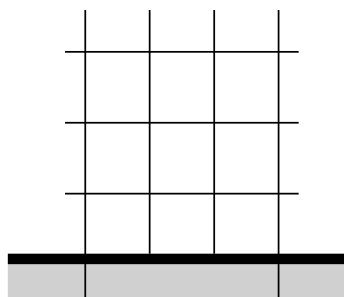


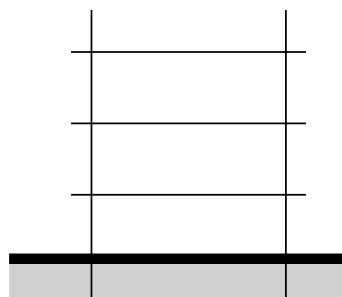
図2-17 構造による付属建築物（高床倉庫）の分類

①平地式・一体型（多柱建）



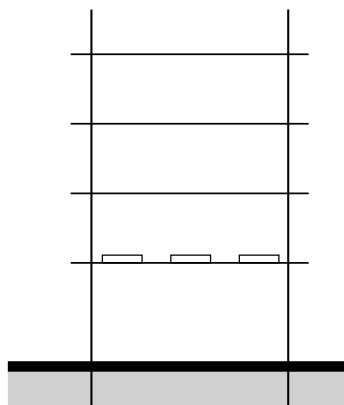
柱を四隅及び辺の中間に建て込み、地上から丸太を柱に直行させて組む構造

②平地式・一体型（隅柱建）



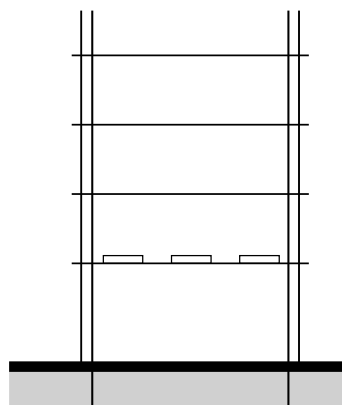
柱を四隅に建て込み、地上から周囲に丸太を井桁状に組む構造

③高床式・一体型（隅柱建）



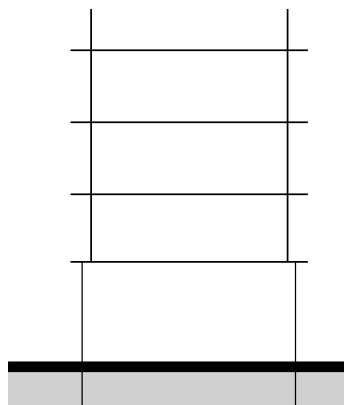
②の構造形式の床を高床とした構造

④高床式・一体型（隅柱＋添柱建）



③の構造型式に近く、隅柱が2本一対の構造

⑤高床式・分離型



柱を腰高程度の高さに建て込み、高床を設け、その上に檻本体を作る床下と檻の構造が分離している構造

図2-18 構造による付属建築物（檻）の分類

2-8 小結

研究対象年代別に既往研究を整理すると、建築史学の見地から系統的な研究が行われていた年代は、小林孝二氏が行った「13 世紀前後から 19 世紀後半」であり、それ以降については断片的な記録が中心であり、研究が十分に行われていなかった。本研究において、写真資料を基に研究が十分に行われていない 19 世紀後半以降（「1860 年代から 1950 年代」）のアイヌ民族の建築物の実態を明らかにすることは、通史としてアイヌ民族の建築をとらえることにおいて重要な課題であるとともに、アイヌ民族の建築史を通じて北海道建築史を 13 世紀前後まで遡ることができ、学術的意義が大きい。

もう一点、既往研究の整理から、研究対象は「伝統的なアイヌ民族の建築物」であり、「改良を加えたアイヌ民族の建築物」については研究の対象とされていなかった。本研究では、鷹部屋氏が残した「毛民青屋集^{注2)}」を基に、「伝統的なアイヌ民族の建築物」と「改良を加えたアイヌ民族の建築物」が共存した 1940 年の二風谷村と白老村の実態を明らかにする。「改良を加えた建築物」に対し、アイヌ民族の建築史の中で「一時代のアイヌ民族の建築物の形態である」と示すことは、アイヌ民族の建築物を今後、どのように伝承していくかを問う重要な社会的意義がある。それは、アイヌ民族の建築物を過去の遺物とするのではなく、アイヌ民族と和人が共存し現在の北海道建築を築き上げたという史観につながる考えである。

注

注1) 川辺に生えるケヤマハンノキと泥炭地のハンノキがあるので、ハンノキの表記はハンノキ（ハンノキ類）、

サクラは種名ではないのでサクラ（サクラ類）と表記の方がより正確である。

注2) 鷹部屋福平氏の私家版写真帖であり、集落単位で建築物を記録している。現在、所蔵先の確認できる「毛民

青屋集」は 5～6 集は二風谷村、7～8 集は白老村の記録であり、現在、北海道大学附属図書館北方資料室が所蔵する。

第3章 写真資料の検証

3-1 はじめに

アイヌ民族の建築写真資料は、日本に写真技術が伝わった19世紀後半頃から、アイヌ民族に関する研究者の資料、アイヌ民族を紹介する出版物、絵葉書などにみる事ができる。居住歴のある建築物が現存しない現在において、写真資料は当時の建築物の外観の特徴が分かる重要な資料である。しかし、写真資料は、それ自体では撮影年代、撮影場所等を特定することが難しく、また、異文化への興味から演出の可能性のある写真があるため、厳密な資料評価が必要である。

本章では、写真資料を基にした本研究の信頼性を裏付けることを目的に、これまでアイヌ民族の建築に関する研究で用いられてきた研究資料と写真資料との比較から写真資料の評価基準を設定し、資料の検証を行い、本研究資料を取りまとめた。

3-2 写真資料の評価基準の設定

(1) 既往研究で用いられた研究資料の評価と資料内容

これまでアイヌ民族の建築に関する研究に用いられた資料には、研究者による現存した建築物の実測調査、江戸期に描かれた絵画資料、近年行われている発掘調査の柱穴（以下、発掘資料とする）がある。

以下に、各研究資料の評価と資料内容を記した（表3-1）。

表3-1 各研究資料の概要

研究資料	研究概要				信憑性	資料内容				
	調査年 (成立年)	資料作製者 (研究機関)	調査地			意匠		構造		
			調査地名	建築配置		外観	内観	平面	立面	断面
実測調査	○	○	○	○	高い	○	×	▲	▲	○
絵画資料	○	○	○	×	やや高い	○	▲	▲	×	▲
発掘資料	▲	○	○	○	高い	×	×	○	×	×

○：分かる、▲：断片的、×：不明

①実測調査

実測調査は、現存した建築物の調査であるため、調査年、資料作製者、建築物の立地場所まで分かることから、調査年のアイヌ民族の建築物の実態を明らかにする資料として信頼性が高い。

資料内容について、意匠については外観の形状、構造については小屋組構造を中心とした断面の特徴が中心であり、平面規模やセムの有無といった平面の特徴や、柱高などの立面の特徴については断片的な記述であった。

②絵画資料

絵画資料を基に研究を行った小林孝二氏の研究資料をみると、資料の抽出は、成立年、画家名、調査地名を特定できる絵画に限定し行われた。実測調査と比べると誰の建築物を描いたのかを特定する事ができないため、成立年のアイヌ民族の建築物の実態を明らかにする資料として信憑性は劣るが、絵画資料が描かれた時代に建てられた建築物が現存しない現在において、絵画資料は、最も古い時代のアイヌ民族の外観が描かれた資料として有用である。

資料内容について、意匠については主に外観を描き、内観及び構造については、数点、描かれている（図 3-1、図 3-2）。

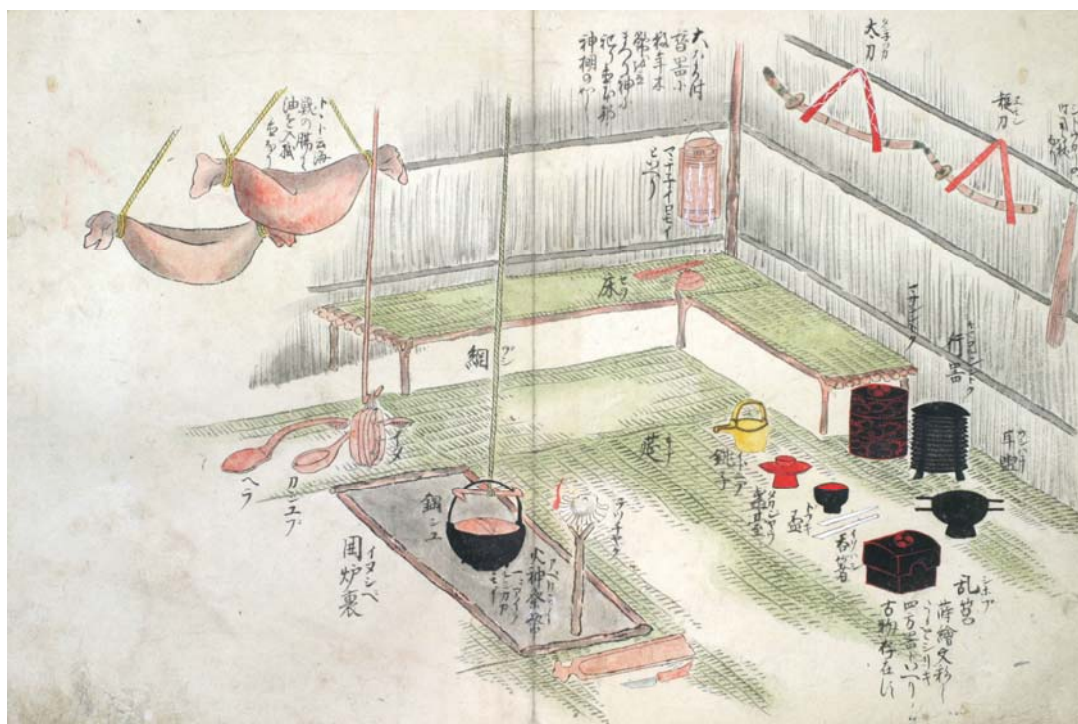


図 3-1 内観を描いた絵画資料

資料：蝦夷嶋図説／秦 憶丸 著

所蔵：函館市中央図書館

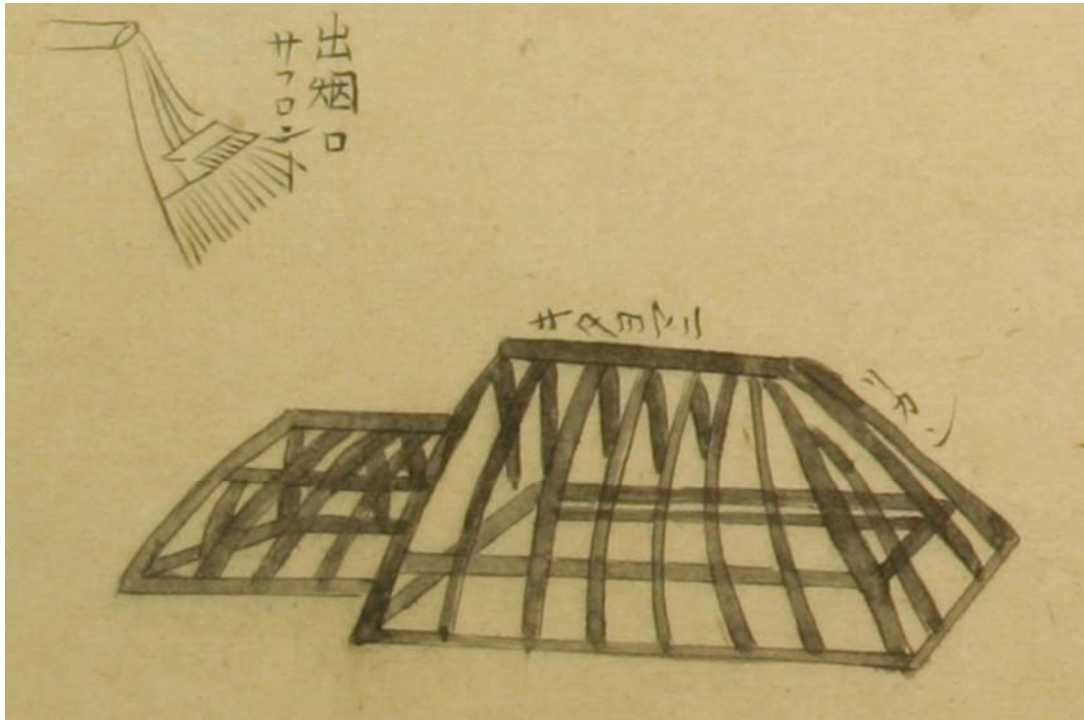


図 3-2 構造を描いた絵画資料

資料：蝦夷紀行図／谷元旦 作

所蔵：函館市中央図書館

③発掘資料

発掘資料は、建築物が存在した時代を大まかにしか断定することができないが、建築物の立地場所が分かり、調査年のアイヌ民族の建築物の実態を明らかにする資料として信頼性が高い。

資料内容について、意匠については、柱穴の記録のため、読み取る事ができない。構造については、柱穴の間隔から、平面形、平面規模、柱間等を読み取る事ができ、数値的なデータとして非常に価値がある。

(2)写真資料の評価基準の設定

写真資料の評価基準は、既往研究に用いられた資料の評価を基に設定した。既往研究の研究資料に共通することは、調査年、資料制作者、調査地が特定できる資料であった。この点から、写真資料の評価基準は、撮影年、撮影者または所持した研究者、撮影地が明らかとなっていることとした。さらに、写真資料の中には、異文化への興味から演出の可能性のある写真があるため、評価基準に商業用に撮影された絵葉書や印刷アルバムは除外し、研究及び資料収集用に撮影された原写真のみを用いる事を加え、資料の信頼

性の向上をはかった。

3-3 写真資料の所蔵先の選定

アイヌ民族の建築物を写す写真資料は、国内では北海道大学、東京大学、長崎大学等の大学機関、アイヌ民族関係の研究機関が所蔵している。海外においては、ロシア民族学博物館、オーストリア国立ウィーン民族学博物館が所蔵していることが確認できた。この内、撮影年、撮影者または所持した研究者、撮影地の分かる原写真を所蔵している研究機関は、北海道大学附属図書館北方資料室、北海道立アイヌ民族文化研究センター、ロシア民族学博物館、北海道立文書館の4箇所であった。

(1) 北海道大学附属図書館北方資料室

北海道大学附属図書館北方資料室は、長年、アイヌを含む北方系の民族の研究が行われ、専門的な整理が行われてきた。所蔵している原写真は、性質として年代の古いものが多く、詳しい撮影場所が不明なものが多いが、北海道帝国大学（現北海道大学）の研究者・関係者等によって撮影された。

本研究の評価基準を満たした写真資料は、以下の通りであった。

※以下で使用する資料番号及び資料名は、本研究で定めたものであり、所蔵先の資料名とは異なる。

①資料番号 A-01 鷹部屋福平研究資料

鷹部屋福平氏は、北海道帝国大学工学部土木工学科教授、工学博士であり、アイヌ民族の建築に関する研究の第一人者である。本資料は、鷹部屋氏が収集し論文に掲載した原写真の内、北海道大学附属図書館が現在所蔵している4枚の写真である。

- ・ 「チセの枠組み」（以下の論文に掲載。鷹部屋福平：アイヌ住居の研究，北方文化研究報告，第二輯，1939年10月）

※「チセの枠組み」について、北海道大学附属図書館北方資料室では、複写を所蔵している。現在、原本の所有者が確認できないため、本論文には著作権の関係から未掲載としている。北海道大学附属図書館北方資料室の目録は以下の通りである。

北海道大学北方関係資料総合目録：アイヌ関係写真アルバム

(アイヌ カンケイ シャシン アルバム)

【成立年】明治初年（明治初年）

【形態】32×27cm 収録写真 32 枚(複写 各種サイズ)

【請求記号】写真帖 35（北大北方資料室）

【収載目録名】明治大正期北海道写真目録（明治大正期の北海道・目録編）

鷹部屋氏は、本写真と蝦夷嶋図説に描がかれた構造（図 3-3）との類似性を指摘し、「アイヌ民族の生活の中には合掌式の構造方法が濃厚に織り込まれていたことを示す」と報告している。それは、蝦夷嶋図説の描がかれた 1823 年当時において、すでに純アイヌ式の構造（三脚叉首構造）以外の和人式の構造（合掌式構造）の影響が現れていたことを示している。

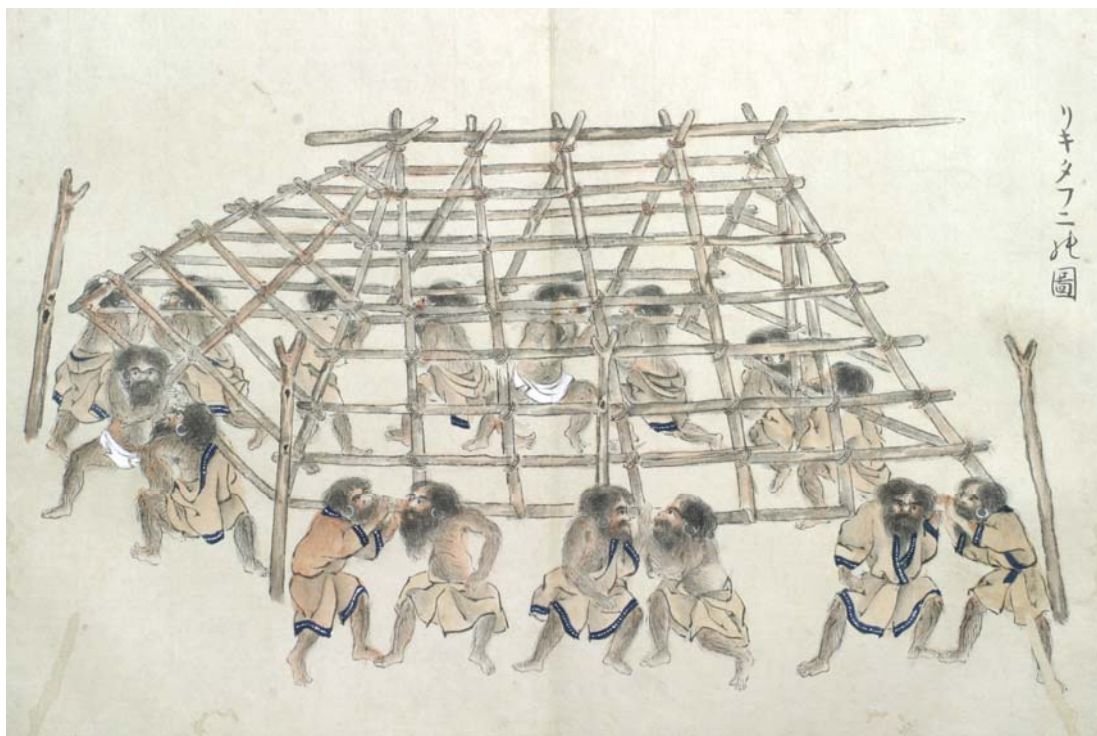


図 3-3 「リキタフニの図」

資料：蝦夷嶋図説／秦 憶丸 著

所蔵：函館市中央図書館

- ・ 「根室国標津村のアイヌ（チセ前での儀式）」（以下の論文に掲載。鷹部屋福平：アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 - ，北方文化研究報告，第三輯，1940 年 5 月）

鷹部屋氏は、本写真（図 3-4）について、「今日に於ても、千島に於て見ることが出来るといふ穴居生活陋に、其生活程度は大して相異を見ぬほどに簡単なものである」と報告している。



図 3-4 「根室国標津村のアイヌ（チセ前での儀式）」

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

- ・ 「釧路国阿寒郡セツリ川上流字ピラカアイヌ部落之景」（以下の論文に掲載。鷹部屋福平：アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 -，北方文化研究報告，第三輯，1940 年 5 月）

鷹部屋氏は、本写真（図 3-5）について、「釧路國阿寒郡セツリ川上流ピラカ土人部落のもので広野の中に立つ原始的な小舎ではあるが、既に和人のバラックの様なにほいがせぬでもない」と報告している。

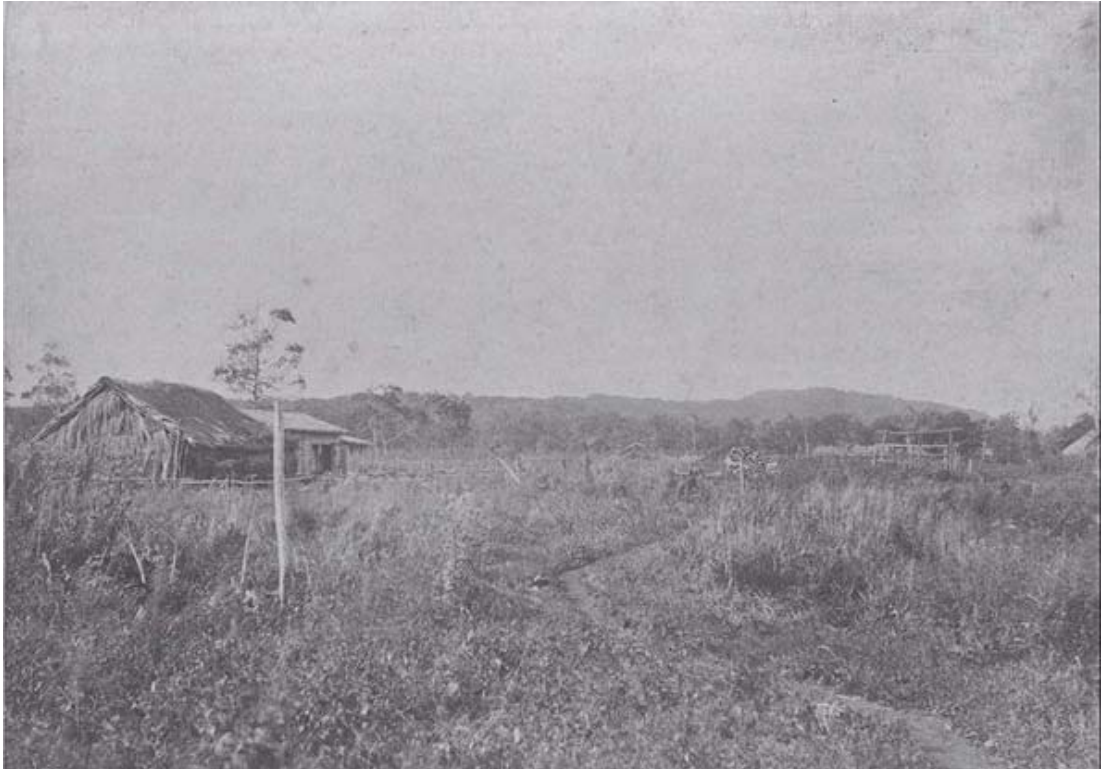


図 3-5 「釧路国阿寒郡セツリ川上流字ピラカアイヌ部落之景」

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

- ・ 網走郡美幌村アイヌ村落之景（以下の論文に掲載。鷹部屋福平：アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 -，北方文化研究報告，第三輯，1940 年 5 月）

鷹部屋氏は、本写真（図 3-6）について、「何れも一軒々々、四阿造りの小さなかまへを以つて続いて居るところは、昔日の面影がこれによつて偲ばれる」と報告している。



図 3-6 「網走郡美幌村アイヌ村落之景」

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

②資料番号 A-02 森竹竹一撮影資料

森竹竹一氏は、白老村出身のアイヌ民族の歌人である。本資料は、著書「若きアイヌの詩集」に掲載されている 2 枚の写真（図 3-7、図 3-8）であり、直筆原本と原写真を北海道大学附属図書館北方資料室が所蔵している。



図 3-7 「アイヌの輪舞」

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 3-8 「熊送り風景」

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

③資料番号 A-03 「毛民青屋集」5～6

鷹部屋氏は1938年以降、北海道各地に所在したアイヌ民族の集落の現地調査を行っており、「毛民青屋集」5～6は、1940年に行った二風谷村アイヌ集落の建築物の写真と平面図の記録資料である。鷹部屋氏は、「毛民青屋集」について「既に民族色は稀薄であるけれども、現状保存の目的をもって余は全村アイヌ民家を記録し後日に残すべき資料を作製した」と述べている^{注1)}。

資料は、調査票100枚、人名表1枚、絵画2枚で構成されている。調査票は、建築物の外観写真、中央に写る建築物の居住者名、寸法・窓・入口・方角・居住者名が記載された平面図からなる。人名表は、地図にアイヌ居住者名35名、和人居住者名3名、マンロー氏の診療所^{注1)}を記載したものである。絵画2枚には、アイヌ語の建築部材名と家屋小屋組構造が描かれている。

写真には、アイヌ民族の伝統的な建築物と考えられている茅壁茅葺屋根の寄棟建築物だけではなく、ガラス窓やマサ壁を設けた外観を持つ寄棟建築物や、改良住宅が収録されていた。この事から、1940年当時のアイヌ民族の建築物の実態を考察できる資料であった。また、平面図が添付し集落単位で建築物を収録している事から、これまで研究が行われてこなかった、集落内の建築物の外観や平面規模の比較ができる資料でもあった。ただし、資料を研究資料とするには、調査票の写真の建築物と居住者名の不一致、人名表に記載のない建築物が写真に写る等があるため、資料の検証が必要であった。

④資料番号 A-04 「毛民青屋集」7～8

「毛民青屋集」7～8は、「毛民青屋集」5～6と同様に鷹部屋氏の現地調査資料であり、1940年の白老村アイヌ集落の建築物の写真と平面図の記録である。

資料は、調査票112枚、人名表1枚からなる。調査票は、建築物の外観写真、中央に写る建築物の居住者名、寸法・窓と入口の位置・居住者名が記載された平面図からなる。人名表は、アイヌ居住者名24名を地図に記載したものである。

「毛民青屋集」7～8は、「毛民青屋集」5～6と同様に、資料の検証が必要であった。

(2) 北海道立文書館

北海道立文書館は、北海道関連の文書を筆頭に、多くのアイヌ民族の建築を写す写真資料、北海道の地図資料を所蔵している。

本研究の評価基準を満たす写真資料は、以下の通りであった。

①資料番号 A-05 A. A. ブリガム撮影資料

A. A. ブリガム氏は、札幌農学校農学科教師であり、明治 21 年から 5 年間、在職した。本資料は、ブリガム氏自身が在職中に撮影した原写真の複製であり、アイヌ民族の建築物を写す写真が 2 枚存在した。

※「A. A. ブリガム撮影資料」について、北海道立文書館では、複写を所蔵している。現在、原本所蔵者は、孫の A. P. ブリガム氏であり、著作権の関係から本論文未掲載としている。北海道立文書館の目録は以下の通りである。

資料名：ブリガム撮影写真帖

【請求記号】P-2/16

【作成者名】アーサー・A・ブリガム

【年次】1893（明治 26）

【形態】[31]p, 38cm

(3) ロシア民族学博物館

ロシア民族学博物館は、2600 点を数えるアイヌ文化のコレクションを所蔵している。
本研究の評価基準を満たす写真資料は、以下の通りであった。

① 資料番号 A-06 N. N. アンドレーエフ撮影資料

N. N. アンドレーエフ氏は船医であり、本資料は 1877 年から 1883 年にかけて沿海州、アムール州、ザバイカル州、サハリン島及び北海道において撮影された写真であり、北海道のアイヌ民族の建築物を写す写真が 6 枚存在した。

※「N. N. アンドレーエフ撮影資料」について、著作権の関係から本論文未掲載としているが、現在、書籍「ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録」（荻原眞子，古原敏弘，他：ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録，草風館，2007 年）において複写を確認することが出来る。

(4) 北海道立アイヌ民族文化研究センター

北海道立アイヌ民族文化研究センターは、アイヌ民族の文化に関する文献資料、音声・映像資料、文書資料を収集し、アイヌ民族の言語、歴史、芸能、生活技術等に関する調査研究を行っている。

本研究の評価基準を満たす写真資料は、以下の通りであった。

① 資料番号 A-07 久保寺逸彦研究資料

本資料は、アイヌ口承文芸研究の第一人者として知られる久保寺逸彦氏が研究に用いた写真であり、主に 1930 年から 1960 年代までの北海道、サハリン（樺太）での調査において撮影されたものである。この資料のうち、北海道のアイヌ民族の建築物を写した写真は、25 枚所蔵されていた。

※「久保寺逸彦研究資料」について、複製禁止資料のため、本論文未掲載としている。

以上、資料番号 A-01～07 の 7 つの写真資料を本研究の資料とした。特に、資料番号 A-03 及び A-04 の「毛民青屋集」は、平面図の添付、集落単位の収録と資料的価値が高い反面、調査票の写真の建築物と居住者名の不一致、人名表に記載のない建築物が写真に写る等があるため、資料の検証が必要であった。

3-4 「毛民青屋集」の検証について

「毛民青屋集」は、集落単位で収録されていることから、建築物と居住者名の特定を行うと各建築物間の相互位置関係が分かり、「毛民青屋集」と調査が行われた1940年当時の土地状況の分かる資料を合わせてみることで、特定した建築物の位置図（「毛民青屋集」5～6の場合）や土地区画図（「毛民青屋集」7～8の場合）の作製が可能となることが分かった。

このことから、「毛民青屋集」の検証は、建築物の位置図及び土地区画図の作製を基に行うこととした。その理由として、「毛民青屋集」の建築物と居住者の特定は、「毛民青屋集」を利用できる資料に変換すると同時に、位置図及び土地区画図の作製が可能となり、位置図及び土地区画図の作製は、建築物の立地場所が分かることから、表3-1に記した実測調査と同等の信頼性の高い資料となるからである。

資料の検証（位置図の作製）の基本手順は、以下のように行った。

手順(1)

人名表の名前の記載位置、平面図の名前、写真内容全てに整合性がみられる建築物を抽出し、それら建築物の所有者名の特定を行う。

手順(2)

所有者名を特定した建築物と同一写真に写し込まれている他の建築物、道路、畑、山等の地理的情報から総体的に相互位置関係と周辺状況を明らかにすることを繰り返す。

手順(3)

各建築物の所有者名を特定後、位置図の下地となる実測地図等の資料に、土地区画の分かる資料を用いて、特定した建築物を配置する。

以上の手順で、「毛民青屋集」の検証を行い、位置図の作製を行った。

3-5 「毛民青屋集」5～6の検証

3-4節に記した手順に従い、資料の検証を行った結果、「毛民青屋集」5～6は、各建築物の資料条件から建築物を4つに分類（下記の建築物a～建築物b）し、検証に用いた資料から、4つに分類した建築物の位置図を作製することができた。

以下に、検証資料、検証結果、位置図を記した。

(1) 検証資料（位置図作製資料）

① 「沙流郡平取村大字二風谷村土地連絡図^{注3)}」（以下、連絡図）

（資料-3 資 123 頁～資 165 頁参照）

連絡図は、1929 年に作製された、二風谷村全土の「原」、「畑」、「宅」、「未開地」、「道路」、「川」といった土地区画と土地面積が記入された実測図であり、現在収集可能な資料の中で最も 1940 年に近い年の土地状況図である（図 3-9、図 3-10）。

② 「日高国沙流郡二風谷村旧土人給与地図」（以下、給与地図）

給与地図は、1897 年の給与地にアイヌ人名が記入されている資料であり、鷹部屋氏の報告書^{注4)}の中に挿入されている。1940 年において、姓は、1897 年時と大きく変わらず、人名表の人名配列と共通性がみられた。

※「給与地図」について、プライバシーの観点から、本論文未掲載としている。

③ 「国土地理院所蔵空中写真^{注5)}」（以下、空中写真）

1936 年及び 1944 年撮影の空中写真は、現在国土地理院が所蔵する入手可能な二風谷村を写す空中写真の中、鷹部屋氏が調査した 1940 年に最も近い状況を写し込んでおり、建築物が存在した場所の把握ができた（図 3-11、図 3-12、図 3-13、図 3-14）。

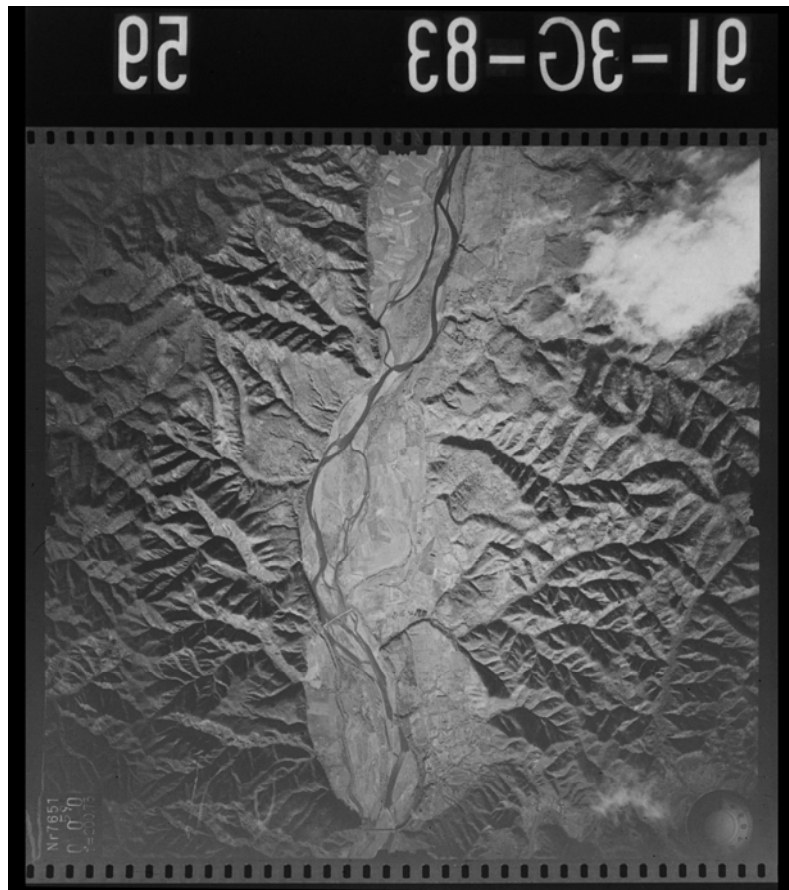


図 3-11 「二風谷村アイヌ集落空中写真（1936 年）」

出典：国土地理院



図 3-12 「二風谷村アイヌ集落空中写真（1936 年）集落部拡大」

出典：国土地理院

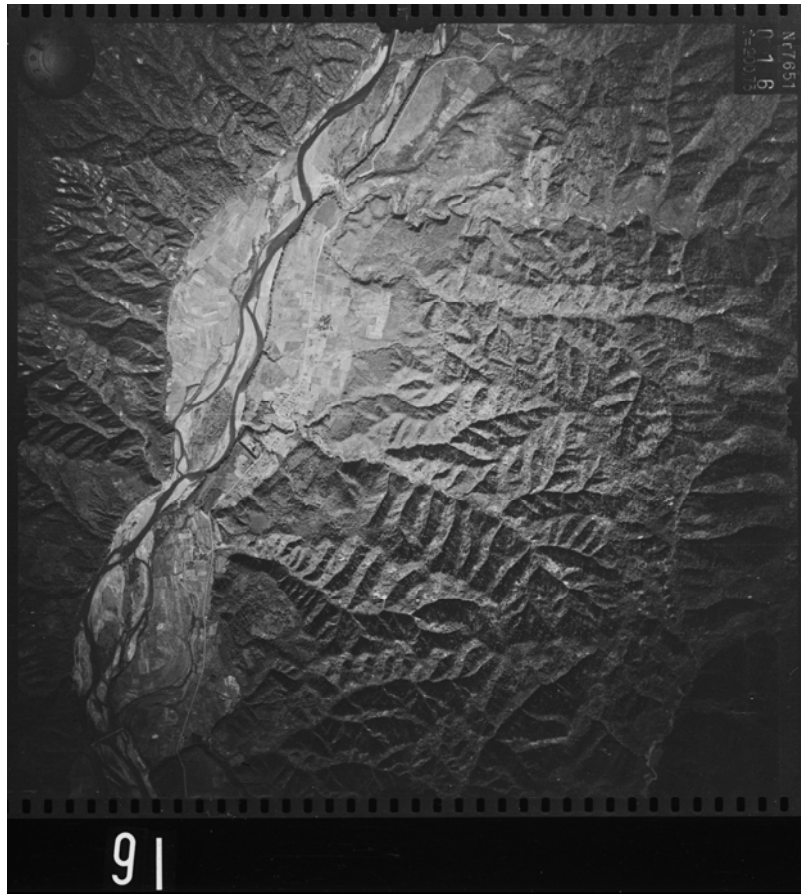


図 3-13 「二風谷村アイヌ集落空中写真（1944 年）」

出典：国土地理院



図 3-14 「二風谷村アイヌ集落空中写真（1944 年）集落部拡大」

出典：国土地理院

(2) 検証結果

①建築物の居住者名と立地場所の特定

建築物の居住者名と立地場所の特定の際、人名表へのアイヌ人名の記載の有無、平面図の添付の有無、建築用途の有無という記載内容が異なることから、各建築物を以下の4つに分類した(表3-2)。

i 「写真と平面図が存在し、建築用途が分かり、人名表にアイヌ人名が記載されている建築物」(以下、建築物 a)

人名表にアイヌ人名が記載されていることからアイヌ民族の建築物で、写真による外観の特徴の分析、平面図による平面規模の分析、位置の特定が可能な建築物である。

ii 「平面図はなく写真が存在し、建築用途が分かり、人名表にアイヌ人名が記載されている建築物」(以下、建築物 b)

人名表にアイヌ人名が記載されていることからアイヌ民族の建築物であり、写真による外観的特徴の分析、位置の特定が可能な建築物である。

iii 「平面図はなく写真が存在し、建築用途が不明で、人名表に記載のない建築物」(以下、建築物 c)

人名表に記載が無いためアイヌ民族の建築物か和人の建築物か特定できなく、また、写真端に小さく写り込む程度で外観的特徴を抽出しにくい、位置の特定が可能な建築物である。

iv 「その他の建築物」(以下、建築物 d)

アイヌ民族以外の建築物や学校等、当時の状況を把握できる建築物である。

資料の検証から、「建築物 a」が36件、「建築物 b」が10件、「建築物 c」が30件、「建築物 d」がアイヌ民族以外の建築物が3件と二風谷小学校、診療所、鳥居、米つき機^{注12)}、水飲み場が確認できた。

表 3-2 記載内容による建築物の分類

	立地場所	写真	平面図	用途	人名表
建築物a	●	●	●	●	●
建築物b	●	●	×	●	●
建築物c	●	●	×	×	×
建築物d	アイヌ民族以外の建築物(学校や診療所等)				

(3)位置図

調査票の内容は、表 3-3 にまとめ、各建築物の位置図（図 3-15）を作製し、資料の信頼性を裏付けた。

表記方法は、「建築物 a」を「□」、「建築物 b」を「■」、「建築物 c」を「▲」、「建築物 d」を「●」とした。「建築物 a」及び「建築物 b」の人名表に記載のある建築物について、アイヌ民族の所有者名は「01～35」の数字番号、和人所有者名は「A's～C's」の大文字アルファベット順で表記し、建築物は住居を「H」、物置を「Se」、厩舎を「St」、空家を「VH」と表記した。「建築物 c」の名称は、「a～z、aa～ad」の小文字アルファベットで表記し、「建築物 d」の名称については、二風谷小学校「●elementary school」のように表記した。

表 3-3① 「毛民青屋集」 5～6 の検証結果

調査票 番号	平面図 添付	調査票内容※1									
1n	<input type="checkbox"/> 01H	<input type="checkbox"/> 01H	▲c	▲b							
2n	<input type="checkbox"/> 02H	<input type="checkbox"/> 03H	<input type="checkbox"/> 02H	<input type="checkbox"/> 01H							
3n		<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 04H	■05Se	<input type="checkbox"/> 02H	<input type="checkbox"/> 03H	<input type="checkbox"/> 01H				
4n	<input type="checkbox"/> 03H <input type="checkbox"/> 04H	<input type="checkbox"/> 04H	<input type="checkbox"/> 03H								
5n	<input type="checkbox"/> 12H	■12St									
6n	<input type="checkbox"/> 14H	<input type="checkbox"/> 14H	■14Se								
7n		●14 drinking fountain									
8n	<input type="checkbox"/> 13H	<input type="checkbox"/> 14H	■14Se	<input type="checkbox"/> 13H							
9n	<input type="checkbox"/> 15H	■15VH	<input type="checkbox"/> 15H	▲h	<input type="checkbox"/> 14H	■14Se					
10n		<input type="checkbox"/> 16H	■15VH	<input type="checkbox"/> 15H							
11n		■16St	<input type="checkbox"/> 16H	■15VH	<input type="checkbox"/> 15H						
12n		■16St									
13n		■16St									
14n		■16St									
14(a)n		■16St									
15n	<input type="checkbox"/> 16H	▲i	<input type="checkbox"/> 16H	■16St	■15VH						
16n		■17H	▲k	▲j							
17n	<input type="checkbox"/> 18H	<input type="checkbox"/> 18H	■17H	●prishool							
18n	<input type="checkbox"/> 19H	<input type="checkbox"/> 19H									
19n		<input type="checkbox"/> 19H	■17H	<input type="checkbox"/> 18H							
20n		<input type="checkbox"/> 19H									
21n		<input type="checkbox"/> 20H	<input type="checkbox"/> 19H	▲l							
22n	<input type="checkbox"/> 20H	<input type="checkbox"/> 21H									
23n		<input type="checkbox"/> 21H	<input type="checkbox"/> 20H	<input type="checkbox"/> 19H							
24n		●A's H									
番号無※2		<input type="checkbox"/> 23H	<input type="checkbox"/> 23Se	●A's H							
25n	<input type="checkbox"/> 23H	<input type="checkbox"/> 23Se									
26n	<input type="checkbox"/> 23Se	▲p	<input type="checkbox"/> 23Se	<input type="checkbox"/> 28H	<input type="checkbox"/> 27H	<input type="checkbox"/> 26H	▲r	<input type="checkbox"/> 24H			
27n	<input type="checkbox"/> 24H	<input type="checkbox"/> 24H									
27(a)n1※3		<input type="checkbox"/> 24H									
27(a)n2※3		<input type="checkbox"/> 24H									
28n		<input type="checkbox"/> 23Se	▲s	▲u	▲v						
29n		<input type="checkbox"/> 26H									
30n		<input type="checkbox"/> 26H	▲r	<input type="checkbox"/> 24H	<input type="checkbox"/> 23H	<input type="checkbox"/> 23Se					
31n	<input type="checkbox"/> 25St	<input type="checkbox"/> 25St	▲s								
31(a)n		<input type="checkbox"/> 23Se	<input type="checkbox"/> 25St	▲s							
31(b)n		<input type="checkbox"/> 23Se	<input type="checkbox"/> 25St	▲p	▲s						
32n		<input type="checkbox"/> 25St	▲p	●B's H	▲s						
33n	<input type="checkbox"/> 27H	▲t	<input type="checkbox"/> 27H	<input type="checkbox"/> 26H	▲r	<input type="checkbox"/> 24H	<input type="checkbox"/> 23H				
34n		<input type="checkbox"/> 28H	<input type="checkbox"/> 27H	▲w	<input type="checkbox"/> 26H						
35n		<input type="checkbox"/> 29H	▲x	▲y	<input type="checkbox"/> 28H	<input type="checkbox"/> 27H	▲z				
36n	<input type="checkbox"/> 28H <input type="checkbox"/> 30St <input type="checkbox"/> 30Se	<input type="checkbox"/> 30St	<input type="checkbox"/> 30Se	▲z	<input type="checkbox"/> 33Se						
37n	<input type="checkbox"/> 29H	<input type="checkbox"/> 29H	▲x	▲w	▲y	<input type="checkbox"/> 28H	<input type="checkbox"/> 27H				
38n	<input type="checkbox"/> 33Se	▲ab	<input type="checkbox"/> 33Se	▲aa	<input type="checkbox"/> 29H	▲x	▲w	▲y	<input type="checkbox"/> 28H		
39n	<input type="checkbox"/> 34H <input type="checkbox"/> 34Se	<input type="checkbox"/> 34H	<input type="checkbox"/> 34Se	▲ac	<input type="checkbox"/> 33Se	<input type="checkbox"/> 29H	▲x	▲w	▲y	<input type="checkbox"/> 28H	
40n	<input type="checkbox"/> 35H <input type="checkbox"/> 35Se	<input type="checkbox"/> 35H									
41n		<input type="checkbox"/> 35Se	<input type="checkbox"/> 35H								
42n	<input type="checkbox"/> 22H	<input type="checkbox"/> 22H									

表 3-3② 「毛民青屋集」5～6 の検証結果

調査票 番号	平面図 添付	調査票内容※1・注記									
43n		<input type="checkbox"/> 22H									
44n		<input type="checkbox"/> 32H	▲z	▲ac							
45n	<input type="checkbox"/> 32H	<input type="checkbox"/> 32H	●B's H	(写真背面)							
46n		●C's H									
47n		●C's H									
48n		●torii	▲m								
49n		▲o	▲m								
50n		▲ad									
51n		▲i	■15VH	■16St							
52n	<input type="checkbox"/> 07H	<input type="checkbox"/> 10H	■09H	■08H	<input type="checkbox"/> 07H	■05Se	<input type="checkbox"/> 06St	■11H			
53n	<input type="checkbox"/> 10H	■10Se	<input type="checkbox"/> 09Se	<input type="checkbox"/> 10H	■09H	■08H	<input type="checkbox"/> 07H				
54n		■12S	<input type="checkbox"/> 12H								
55n	<input type="checkbox"/> 09Se	<input type="checkbox"/> 10H	■10Se	<input type="checkbox"/> 09Se	■09H						
56n		<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 03H	■05Se							
57n	<input type="checkbox"/> 06St	<input type="checkbox"/> 05H	■05Se	<input type="checkbox"/> 06St							
58n		■05Se	<input type="checkbox"/> 06St								
59n		■05Se	<input type="checkbox"/> 06St								
60n		<input type="checkbox"/> 06St									
61n		<input type="checkbox"/> 03H	<input type="checkbox"/> 04H								
62n		■05Se	<input type="checkbox"/> 06St	<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 03H						
63n		▲f	▲d	▲e	<input type="checkbox"/> 06St	■05Se	<input type="checkbox"/> 07H	<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 03H		
64n		▲e	<input type="checkbox"/> 06St	■05Se	<input type="checkbox"/> 07H	<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 03H	<input type="checkbox"/> 04H			
65n		<input type="checkbox"/> 06St	■05Se	<input type="checkbox"/> 07H	<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 03H	<input type="checkbox"/> 04H				
66n		<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 03H	<input type="checkbox"/> 04H							
67n		<input type="checkbox"/> 02H	<input type="checkbox"/> 01H								
68n		■15VH	■16St	<input type="checkbox"/> 15H	<input type="checkbox"/> 14H						
69n		■15VH	■16St	<input type="checkbox"/> 14H	▲H	<input type="checkbox"/> 13H					
70n		▲q	▲u	▲p	▲s	<input type="checkbox"/> 25S	▲r	▲t	<input type="checkbox"/> 24H	<input type="checkbox"/> 23Se	<input type="checkbox"/> 23H
71n	<input type="checkbox"/> 21H	<input type="checkbox"/> 19H	<input type="checkbox"/> 20H	<input type="checkbox"/> 21H							
72n	<input type="checkbox"/> 31H	●B's H	<input type="checkbox"/> 31H								
73n		▲d	▲e	▲g	<input type="checkbox"/> 06St	<input type="checkbox"/> 12H	<input type="checkbox"/> 07H	■05Se			
74n		<input type="checkbox"/> 01H	▲c	▲b							
75n		■05Se	<input type="checkbox"/> 03H	<input type="checkbox"/> 01H	▲c	▲b	▲a				
76n		<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 04H	■05Se	<input type="checkbox"/> 02H	<input type="checkbox"/> 03H	<input type="checkbox"/> 01H	▲c	▲b		
77n		▲g	<input type="checkbox"/> 06St	<input type="checkbox"/> 12H	<input type="checkbox"/> 07H	■05Se	<input type="checkbox"/> 05H				
78n		<input type="checkbox"/> 04H	<input type="checkbox"/> 03H	<input type="checkbox"/> 02H							
79n	<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 07H	■05Se	<input type="checkbox"/> 05H							
80n		▲o	▲n	▲m	●torii						
81n		▲q	<input type="checkbox"/> 25S	<input type="checkbox"/> 24H	<input type="checkbox"/> 23H						
82n		<input type="checkbox"/> 24H	<input type="checkbox"/> 23H	<input type="checkbox"/> 23Se							
83n	<input type="checkbox"/> 26H	▲v	▲u	<input type="checkbox"/> 26H	▲r						
84n		<input type="checkbox"/> 25St	▲p	<input type="checkbox"/> 23H	<input type="checkbox"/> 23Se	▲q					
85 ※4		●elementary school									
86 ※4		●rice mill machine									
87 ※4		●rice mill machine									
88 ※4		▲n	▲m	●torii	<input type="checkbox"/> 21H	<input type="checkbox"/> 20H	<input type="checkbox"/> 19H				
89 ※4		▲n									
90 ※4		▲n	▲m	●torii	<input type="checkbox"/> 21H						
91 ※4		●B's H									
92 ※4		<input type="checkbox"/> 24H	<input type="checkbox"/> 23Se	<input type="checkbox"/> 23H	●A's H						
93 ※4		●B's H									
94 ※4		●B's H									

※1 資料内容は、写真に写る建築物を左から表記 ※2 資料番号「24n」と「25n」の間に、資料番号のない「無番号」があり、その写真をさす ※3 資料番号「27n」と「28n」の間に、同一資料番号「27(a)n」が2枚あり、資料を分けるため順番に「27(a)n1」「27(a)n2」とした ※4 資料番号「85」～「94」は、鉛筆で薄く番号が記されている。

3-6 「毛民青屋集」7～8の検証

3-4 節に記した手順に従い、資料の検証を行った結果、「毛民青屋集」7～8は、各建築物の資料条件から建築物を3つに分類（下記に記した建築物A～建築物C）し、検証に用いた資料から、各建築物所有者の土地区画図を作製することができた。また、土地区画図の作製により、所有者の不明であった建築物Bの所有者を特定する事ができた。以下に、検証資料、検証結果、土地区画図、建築物Bの所有者の特定を記した。

（1）検証資料（土地区画図作製資料）

①「胆振国白老郡白老村字コタン旧土人下附実測図^{注6)}」（以下、下附実測図）

下附実測図は、1912年に作製された1200分の1の白老村アイヌ集落の実測図であり、給与地区画とその土地の所有者名が記入されている。下附実測図から、1912年における白老村アイヌ集落は、360坪（12間×30間）2区画と450坪（15間×30間）90区画と630坪（15間×42間）4区画の計96区画で整備された事が分かる。96区画の内67区画は給与地としてアイヌ民族に割り渡され、残りの29区画は所有者がいなかった。道路は、道路幅が5間の南北道路2本と東西道路3本を基本とし、その他、南北道路を繋ぐ道路幅3間の東西道路が1本あった。アイヌ民族以外の所有地は、96区画外の集落北部の国鉄室蘭本線線路付近にあった（図3-16）。

※「下附実測図」について、プライバシーの観点から、所有者名（資料右面）については、本論文未掲載としている。

②「新白老町史下巻-昭和初期白老アイヌコタン図^{注7)}」（以下、コタン図）

コタン図は新白老町史に添付されている白老村アイヌ集落の建築物とその所有者を記載した地図である。1937年までに白老村アイヌ集落内に存在した第2白老小学校や北海道庁立白老病院を記載していることから、コタン図は1926年から1937年の地図である。コタン図から、1926年から1937年における白老村アイヌ集落は、84名（世帯）のアイヌ民族の住居があった事が分かった^{注8)}。

※「コタン図」について、プライバシーの観点から、本論文未掲載としている。

③「国土地理院所蔵空中写真^{注9)}」(以下、空中写真)

1944 年撮影の空中写真は、現在国土地理院が所蔵する入手可能な白老村を写す航空写真の中、鷹部屋氏が調査した 1940 年に最も近い状況を写し込んでおり、建築物が存在した場所の把握ができる。下附実測図の全 6 本の道路は、空中写真においても同一の場所に見られ、6 本以外の道路は空中写真にも見られないので、道路割りは変化していなかった(図 3-17、図 3-18)。



図 3-16 「胆振国白老郡白老村字コタン旧土人下附実測図（資料左面）」

所蔵：北海道立文書館



図 3-17 「白老村アイヌ集落空中写真（1944 年）」

出典：国土地理院



図 3-18 「白老村アイヌ集落空中写真（1944 年）集落部拡大」

出典：国土地理院

(2) 検証結果

人名表に記載の有る 24 名の内、建築物の写真と平面図の収録があるのは 20 名であり、残りの 4 名については写真も平面図も収録されていなかった。収録されている 20 名は、住居 1 棟と納屋 1 棟の所有者が 2 名、住居 2 棟の所有者が 1 名、住居 1 棟の所有者が 17 名であり、建築物数の合計は、住居 21 件、納屋 2 件の 23 件で、23 件全てが「平地式の茅葺屋根の寄棟建築物（以下、建築物 A）」であった。その他、「平地式寄棟建築物」の周辺には、人名表に記載の無い「平地式の茅葺屋根の切妻建築物（以下、建築物 B）」7 件、人名表に記載の有る「住居に付属する建築物（以下、建築物 C）」として、「高床倉庫」が 4 件、「熊檻」が 6 件、その他「イナウ^{注 10)}」が 3 件あった。

(3) 土地区画図

調査票の内容は、表 3-4 にまとめ、各所有者の土地区画図（図 3-19）を作製し、資料の信頼性を裏付けた。表記方法は以下の通りである。建築物は、「建築物 A」を「□」、「建築物 B」を「▲」、「建築物 C（イナウも含む）」を「●」とした。人名表に記載のある「建築物 A」及び「建築物 C」について、アイヌ民族の所有者名は「01～20」の数字番号で表記し、用途別に住居を「H」、物置を「S」、高床倉庫を「P」、熊檻を「B」、イナウを「I」と表記した。「平地式切妻建築物」の名称は、「a～g」の小文字アルファベットで表記した。

土地区画図の内容として、1912 年の土地区画は、1912 年時に所有者のいない給与地区画（以下、区画「a」）、1912 年時にアイヌ民族に割り渡された給与地区画（以下、区画「b」）、1912 年時において給与地区画外の区画（以下、区画「c」）、アイヌ民族以外の所有地区画（以下、区画「d」）の 4 つであった。調査対象 20 名の居住地の特定について、調査対象 20 名の居住地を 1912 年の土地区画に当てはめると、居住地の区画は、18 名が 1 区画、2 名（居住者「01」と「03」）が 2 区画を利用しているため、合計 22 区画となった。22 区画の内 12 区画は、下附実測図の各区画の姓と人名表に記される所有者の姓の記名位置が一致する居住地（以下、居住地「A」）であり、1912 年と 1940 年で同じ所有者（家系）の区画「b」と考えられた。残り 10 区画の内、6 区画はコタン図の姓と人名表に記される所有者の姓の記名位置が一致する居住地（以下、居住地「B」）であり、4 区画は人名表のみに記載のある居住地（以下、居住地「C」）であった。人名表の所有者名が下附実測図に記されていない居住地「B」及び居住地「C」の計 10 区画の 1912

年の土地区画上の位置は、コタン図及び人名表の記名位置や、居住地の特定された建築物と居住地の特定されない建築物の両方が写り込む写真からの位置関係や、鷹部屋氏の調査後の撮影であるが 1944 年の空中写真に写る建築物の位置関係により行った。この 10 区画の 1912 年の土地区画上での内訳は、区画「a」が 2 つ、区画「b」が 4 つ、区画「c」が 4 つ（区画「c」の B-03、B-16、B-20、C-19 について、土地区画の坪数は分からないが 450 坪として土地区画図に表記している）であった。

表 3-4① 「毛民青屋集」 7～8 の検証結果

調査票番号	平面図添付	調査票内容 ※1			
1S	<input type="checkbox"/> 01H, ●01P ●01B-1, ●01B-2	<input type="checkbox"/> 01H			
2S		<input type="checkbox"/> 01H			
3S		●01B-1	●01B-2	<input type="checkbox"/> 01H	
4S		<input type="checkbox"/> 01H			
5S	<input type="checkbox"/> 01S	<input type="checkbox"/> 01S			
6S		<input type="checkbox"/> 01S			
7S		●01P	●01B-1		
8S		●01I	●01B-3		
9S		●01I	●01B-3		
10S		●01P	●01B-1	●01B-2	
11S		●01B-1			
12S		●01P			
13S		●01I			
14S	<input type="checkbox"/> 02H, ●02P, ●02B	<input type="checkbox"/> 02H	●02B		
15S		●02P	<input type="checkbox"/> 02H		
16S		●02B	●02P	<input type="checkbox"/> 02H	
17S		<input type="checkbox"/> 02H			
18S		●02I	<input type="checkbox"/> 01H		
19S		<input type="checkbox"/> 02H			
20S		<input type="checkbox"/> 02H			
21S		<input type="checkbox"/> 02H	●02I	<input type="checkbox"/> 01H	●02B
22S		<input type="checkbox"/> 02H			
23S		●02I	<input type="checkbox"/> 02H		
24S		<input type="checkbox"/> 02H			
25S		<input type="checkbox"/> 02H			
26S		<input type="checkbox"/> 02H	●02I	<input type="checkbox"/> 01H	
27S		<input type="checkbox"/> 02H	●02I		
28S	<input type="checkbox"/> 03H-1※2	<input type="checkbox"/> 03H-1			
29S		<input type="checkbox"/> 03H-1			
30S	<input type="checkbox"/> 04H	<input type="checkbox"/> 04H	▲a		
31S		<input type="checkbox"/> 04H	▲a		
32S		▲a	<input type="checkbox"/> 04H		
33S		▲a	<input type="checkbox"/> 04H		
34S	<input type="checkbox"/> 07H	<input type="checkbox"/> 07H			
35S		<input type="checkbox"/> 07H			
36S	<input type="checkbox"/> 05H, <input type="checkbox"/> 05S	<input type="checkbox"/> 05H			
37S		<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 05S		

表 3-4② 「毛民青屋集」 7～8 の検証結果

調査票番号	平面図添付	調査票内容 ※1		
38S		<input type="checkbox"/> 05H	<input type="checkbox"/> 05S	
39S		▲a	<input type="checkbox"/> 04H	
40S		View from <input type="checkbox"/> 05H ※3		
41S	<input type="checkbox"/> 09H	●09B	●09P	<input type="checkbox"/> 09H
42S		●09P	<input type="checkbox"/> 09H	
43S		<input type="checkbox"/> 09H		
44S	<input type="checkbox"/> 11H	<input type="checkbox"/> 17H	<input type="checkbox"/> 11H	
45S	<input type="checkbox"/> 13H	<input type="checkbox"/> 13H		
46S		<input type="checkbox"/> 20H	<input type="checkbox"/> 13H	
47S		<input type="checkbox"/> 13H	<input type="checkbox"/> 17H	
48S		<input type="checkbox"/> 13H	<input type="checkbox"/> 17H	
49S		unclear photograph ※4		
50S	<input type="checkbox"/> 14H	<input type="checkbox"/> 14H		
51S		unclear photograph ※4		
52S	<input type="checkbox"/> 08H	▲b	<input type="checkbox"/> 08H	
53S		<input type="checkbox"/> 08H	▲b	
54S	<input type="checkbox"/> 17H	<input type="checkbox"/> 17H		
55S		<input type="checkbox"/> 17H		
56S		<input type="checkbox"/> 17H		
57S		<input type="checkbox"/> 17H		
58S	<input type="checkbox"/> 19H	<input type="checkbox"/> 19H		
59S		<input type="checkbox"/> 19H		
60S		unclear photograph ※4		
61S		unclear photograph ※4		
62S		unclear photograph ※4		
63S		unclear photograph ※4		
64S		unclear photograph ※4		
65S		unclear photograph ※4		
66S	<input type="checkbox"/> 15H	▲c	<input type="checkbox"/> 15H	
67S		▲c	<input type="checkbox"/> 15H	
68S		unclear photograph ※4		
69S	<input type="checkbox"/> 16H	<input type="checkbox"/> 16H	▲d	▲e
70S		<input type="checkbox"/> 16H	▲d	▲e
71S		<input type="checkbox"/> 15H		
72S		●10B	●10P	
73S		<input type="checkbox"/> 10H	●10P	
74S	<input type="checkbox"/> 10H, ●10P, ●10B	<input type="checkbox"/> 10H		
75S		<input type="checkbox"/> 10H	●10I	

表 3-4③ 「毛民青屋集」 7～8 の検証結果

調査票番号	平面図添付	調査票内容 ※1			
76S		●10P			
77S		●10P			
78S		□10H	●10P		
79S		□10H	●10P		
80S		□12H			
81S		□12H			
82S	□12H	□12H			
83S		view from □12H ※3			
84S		□12H			
85S		□12H			
86S	□06H	□06H			
87S		□06H			
88S		unclear photograph ※4			
89S		unclear photograph ※4			
90S	□20H	▲q	□20H		
91S		▲f	□18H		
92S	□18H	▲f	□18H		
93S		unclear photograph ※4			
94S		unclear photograph ※4			
95S	□03H-2※2	□03H-2			
96S		□03H-2			
97S		●09B	●09P		
98S		●02B	●02P	□02H	●02I
99S		●01P	●01B-1	□02H	□01H
100S		□01H	●01B-1		
101S		unclear photograph ※4			
102S		●02P	□02H	□01H	●02B
103S		□01H			
104S		□01H			
105S		●01I			
106S		●01B-3	●01I		
107S		●01I			
108S		●01P			
109S		●01I			
110S		●01I			
111S		●01I			
112S		●01B-3	●01I		

※1 調査票内容は、写真に写る建築物を左から順に表記したものである。

※2 □03H-1 と □03H-2 は場所が離れているが居住者は同じである。

※3 調査票番号「40S」は建築物「□05H」から、調査票番号「83S」は建築物「□12H」から見た風景写真である。

※4 撮影場所の分からない写真を指す。

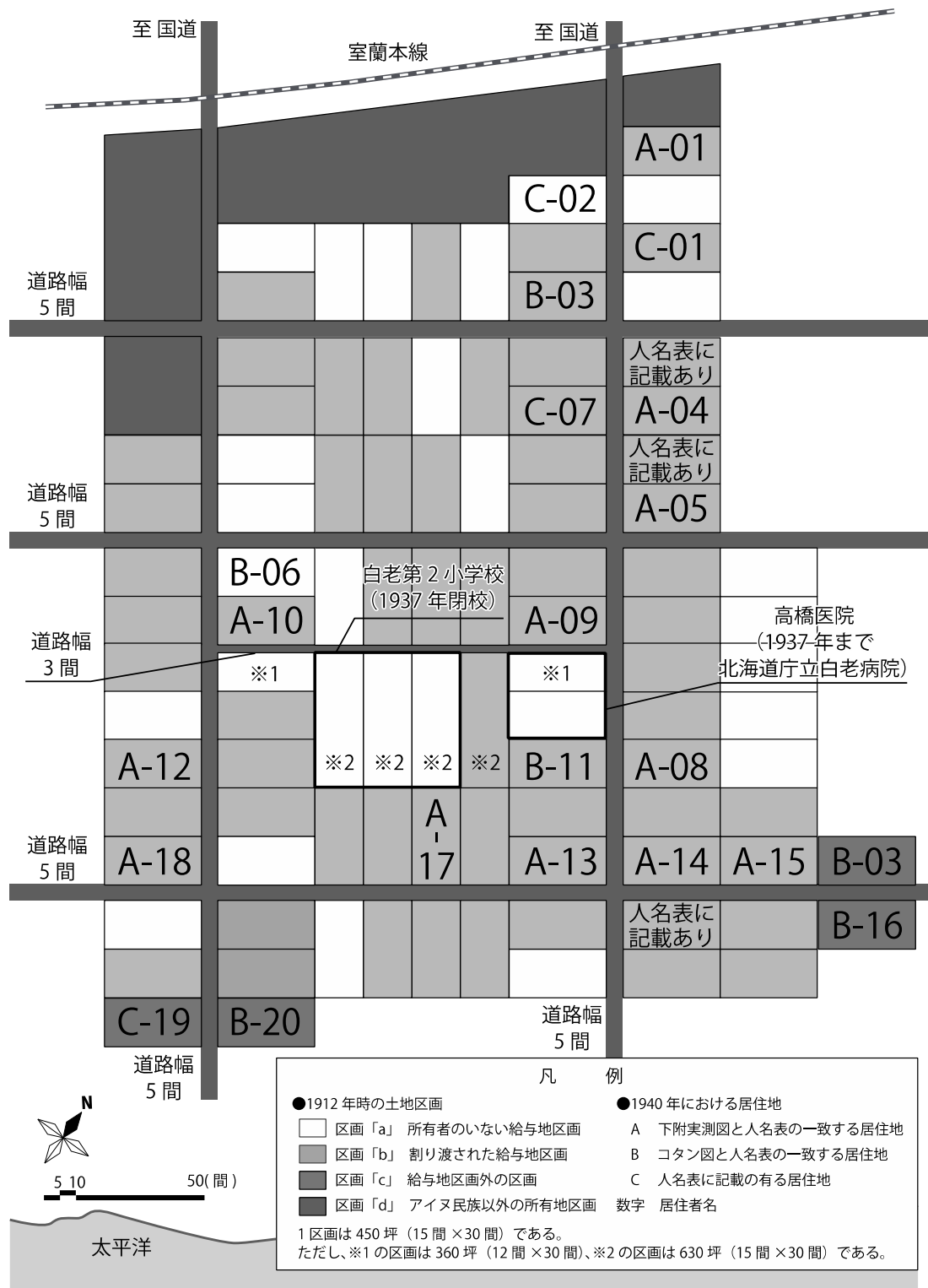


図 3-19 土地区画図

(4) 建築物 B の所有者の特定

「建築物 B」7 件は、「平地式寄棟建築物」と同じ区画内の西側に存在することから、隣接する「建築物 A」の所有者の建築物であり、所有者を表 3-5 のように特定した。所有者は 6 名おり、所有者「16」は、「▲d」と「▲e」2 件を所有している。

表 3-5 建築物 B の所有者の特定

建築物	所有者
▲a	04
▲b	08
▲c	15
▲d	16
▲e	16
▲f	18
▲g	20

3-7 研究資料の整理

本節では、収集した写真資料の建築物数の特定を行った。建築物は、平地式建築物と付属建築物（倉と檻）に分類した。1 枚の写真の中に複数の建築物が写る写真からは、複数の分析対象を抽出した。資料番号 A-03「毛民青屋集」5～6 については、アイヌ民族の建築物である建築物 a 及び建築物 b の合計を抽出した。

以下に、各写真資料が収録する建築物数をまとめた（表 3-6）。7 つの資料の平地式建築物の合計は 104 件（表 3-7）、付属建築物の合計は 19 件（表 3-8）であった。

表 3-6 研究資料の整理

北海道大学付属図書館北方資料室

資料名	資料番号	撮影年		撮影地	写真名	平地式	付属
		西暦	元号			建築物数	建築物数
鷹部屋福平研究資料	A-01	1868-	明治初年	長万部	チセの粹組み	1件	0件
		1884	明治17年	標津	根室国標津村のアイヌ（チセ前での儀式）	1件	0件
		1895	明治28年	阿寒	釧路国阿寒郡セツリ川上流字ピラカアイヌ部落之景	1件	0件
		1897-1906	明治30年代	美幌	網走郡美幌村アイヌ村落之景	1件	0件
森竹竹一撮影資料	A-02	1937	昭和12年	白老	アイヌの輪舞	1件	0件
					熊送り風景		
毛民青屋集5～6	A-03	1940	昭和15年	二風谷	調査票100枚	46件(注1)	0件
毛民青屋集7～8	A-04	1940	昭和15年	白老	調査票112枚	30件	10件

北海道立文書館

資料名	資料番号	撮影年		撮影地	写真名	平地式	付属
		西暦	元号			建築物数	建築物数
A・A・ブリガム 撮影資料	A-05	1893	明治26年	北海道	アイヌ部落の人々1	1件	0件
					アイヌ部落の人々2		

ロシア民族学博物館

資料名	資料番号	撮影年		撮影地	写真名	平地式	付属
		西暦	元号			建築物数	建築物数
N・N・ アンドレーエフ 撮影資料	A-06	1877-1886	明治10年代	北海道	アイヌコタン全景	1件	1件
					アイヌコタンの風景	1件	1件
					クマの祭壇:その前に民族衣装のアイヌの人々が座っている		
		1883	明治16年	北海道	クマの祭壇	1件	0件
					茅で覆われた骨組構造の住居を背景に民族衣装を纏ったアイヌ人たち		
					茅で覆われた骨組構造の住居を背景にした民族衣装のアイヌの女性		

北海道立アイヌ民族文化研究センター

資料名	資料番号	撮影年		撮影地	写真名	平地式	付属
		西暦	元号			建築物数	建築物数
久保寺逸彦 研究資料	A-07	1934	昭和9年	平取	道の両側のチセ、右手に豆畑がある	1件	0件
				平取	チセが点在する集落への道	1件	0件
				平取	チセ、ガラス窓が付く	1件	0件
				平取	チセ、戸口と母屋の繋ぎ部分が下がる	1件	0件
				平取	神窓側から見た家屋。左端に熊檻がある	1件	0件
				平取	東側の高台から見た二風谷	1件	0件
				平取	杵搗きをする女性三人	1件	0件
				平取	高床倉庫の前に立つ木綿の刺繍集衣サノウク氏。	0件	1件
		1935	昭和10年	浜益	実田村から毘沙別方向を見る	1件	0件
				旭川	笹葺の家の前に立つ二谷国松氏	1件	0件
				旭川	鹿田シムカニ氏1	1件	0件
				旭川	鹿田シムカニ氏2	1件	0件
				近文	笹葺の家と板壁の家、板壁の家は官給住宅か	1件	0件
				旭川	倉庫前に立つ川村氏・金田一氏・久保寺氏・二谷氏。	0件	2件
				近文	川村家の熊檻。	0件	1件
				旭川	笹葺の家と熊檻、後ろ向きに立つ姿は久保寺氏か。	0件	1件
		1936	昭和11年	平取	イオマンテ：薪の間でイウタする女性	1件	0件
				平取	イオマンテ：水汲み場に集まった人たち1	1件	0件
				平取	イオマンテ：水汲み場に集まった人たち2	1件	0件
				平取	イオマンテ：ヌサの前での踊り	1件	0件
		1953	昭和28年	厚真	煙突がある茅葺きのチセ	1件	0件
				穂別	茅葺きのチセ	2件	0件
				標茶	チセ 1219-010の方向違い	1件	0件
		1954	昭和29年	弟子屈	丸太組の熊檻。	0件	1件

※ 注1 資料番号 A-03「毛民青屋集」5～6 については、アイヌ民族の建築物である建築物 a 及び建築物 b の合計である

表 3-7① 平地式建築物の整理

資料番号	撮影年/出版年		写真名（A-03、A-04については、建築物名）	平地式建築物番号
	西暦	元号		
A-01	1868-	明治初年	チセの枠組み	FH-001
	1884	明治17年	根室国標津村のアイヌ（チセ前での儀式）	FH-002
	1895	明治28年	釧路国阿寒郡セツリ川上流字ピラカアイヌ部落之景	FH-003
	1897-1906	明治30年代	網走郡美幌村アイヌ村落之景	FH-004
A-02	1937	昭和12年	アイヌの輪舞	FH-005
			熊送り風景	
A-03	1940	昭和15年	□01H	FH-006
			□02H	FH-007
			□03H	FH-008
			□04H	FH-009
			□05H	FH-010
			■05Se	FH-011
			□06St	FH-012
			□07H	FH-013
			■08H	FH-014
			■09H	FH-015
			□09Se	FH-016
			□10H	FH-017
			■10Se	FH-018
			■11H	FH-019
			□12H	FH-020
			■12St	FH-021
			□13H	FH-022
			□14H	FH-023
			■14Se	FH-024
			□15H	FH-025
			■15VH	FH-026
			□16H	FH-027
			■16St	FH-028
			■17H	FH-029
			□18H	FH-030
			□19H	FH-031
			□20H	FH-032
			□21H	FH-033
			□22H	FH-034
			□23H	FH-035
			□23Se	FH-036
			□24H	FH-037
			□25St	FH-038
			□26H	FH-039
			□27H	FH-040
			□28H	FH-041
			□29H	FH-042
			□30St	FH-043
			□30Se	FH-044
			□31H	FH-045
			□32H	FH-046
			□33Se	FH-047
			□34H	FH-048
			□34Se	FH-049
			□35H	FH-050
			□35Se	FH-051

表 3-7② 平地式建築物の整理

写真帖番号	撮影年/出版年		写真資料名	平地式建築物番号
	西暦	元号		
A-04	1940	昭和15年	□01H	FH-052
			□01S	FH-053
			□02H	FH-054
			□03H-1	FH-055
			□03H-2	FH-056
			□04H	FH-057
			□05H	FH-058
			□05S	FH-059
			□06H	FH-060
			□07H	FH-061
			□08H	FH-062
			□09H	FH-063
			□10H	FH-064
			□11H	FH-065
			□12H	FH-066
			□13H	FH-067
			□14H	FH-068
			□15H	FH-069
			□16H	FH-070
			□17H	FH-071
			□18H	FH-072
			□19H	FH-073
			□20H	FH-074
A-05	1893	明治26年	▲a	FH-075
			▲b	FH-076
A-06	1877-1886	明治10年代	▲c	FH-077
			▲d	FH-078
			▲e	FH-079
			▲f	FH-080
			▲g	FH-081
	1883	明治16年	アイヌ部落の人々 1	FH-082
			アイヌ部落の人々 2	
			アイヌコタン全景	FH-083
			アイヌコタンの風景	FH-084
			クマの祭壇:その前に民族衣装のアイヌの人々が座っている	
			クマの祭壇	FH-085
A-07	1934	昭和9年	茅で覆われた骨組構造の住居を背景に民族衣装を纏ったアイヌ人たち	
			茅で覆われた骨組構造の住居を背景にした民族衣装のアイヌの女性	
			道の両側のチセ、右手に豆畑がある	FH-086
			チセが点在する集落への道	FH-087
			チセ、ガラス窓が付く	FH-088
			チセ、戸口と母屋の繋ぎ部分が下がる	FH-089
	1935	昭和10年	神窓側から見た家屋。左端に熊檻がある	FH-090
			杵搗きをする女性三人	FH-091
			実田村から毘沙別方向を見る	FH-092
			笹葺の家の前に立つ二谷国松氏	FH-093
			鹿田シムカニ氏1	FH-094
			鹿田シムカニ氏2	FH-095
	1936	昭和11年	笹葺の家と板壁の家、板壁の家は官給住宅か	FH-096
			イオマンテ：薪の間でイウタする女性	FH-097
			イオマンテ：水汲み場に集まった人たち1	FH-098
			イオマンテ：水汲み場に集まった人たち2	FH-099
	1953	昭和28年	イオマンテ：ヌサの前での踊り	FH-100
			煙突がある茅葺きのチセ	FH-101
			茅葺きのチセ（右）	FH-102
A-07	1954	昭和29年	茅葺きのチセ（左）	FH-103
			チセ 1219-010の方向違い	FH-104

表 3-8 付属建築物の整理

写真帖番号	撮影年/出版年		写真名 (A-04については、建築物名)	分析番号
	西暦	元号		
A-04	1940	昭和15年	●01P	AB-01
			●02P	AB-02
			●09P	AB-03
			●10P	AB-04
			●01B-1	AB-05
			●01B-2	AB-06
			●02B	AB-07
			●10B	AB-08
			●09B	AB-09
			●01B-3	AB-10
A-06	1877-1886	明治10年代	アイヌコタン全景	AB-11
			アイヌコタンの風景	AB-12
A-07	1934	昭和9年	高床倉庫の前に立つ木綿の刺繍集衣サノウク氏。	AB-13
	1935	昭和10年	倉庫前に立つ川村氏・金田一氏・久保寺氏・二谷氏。(倉)	AB-14
			倉庫前に立つ川村氏・金田一氏・久保寺氏・二谷氏。(檻)	AB-15
			川村家の熊檻。	AB-16
			笹暮の家と熊檻、後ろ向きに立つ姿は久保寺氏か。	AB-17
	1936	昭和11年	イオマンテ：熊檻、角にイナウが下がる。	AB-18
	1954	昭和29年	丸太組の熊檻。	AB-19

3-8 小結

第3章では、北海道大学付属図書館北方資料室、北海道立文書館、ロシア民族学博物館、北海道立アイヌ民族文化研究センターの4つの研究機関が所蔵している、資料的価値のある写真資料を収集し、本研究の研究資料となる平地式建築物104件、付属建築物19件の建築物の抽出を行った。

北海道大学付属図書館北方資料室が所蔵している「毛民青屋集」においては、資料の検証から、集落内の建築配置がわかる位置図（資料番号 A-03「毛民青屋集」5～6において）と土地区画図（資料番号 A-04「毛民青屋集」7～8において）を作製したことにより、本研究の信頼性を向上させる研究資料となった。

注

注1) 鷹部屋福平:アイヌ住居の研究 - 日高平取方面に於ける地方性 -, 北方文化研究報告, 第五輯, pp. 103-142, 1941 年 7 月.

注2) マンロー博士(ニール・ゴードン・マンロー)は、アイヌの生活風俗研究のために二風谷に移住し、研究のかたわら医者としての奉仕活動に生涯を捧げた。昭和 17 年の永眠後、住宅兼病院であった建物は記念館として保存され、現在は北海道大学へ寄贈され、北方文化の研究に活用されている。平取町 HP 参照:

(http://www2.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/shisetsu/shi_bunka01.html#bunka05)

注3) 北海道立文書館が所蔵する手書地図。資料目録は以下の通りである。沙流郡平取村大字二風谷村土地連絡図: 請求記号/A 7-2/1065, 分類/A 7-2 北海道庁_支庁・郡役所, 主務者名/北海道庁浦河支庁, 年次/1929 年(昭和 4 年), 形態/1 冊(2cm) 40×57cm, 注記/図案総数 84 枚 手書.

注4) 注 1) と同一の報告書である。

注5) 国土地理院所蔵の航空写真。航空写真注記は以下の通りである。撮影年/1936 年 11 月 7 日(昭和 11 年), 撮影実施機関/陸軍, 整理番号/913683, コース番号/C2, 写真番号/59. 撮影年/1944 年 10 月 15 日(昭和 19 年), 撮影実施機関/陸軍, 整理番号/91 ハ, コース番号/C2, 写真番号/16.

注6) 北海道立文書館が所蔵する手書地図。資料目録は以下の通りである。胆振国白老郡白老村字コタン旧土人下附実測図: 請求記号/Ma-1/2923, 分類/A 7-2 北海道庁_支庁・郡役所, 主務者名/北海道庁室蘭支庁, 年次/1912(明治 45), 形態/1 枚(77×86cm), 注記/縮尺 1:1200.

注7) 新白老町史下巻を参考とした。白老町町史編さん委員会: 新白老町史下巻, 第一法規出版株式会社, 1992 年 11 月 3 日.

注8) 84 名(世帯)は、コタン図に描かれたアイヌ民族名を数えたものである。補足として、下附実測図の各区画の姓とコタン図の記名箇所の姓が一致する者は、84 名の内 32 名いた。

注9) 国土地理院所蔵の航空写真。航空写真注記は以下の通りである。撮影年/1944 年 10 月 22 日(昭和 19 年), 撮影実施機関/陸軍, 整理番号/91Q32, コース番号/C5, 写真番号/110.

注10) イナウはアイヌ民族の祭壇(ヌササン)にまつる祭具である。

第4章 平地式建築物の類型化手法

4-1 はじめに

本章では、第3章の「写真資料の検証」により信頼性の高い写真資料から抽出した平地式建築物 104 件を基に、平地式建築物の類型化手法の開発を行うことを目的とした。類型化は、写真資料の建築物の外観を鮮明に写し出しているという利点から写真から分かる外観意匠の特徴を基に、これまでの調査・研究におけるアイヌ民族の平地式建築物の類型化に関連する記載^{注1)}を検討することで、類型化手法の妥当性を得た。

4-2 既往研究における類型化に関連する記載

これまでの調査・研究における類型化に関連する記載は、棚橋諒氏の研究、鷹部屋福平氏の研究、小林孝二氏の研究、居住地調査の4つに見ることができ、その他の調査・研究では、アイヌ民族の伝統的な建築物として茅壁茅葺屋根の寄棟建築物に関するものが中心であり、類型化に関する記述は見られなかった。

(1) 棚橋諒氏の研究

棚橋氏は、論文「アイヌの住居 (1), 民家 民家研究会, 第Ⅱ輯 12 号, 1938 年 12 月」において、北海道における調査の実感として「アイヌ民族文化を語るチセは絶滅しつつある。自分が観光客として通りすがりに見た屈斜路湖畔の土人部落コタンは十勝アイヌの発祥の地と言われる。それすら見るものはすべて板と材木で作られた和人風の小屋であった。大和民族の中に同化しつつあるアイヌにとって当然のことである故にアイヌの家屋の十分な調査とその記録は現在すでにおそすぎるとしてもそれはなされなければならぬ事である」と報告している。

この研究から、棚橋氏は、「アイヌ民族文化を語るチセ」と「板と材木で作られた和人風の小屋」の2つにアイヌ民族の建築物を分類していることが分かった。

(2) 鷹部屋福平氏の研究

鷹部屋氏は、論文「アイヌ住居の研究 - 日高平取方面に於ける地方性 - , 北方文化研究報告, 第五輯, 1941 年 7 月」において、1940 年の二風谷村アイヌ集落の調査を行った際の集落の状況について「本村の民家は和人家屋とアイヌ家屋との二種類であつて、前者は桎葺又はトタン葺であり、後者の多くはアイヌ家屋独特な段々茅葺のものが多い」と報告している。また、論文「アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 - , 北方文

化研究報告，第三輯，1940 年 5 月」においては、第 3 章の図 3-4 に示した建築物（穴居生活趾に、其生活程度は大して相異を見ぬほどに簡単なもの）を報告している。

これらの研究から、鷹部屋氏は、「柁葺又はトタン葺の和人家屋」、「段々茅葺のアイヌ家屋」、「穴居生活趾に相異を見ぬ家屋」の 3 つの建築物を報告していることが分かった。

（3）小林孝二氏の研究

小林氏は、論文「近代以前の絵画資料に描かれたアイヌ民族の建築に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第 608 号，2006 年 10 月」において、外観から分かる構造の違いから「寄棟屋根で屋根高が高く、軒出があり、軒高が高く、壁は内傾あるいは垂直で壁に窓があり、付属屋（セム）は主屋と同程度の構造（図 4-1）と、変形屋根^{注 2}で、軒出がなく、軒高が低く、壁は強く内傾し、壁に窓がなく、屋根に開口があり、入口は低い半円筒系屋根である構造の少なくとも 2 種類の別な構造（図 4-2）の住居が存在した」と報告している。ただし、同論文に掲載している絵画資料には、上記 2 分類の他に、切妻屋根の建築物（図 4-3）、寄棟屋根で側壁と屋根からなる付属屋（セム）を伴う建築物、変形屋根で側壁と屋根からなる付属屋（セム）を伴う建築物の 4 つの建築物が見られた。

この研究から、小林氏は、絵画資料に見られた平地式建築物を大きく「付属屋（セム）を伴う寄棟建築物」と「変形屋根の建築物」の 2 つに分類し、細かく屋根形状を見ると「切妻屋根の建築物」、付属屋（セム）の形状を見ると「寄棟屋根で側壁と屋根からなる付属屋（セム）を伴う建築物」と「変形屋根で側壁と屋根からなる付属屋（セム）を伴う建築物」の建築物を報告していることが分かった。

また、小林氏は、論文「アイヌ文化期の平地住居跡に関する基礎的研究 - 発掘資料から見たアイヌ民族住居の寸法体系に関する考察 - ，日本建築学会計画系論文集，第 615 号，2007 年 5 月」において、柱穴跡に見られた平面形について「平地住居跡の平面形態は付属屋を持たない主屋単独のものが多く、付属屋付きのものも一定程度存在した」と報告している。

この研究から、小林氏は、柱穴跡に見られた平面形を「主屋単独のもの」と「付属屋（セム）付きのもの」の 2 つに分類していることが分かった。

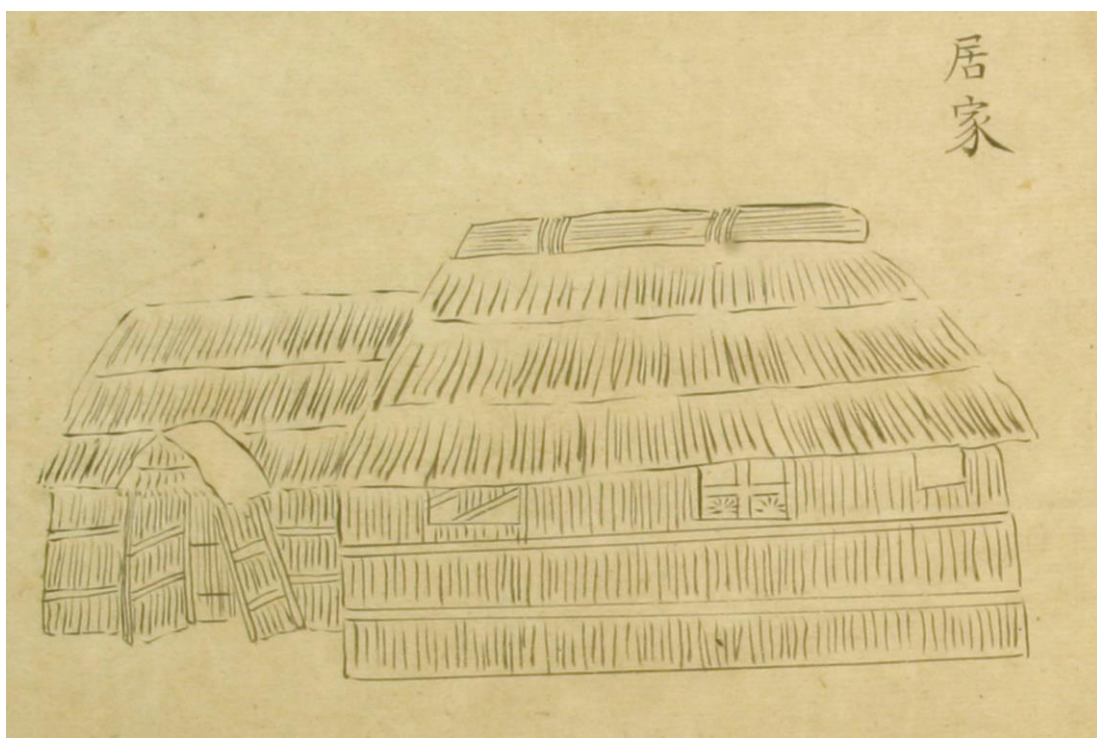


图 4-1 谷元旦 作：『蝦夷紀行図』「居家」

所藏：函館市中央図書館

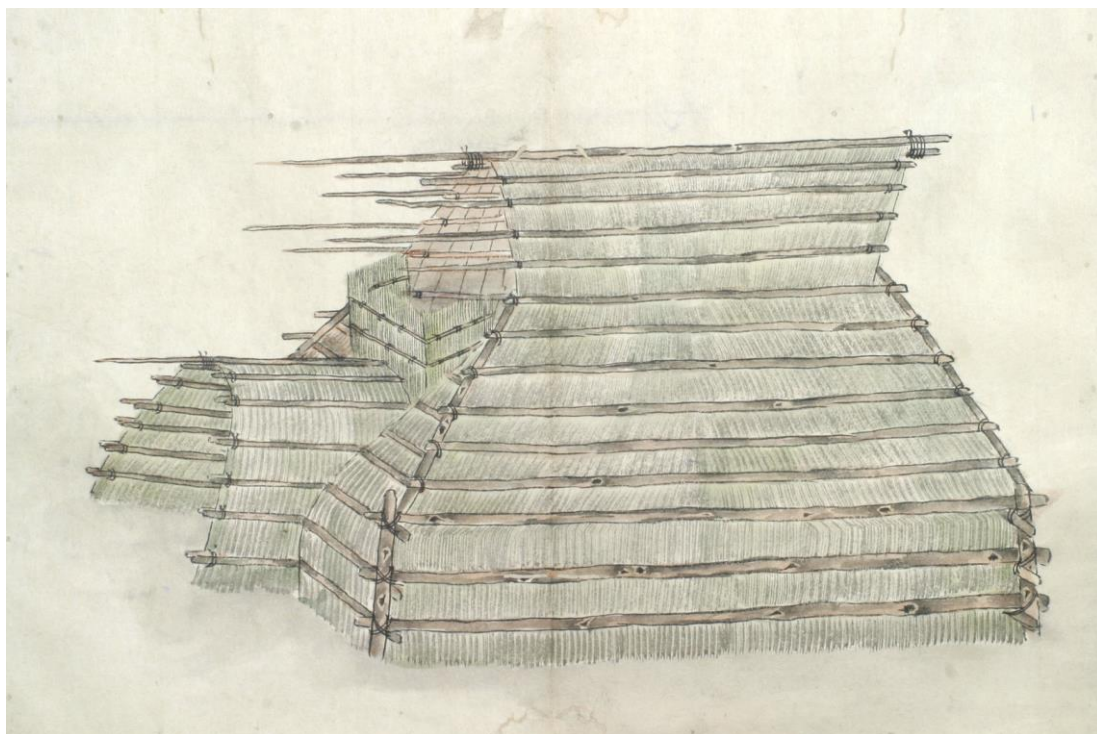


图 4-2 秦 檉丸 著：『蝦夷嶋図説』「無題」

所藏：函館市中央図書館

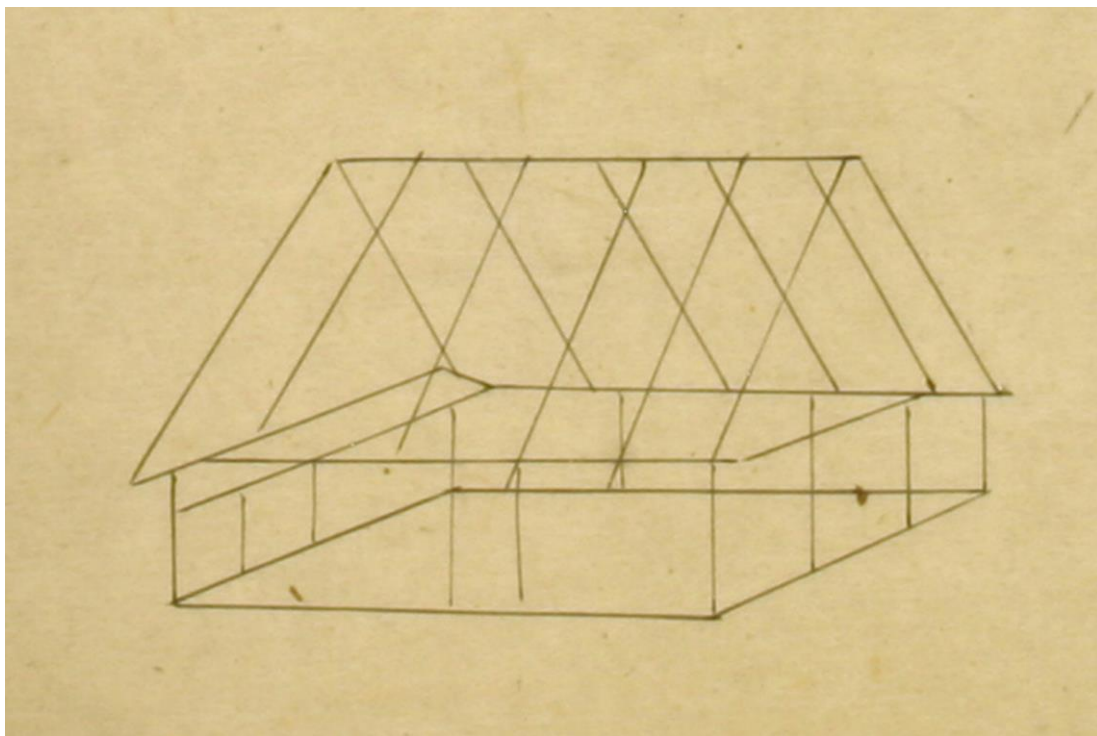


図 4-3 谷元旦 作：『蝦夷紀行図』「居家露柱梁図」

所蔵：函館市中央図書館

（４）居住地調査

居住地調査の記録について、明治初期の「旧土人衣食住其他取調書（写）（明治 16 年）」では、主に柱材、壁材等のアイヌ民族の住居の素材に関する記録を行っている。一方で明治期後半の「沙流川沿岸アイヌ状況（明治 31 年）」では、アイヌ民族の建築物の屋根が「茅屋根」が大半をしめる中で、「マサ屋根」が何件あるかということに重点が置かれている。さらに大正期の「伏古旧土人調査資料（大正 15 年）」では、入口や窓の装置の改良に目が向けられるようになっている。

これらの居住地調査記録からは、大きく「茅屋根の建築物」と「マサ屋根の建築物」の 2 つの分類が見られた。明治期後半以降の調査では、アイヌ民族の建築物の改良性に重点がおかれていた。

4-3 分析対象の整理

分析対象は、第3章の「写真資料の検証」により抽出した平地式建築物 104 件とし、主に外観から分かる 9 項目の外観意匠の指標を設定し、各建築物の特徴を整理した（表 4-1）。

以下に、9 項目の外観意匠の指標と分析対象から確認できた要素を記した。

9 項目の外観意匠の指標

①主屋の屋根材

分析対象において「茅葺」、「桤屋」の 2 種類を確認した。

②主屋の屋根形状

分析対象において「寄棟屋根」、「切妻屋根」、「変形屋根」の 3 種類を確認した。

③軒出の有無（図 4-4）

分析対象において「軒出がある建築物」と「軒出がない建築物」の 2 種類を確認した。

※ 軒出がないとは、屋根と壁の区別がつかないことを指す

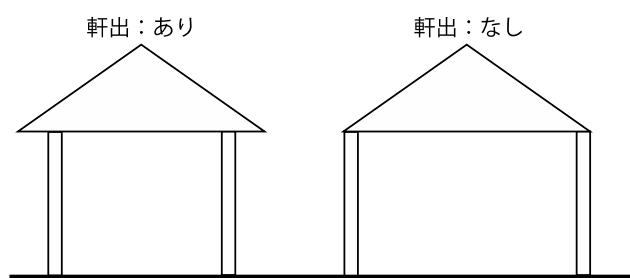


図 4-4 軒出の有無

④セムの壁数（図 4-5）

セムを伴う分析対象において、「2 面」、「3 面」、「4 面」の 4 種類を確認した。
 ※セムの入口が壁となっている面は、その面を 1 面とし、セムの入口に壁がない面は、その面を 0 面とする。

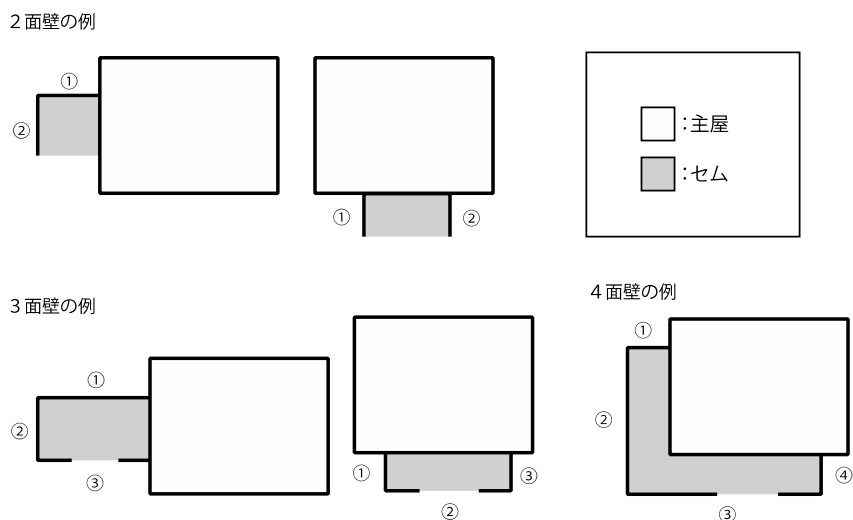


図 4-5 セムの壁数の例

⑤セムの入口方向（図 4-6）

セムを伴う分析対象において「主屋と同じ入口方向」と「主屋と異なる入口方向」を確認した。

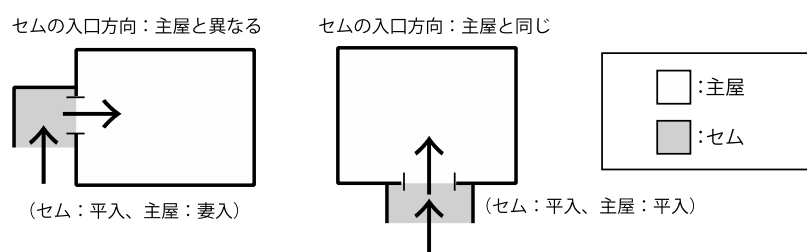


図 4-6 セムの入口方向の例

⑥セムの屋根形状

セムを伴う分析対象において「寄棟屋根」、「切妻屋根」、「片流れ屋根」、「半円筒形屋根」の 4 種類を確認した。

⑦主屋の入口

分析対象において「妻入の建築物」と「平入の建築物」の2種類を確認した。

⑧セムの接続位置（図 4-7）

セムを伴う分析対象において「主屋の妻側に接続する建築物」と「主屋の平側に接続する建築物」、「主屋の妻平両側に接続する建築物」の3種類を確認した。

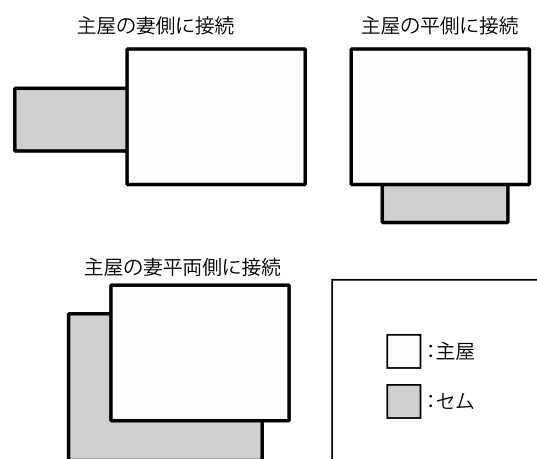


図 4-7 セムの接続位置の例

⑨主屋の壁材

分析対象において「茅壁」と「マサ壁」の2種類を確認した。

以下に、9項目の指標からみた各平地式建築物の特徴をまとめた（表 4-1）。

表 4-1① 写真資料に写されている平地式建築物の特徴

平地式 建築物番号	資料 番号	撮影年/出版年		撮影 場所	指標①	指標②	指標③	指標④	指標⑤	指標⑥	指標⑦	指標⑧	指標⑨
		西暦	元号		主屋の 屋根材	主屋の 屋根形状	軒出の 有無	セムの 壁数	セムの 入口方向	セムの 屋根形状	主屋の 入口	セムの 接続位置	主屋の 壁材
FH-001	A-01	1868-	明治初年	北海道	不明	寄棟	不明	3面壁	異なる	寄棟	妻入	妻側	不明
FH-002		1884	明治17年	標津	茅葺	変形	無	2面壁	同じ	半円筒	妻入	妻側	茅壁
FH-003		1895	明治28年	釧路	茅葺	切妻	有	無	不明	不明	不明	不明	茅壁
FH-004		1897-1906	明治30年代	網走	茅葺	寄棟	有	3面壁	異なる	切妻	妻入	妻側	茅壁
FH-005	A-02	1937	昭和12年		白老	茅葺	寄棟	有	3面壁	異なる	寄棟	妻入	妻側
FH-006	A-03	1940	昭和15年		二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-007					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-008					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-009					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-010					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-011					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-012					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-013					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-014					二風谷	桁屋	寄棟	有	無		不明		マサ壁
FH-015					二風谷	桁屋	切妻	有	無		不明		マサ壁
FH-016					二風谷	茅葺	切妻	有	無		平入		マサ壁
FH-017					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-018					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-019					二風谷	桁屋	切妻	有	無		不明		マサ壁
FH-020					二風谷	茅葺	寄棟	有	3面壁	同じ	平入	平側	マサ壁
FH-021					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-022					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-023					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		妻入		マサ壁
FH-024					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-025					二風谷	茅葺	寄棟	有	4面壁	同じ	平入	平妻両側	マサ壁
FH-026					二風谷	茅葺	寄棟	有	3面壁	同じ	平入	平側	マサ壁
FH-027					二風谷	茅葺	寄棟	有	4面壁	同じ	平入	平妻両側	マサ壁
FH-028					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-029					二風谷	茅葺	寄棟	有	4面壁	同じ	妻入	平妻両側	マサ壁
FH-030					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-031					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-032					二風谷	茅葺	寄棟	有	3面壁	同じ	平入	平側	マサ壁
FH-033					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-034					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-035					二風谷	茅葺	寄棟	有	4面壁	同じ	平入	平妻両側	マサ壁
FH-036					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-037					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-038					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-039					二風谷	茅葺	寄棟	有	4面壁	同じ	平入	平妻両側	マサ壁
FH-040					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-041					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-042					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-043					二風谷	茅葺	切妻	有	無		妻入		茅壁
FH-044					二風谷	茅葺	切妻	有	無		不明		茅壁
FH-045					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		妻入		マサ壁
FH-046					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-047					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-048					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-049					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-050					二風谷	茅葺	寄棟	有	3面壁	同じ	平入	平側	マサ壁
FH-051					二風谷	茅葺	寄棟	有	無		黄表紙01用		茅壁
FH-052	A-04	1940	昭和15年		白老	茅葺	寄棟	有	無		妻入		茅壁
FH-053					白老	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	平入	平側	茅壁
FH-054					白老	茅葺	寄棟	有	3面	異なる	寄棟	妻入	妻側
FH-055					白老	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-056					白老	茅葺	寄棟	有	無		妻入		茅壁
FH-057					白老	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	平入	平側	茅壁
FH-058					白老	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	平入	平側	茅壁
FH-059					白老	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-060					白老	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	平入	平側	マサ壁
FH-061					白老	茅葺	寄棟	有	2面壁	異なる	妻入	妻側	茅壁
FH-062					白老	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	平入	平側	マサ壁
FH-063					白老	茅葺	寄棟	有	3面	異なる	妻入	妻側	茅壁
FH-064					白老	茅葺	寄棟	有	3面	異なる	妻入	妻側	茅壁
FH-065					白老	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-066					白老	茅葺	寄棟	有	無		平入		マサ壁
FH-067					白老	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-068					白老	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	平入	平側	マサ壁
FH-069					白老	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	平入	平側	マサ壁
FH-070					白老	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	平入	平側	マサ壁
FH-071					白老	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-072					白老	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-073					白老	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-074					白老	茅葺	寄棟	有	無		平入		茅壁
FH-075					白老	茅葺	切妻	有	無		平入		茅壁
FH-076					白老	茅葺	切妻	有	無		妻入		茅壁
FH-077					白老	茅葺	切妻	有	無		不明		茅壁
FH-078					白老	茅葺	切妻	有	無		不明		茅壁
FH-079					白老	茅葺	切妻	有	無		不明		茅壁
FH-080					白老	茅葺	切妻	有	無		不明		茅壁
FH-081					白老	茅葺	切妻	有	無		不明		茅壁

表 4-1② 写真資料に写されている平地式建築物の特徴

平地式 建築物番号	資料 番号	撮影年/出版年		撮影 場所	指標①	指標②	指標③	指標④	指標⑤	指標⑥	指標⑦	指標⑧	指標⑨
		西暦	元号		主屋の 屋根材	主屋の 屋根形状	軒出の 有無	セムの 壁数	セムの 入口方向	セムの 屋根形状	主屋の 入口	セムの 接続位置	主屋の 壁材
FH-082	A-05	1893	明治26年	北海道	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	片流れ	平入	平側	茅壁
FH-083	A-06	1877-1886	明治10年代	北海道	茅葺	寄棟	有	不明	不明	不明	不明	不明	茅壁
FH-084				北海道	茅葺	寄棟	有	不明	不明	不明	不明	不明	茅壁
FH-085	A-07	1883	明治16年	北海道	茅葺	寄棟	有	不明	不明	不明	不明	妻側	茅壁
FH-086					平取	茅葺	有	無			平入		マサ壁
FH-087	A-07	1934	昭和9年		平取	茅葺	有	不明	不明	不明	不明	不明	マサ壁
FH-088					平取	茅葺	有	3面壁	異なる	寄棟	妻入	妻側	茅壁
FH-089					平取	茅葺	有	3面壁	異なる	寄棟	妻入	妻側	茅壁
FH-090					平取	茅葺	有	不明	不明	不明	不明	不明	茅壁
FH-091					平取	茅葺	有	不明	不明	不明	不明	不明	マサ壁
FH-092					浜益	茅葺	有	不明	不明	不明	不明	不明	マサ壁
FH-093		1935	昭和10年	旭川	茅葺	寄棟	有	3面壁	異なる	寄棟	妻入	妻側	茅と笹壁
FH-094				旭川	茅葺	不明	有	無			平入		茅壁
FH-095				旭川	笹葺	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	笹壁
FH-096				近文	笹葺	寄棟	有	不明	不明	不明	不明	不明	笹壁
FH-097		1936	昭和11年		平取	茅葺	有	不明	不明	不明	不明	不明	マサ壁
FH-098					平取	茅葺	有	不明	不明	不明	不明	不明	マサ壁
FH-099					平取	茅葺	有	無			平入		マサ壁
FH-100					平取	茅葺	有	2面壁	異なる	片流れ	妻入	妻側	マサ壁
FH-101	A-07	1953	昭和28年	厚真	茅葺	寄棟	有	不明	不明	不明	不明	不明	茅壁
FH-102				穂別	茅葺	寄棟	有	不明	不明	不明	不明	不明	茅壁
FH-103				穂別	茅葺	切妻	有	不明	不明	不明	不明	不明	茅壁
FH-104				標茶	茅葺	寄棟	有	2面壁	同じ	片流れ	妻入	妻側	茅壁

4-4 類型化の検討

建築物の分析は、平面、立面、断面の3点から行われるが、写真資料及び既往研究における資料は、外観に関する資料が大半であり、建築物の内部について分かる資料は限りなく少ない現状にあった。本研究では、9つの外観意匠の指標を設定したが、それは主に立面に該当する指標である。しかし、外観意匠から「主屋屋根部」をみると、「主屋の立面」の他に、「主屋の構造（断面）」を推測（茅葺屋根の建築物と改良住宅では異なる構造といった推測）することができる。次にセムに関する外観意匠から「セムの立面」の他に、セムの形状から「セムの用途や構造からみたセムの平面」を推測することができる。主屋の内部は単室矩形平面を基本としているアイヌ民族の建築物（現在、アイヌ民族の内部について分かる資料から見た考察であり、単室矩形平面が存在しないと断定することはできない）において、「セム」は主屋以外で唯一の平面形を構成する要素として重要である。

分析の優先順位としては、建築物の主従関係と同様に主屋を分析し、次にセムを分析する。その中で、主屋の分析には「主屋屋根部」が重要であり、セムの分析には「セムの平面形」が重要である。

以上のことから、本研究の類型化手法は、主屋の特徴として「主屋屋根部」を分類し、セムの特徴として「セムの平面形」を分類し、さらに「その他の指標」との3つの組合せから、「立面」を中心に「平面及び断面」も考慮した総合的な分析手法を検討した。

4-5 類型化の手順

類型化は、以下の手順で行った。

(1) 主屋屋根部の分類

i 分類方法

棚橋氏、鷹部屋氏、居住地調査記録に見られたアイヌ民族の平地式建築物の分類は、「伝統的と考えられる建築物」と「改良を加えた建築物」とが顕在した時代であり、大きく「改良住宅（和人家屋）であるか」という視点からの記述であった。「板と材木で作られた和人風の小屋」、「桎葺又はトタン葺の和人家屋」、「マサ屋根の建築物」という記述に見られるように、9 項目の指標の「①主屋の屋根材」の違いに当てはめると、「桎屋」の建築物が「改良住宅」として分類され、残りの記述は反対に「アイヌ民族の伝統性が見られる（残されている）建築物」と言い換えられ、「①主屋の屋根材」は「茅葺（草葺）」となる。この「茅葺（草葺）の建築物」についての分類は、鷹部屋氏、小林氏の研究において、「寄棟屋根」、「切妻屋根」、「変形屋根及び穴居生活趾に相異を見ぬ家屋（外観形状から同類の建築物と考えられる。図 3-5 と図 4-2 を参照）」という記述に見られるように、10 項目の指標の「②主屋の屋根形状」に当てはまった。アイヌ民族の平地式建築物の特徴は、このように「①主屋の屋根材」及び「②主屋の屋根形状」といった「主屋の屋根部」に見られ、「主屋の屋根部」の外観の特徴から類型化を行う妥当性を得た。

以上のことを検討した上で、「主屋屋根部」の違いから写真資料に見られる平地式建築物は、「改良住宅（桎屋）」、「茅葺寄棟屋根」、「茅葺切妻屋根」、「茅葺変形屋根」の 4 つに大きく分類することができ、これは現代の建築物分類の小屋組構造による分類であり、建築学的にみても意義があり、また、既往研究に見られた「主屋の屋根部」の記載をすべて網羅するものであった。なお、「茅葺変形屋根」は、厳密に分類する事が難しいが、その判別基準として、10 項目の指標の「③軒出の有無」があり、「軒出がないもの」が「茅葺変形屋根」、つまり、柱が低く（もしくは柱が無く）竪穴式住居の外観と類似する屋根主体の構造として、分類する事が出来る。

ii 分類の手順（図 4-8）

【手順 1】

指標①「主屋の屋根材」が「桎屋」である建築物を、「改良住宅」とする。

【手順 2】

指標①「主屋の屋根材」が「茅葺（草葺）」の建築物は、指標②「主屋の屋根形状」から、「寄棟」である建築物を「茅葺（草葺）寄棟屋根建築物」、「切妻」である建築物を「茅葺（草葺）切妻屋根建築物」、「変形」である建築物を「茅葺（草葺）変形屋根建築物」とする。

【注】

「茅葺変形屋根」は、厳密に分類する事が難しいが、その判別基準として、指標③「軒出の有無」があり、「軒出がないもの」が「茅葺変形屋根」、つまり、柱が低く（もしくは柱が無く）竪穴式住居の外観と類似する屋根主体の構造として、「茅葺変形屋根」に分類する事が出来る。

以上の手順に従うと、アイヌ民族の建築物の主屋屋根部は、「改良住宅」、「茅葺（草葺）寄棟屋根建築物」、「茅葺（草葺）切妻屋根建築物」、「茅葺（草葺）変形屋根建築物」の 4 つに分類される。

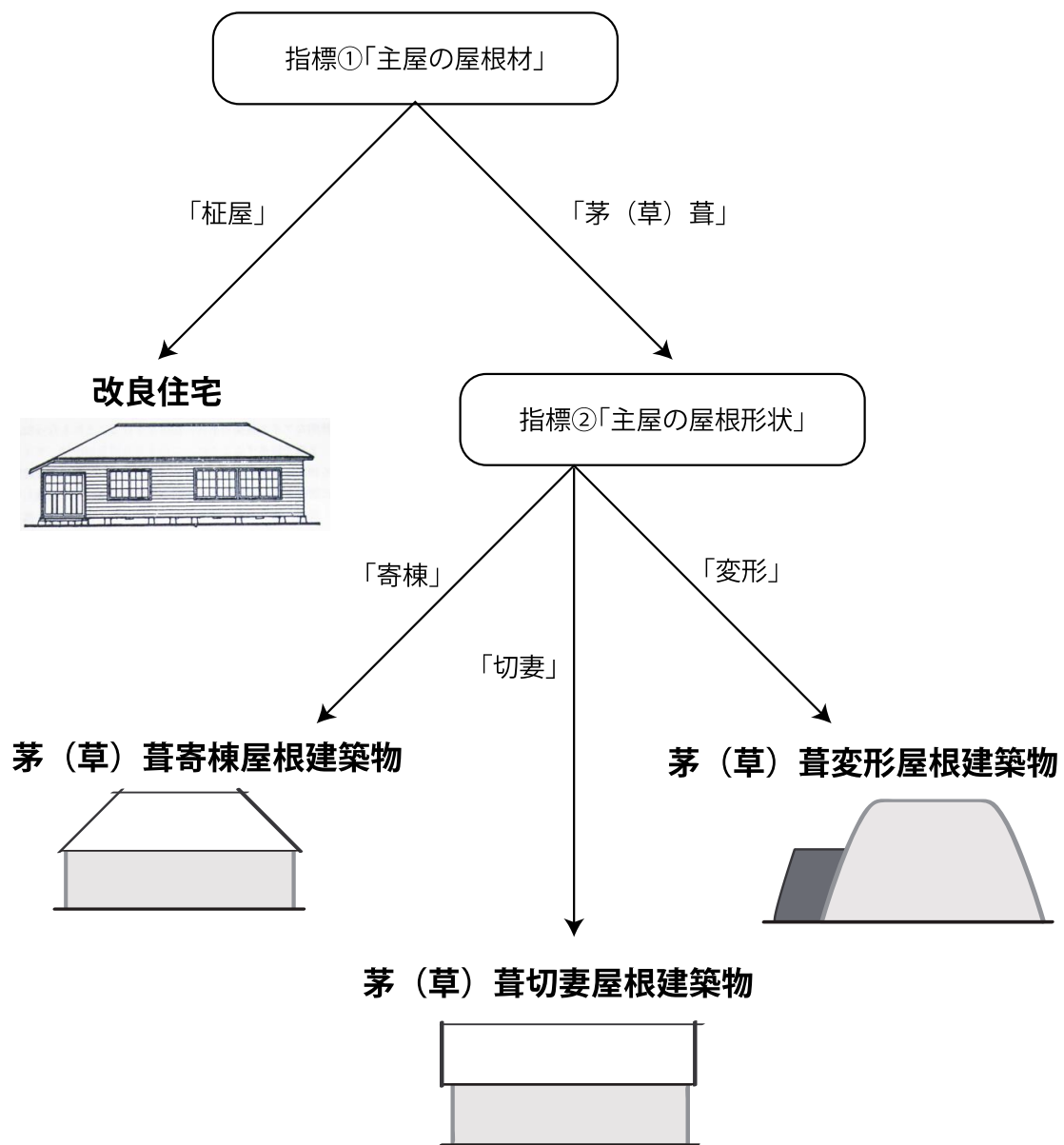


図 4-8 主屋屋根部の分類

（２）セムの平面形

i 分類方法

平面形は、現在の建築物の分類に用いられる「○LDK」という室の数や機能から分類される概念でもあるが、今後、新たに発見される資料は、発掘調査の柱穴跡が中心になることを考えても、平面形による分類の必要性が窺える。そこで、本研究は、「セムの機能と構造」を基に「セムの平面形」を分類した。

ii セムの機能

「セム」の和訳は「主屋入口に付属する下屋、風除室、納屋」など幅広く定義され、厳密な定義はない。そこで、本研究は、セムの機能を大きく「主屋に接続する下屋」と「主屋に接続する小庇」に分けて扱った。「下屋」と「小庇」の定義については、10項目の指標の「④セムの壁数」、「⑤セムの入口方向」から行った。「④セムの壁数」に関連する記述として、小林氏は、「主屋と同程度の構造（周囲を壁で囲い屋根があるもの）」、「側壁と屋根からなる構造」、「低い半円筒系屋根である構造」の3つに分類した。この分類を踏まえて「下屋」と「小庇」の定義を行うのだが、「下屋」と「小庇」大きく分類すると、「下屋」は「室（作業場、玄関、風除室等）」としての機能であり、「小庇」は「道具」としての機能である。「室」としての機能は、数値的な広さから分類することも可能だが、「④セムの壁数」による影響が強い。「④セムの壁数」が3面以上であると小林氏が記載している「周囲を壁で囲い屋根があるもの」となり、「室」としての機能が強く、本研究では「下屋」と定義した。「④セムの壁数」が2面のものは、小林氏の言う「側壁と屋根からなる構造」となるが、「⑤セムの入口方向」の違いにより、「主屋と同じ入口方向」のものは「小庇」の機能が強く、「主屋と異なる入口方向」のものは「風除室」としての機能があることから「下屋」に分類した。「低い半円筒系屋根である構造」についても、同様に「④セムの壁数」が2面と考えられ、また、「⑤セムの入口方向」が「主屋と同じ入口方向」であることから、「小庇」と定義した。

iii セムの構造

「セムの構造」について、10 項目の指標の「④セムの壁数」、「⑥セムの屋根形状」、から分類を行った。「小庇」の構造は、小林氏の記載に見られる「側壁と屋根からなる構造」と「低い半円筒系屋根である構造」があり、「④セムの壁数」は「2 面」であり、「側壁と屋根からなる構造」の「⑥セムの屋根形状」は「片流れ屋根」等の簡易な屋根であり、「簡易屋根構造」と定義した。「低い半円筒系屋根である構造」は「半円筒屋根」となり、「半円筒型構造」と定義した。

「下屋」の構造について、「2 面壁」のものは「側壁と屋根からなる構造」となり、「⑥セムの屋根形状」は「片流れ屋根」等の「簡易屋根構造」であった。「3 面壁」のものは、小林氏の記載に見られる「主屋と同程度の構造」と、記載が見られない「その他の構造」があり、「主屋と同程度の構造」の「⑥セムの屋根形状」は、主屋と同様に小屋根を持つ「寄棟屋根」や「切妻屋根」であり、「小屋根型構造」と定義した。「その他の構造」は、「主屋と同程度の構造」とは異なり、「片流れ屋根」等の「簡易屋根構造」となる。「4 面壁」のものは、「1860 年代から 1950 年代」特有の構造であり、セムが「妻平両側に接続」し、形状は「L 字」となり、屋根は「片流れ屋根」等の「簡易屋根構造」となる。

セムの屋根構造における「簡易屋根構造」と「小屋根型構造」の判別は、「⑤セムの屋根形状」から、「片流れ屋根」は「簡易屋根構造」、「寄棟屋根」は「小屋根型構造」、「切妻屋根」については、「小庇」が「簡易屋根構造」、「下屋」が「小屋根型構造」となる。

上記、「④セムの壁数」と「⑥セムの屋根形状」をまとめると、「2 面壁-簡易屋根構造」、「2 面壁-半円筒型構造」、「3 面壁-簡易屋根構造」、「3 面壁-小屋根型構造」、「4 面壁-簡易屋根構造」の 5 つの分類となった。

iv 「セムの平面形」の分類

「セムの機能」と「セムの構造」の組合せから、「セムの平面形」は以下の7通りを確認できるが、「セム」を伴わない平面形と「小庇」を伴う平面形については、「小庇」は入口機能を向上させる「道具」としての機能としての接続であり、「セム」を伴わない平面形と同類として平面形Ⅰa～平面形Ⅰcという記号を用いた。

平面形Ⅰa：「セム」を伴わない平面形

平面形Ⅰb：「2面壁-簡易屋根構造」の「小庇」

平面形Ⅰc：「2面壁-半円筒型構造」の「小庇」

平面形Ⅱ：「2面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

平面形Ⅲ：「3面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

平面形Ⅳ：「3面壁-小屋根型構造」の「下屋」

平面形Ⅴ：「4面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

v 分類の手順（図 4-9、図 4-10）

【手順 1】

指標④「セムの壁数」において、「セムを伴わない」建築物の平面形を、「平面形Ⅰa」とする。

【手順 2】

指標④「セムの壁数」が「2 面」であり、指標⑤「セムの入口方向」が「主屋と同じ入口方向」で、指標⑥「セムの屋根形状」が「半円筒型」以外である建築物の平面形を「平面形Ⅰb」、「半円筒型」である建築物の平面形を「平面形Ⅰc」とする。

【手順 3】

指標④「セムの壁数」が「2 面」であり、指標⑤「セムの入口方向」が「主屋と異なる入口方向」である建築物の平面形を「平面形Ⅱ」とする。

【手順 4】

指標④「セムの壁数」が「3 面」であり、指標⑥「セムの屋根形状」が「片流れ屋根」である建築物の平面形を「平面形Ⅲ」、「寄棟屋根及び切妻屋根」である建築物の平面形を「平面形Ⅳ」とする。

【手順 5】

指標④「セムの壁数」が「4 面」である建築物の平面形を「平面形Ⅴ」とする。

【注】

指標⑥「セムの屋根形状」が「半円筒型」のセムは、指標④「セムの壁数」について、「2 面壁」とする。

以上の手順に従うと、アイヌ民族の建築物の平面形は、『平面形Ⅰa：「セム」を伴わない』、『平面形Ⅰb：「2 面壁-簡易屋根構造」の「小庇」』、『平面形Ⅰc：「2 面壁-半円筒型構造」の「小庇」』、『平面形Ⅱ：「2 面壁-簡易屋根構造」の「下屋」』、『平面形Ⅲ：「3 面壁-簡易屋根構造」の「下屋」』、『平面形Ⅳ：「3 面壁-小屋根型構造」の「下屋」』、『平面形Ⅴ：「4 面壁-簡易屋根構造」の「下屋」』の 7 種類に分類される。

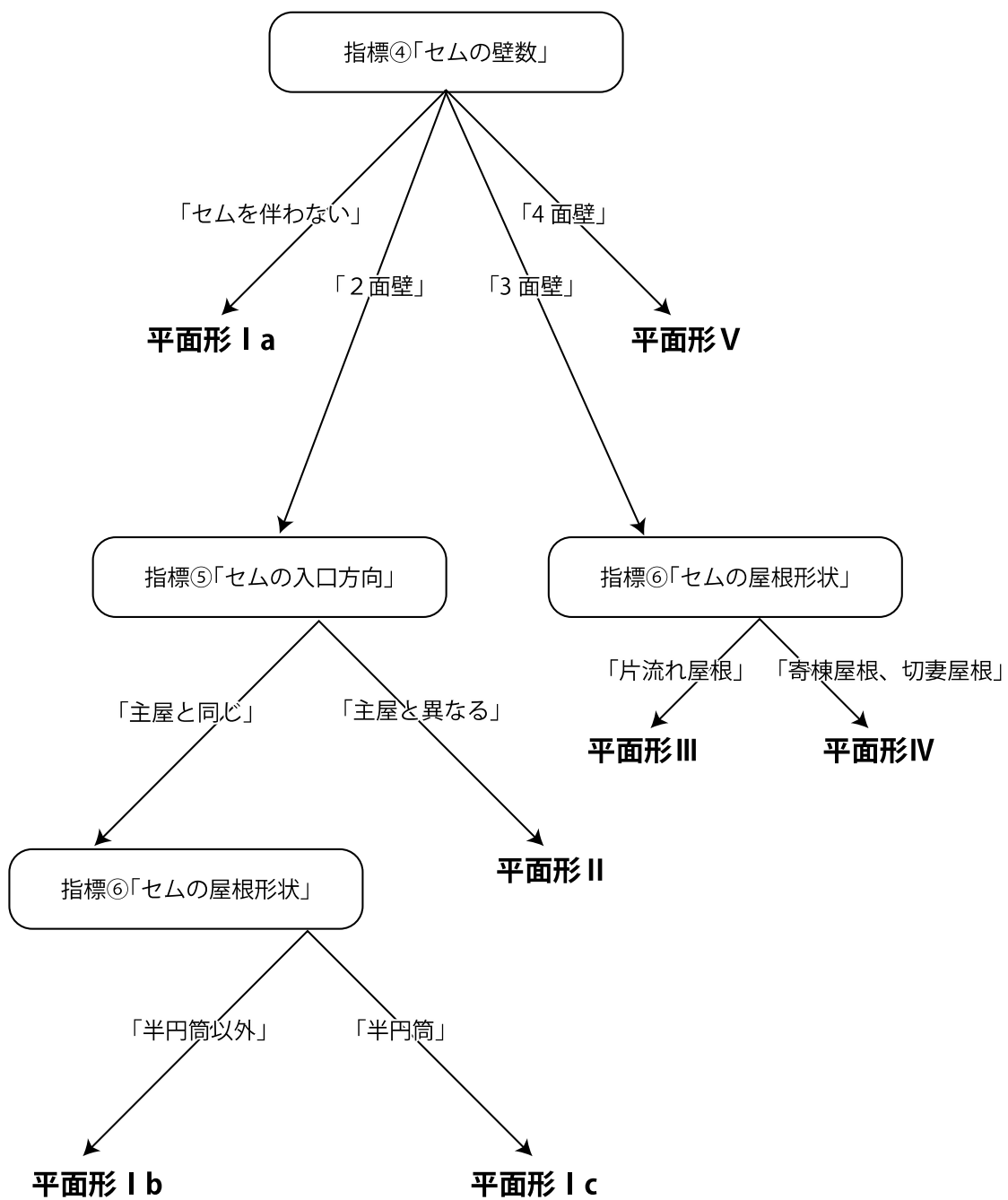
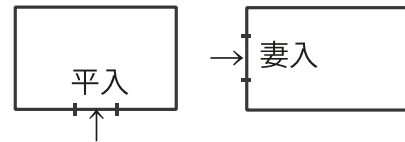


図 4-9 セムの平面形の分類



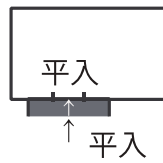
平面形 I a

セムを伴わない平面形



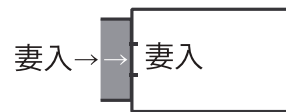
平面形 I b

「2面壁-簡易屋根構造」の「小庇」



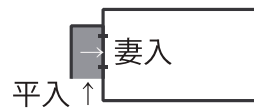
平面形 I c

「2面壁-半円筒型構造」の「小庇」



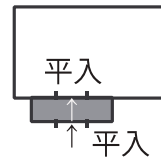
平面形 II

「2面壁-簡易屋根構造」の「下屋」



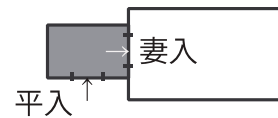
平面形 III

「3面壁-簡易屋根構造」の「下屋」



平面形 IV

「3面壁-小屋根型構造」の「下屋」



平面形 V

「4面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

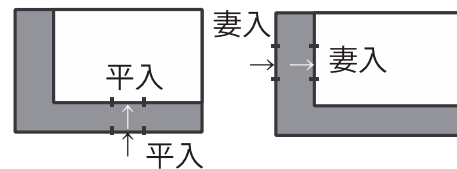


図 4-10 推測される平面形

（３）その他の指標

指標⑦「主屋の入口」、指標⑧「セムの接続位置」、指標⑨「壁材」は、建築物の変形を見ることが出来る指標であり、特に指標⑨「壁材」においては、建築物の改良性や地域性を見ることが出来る指標である。

（４）類型化

類型化は、「主屋屋根部」、「セムの平面形」、「その他の指標」の組合せから、各年代の平地式建築物の類型を行う手法とする。

4-6 小結

第４章では、第３章の「写真資料の検証」により信頼性の高い写真資料から抽出した平地式建築物 104 件を基に、9 つの外観意匠の指標を設定し、「主屋屋根部」、「セムの平面形」、「その他の指標」の３つの組合せから、総合的な建築類型を行う手法を確立した。次章以降、この類型化の手法を用い、アイヌ民族の建築物の特徴を明らかにしていく。

注

注1) 既往研究において、平地式建築物の類型化に特化した研究は見られないが、建築物の特徴を説明する手段として類型化に類似する記載をしている。

第5章 「毛民青屋集」に基づいた1940年の二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態

5-1 はじめに

本章では、第3章の資料の検証から信頼性の高い「毛民青屋集」5～6を用いて、これまでに十分に研究が行われていない「1860年代から1950年代」を対象とした研究の一端をになう1940年の二風谷村アイヌ集落（図5-1）に見られた建築物の実態を明らかにすることを目的とした。鷹部屋氏の二風谷村アイヌ集落に関する研究^{注1)}を見ると、二風谷村アイヌ集落内の建築物を比較した研究は見られず、また、平面図を残しているがそれらを用いた研究も行われていなかった。鷹部屋氏以外の研究^{注2)}を見ても、断片的な調査報告にとどまり、考察は行われていない状況であった。

本章では、第3章で作製した位置図から、集落の状況や建築物の配置状況を明らかにし、次に、二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の類型化を行い、建築物の外観形状の特徴及び平面規模の特徴を明らかにする手順で行った。

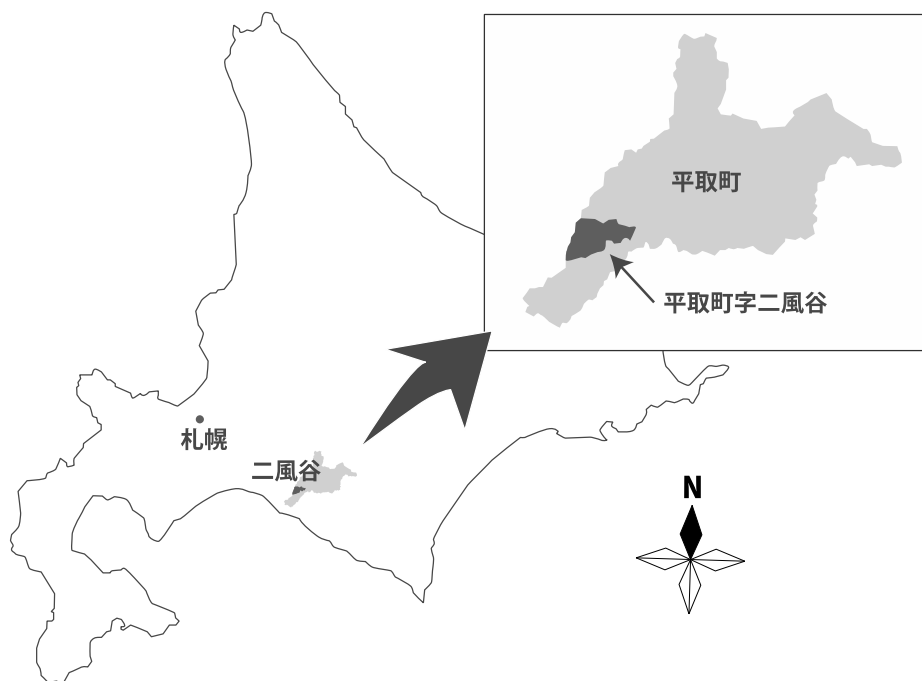


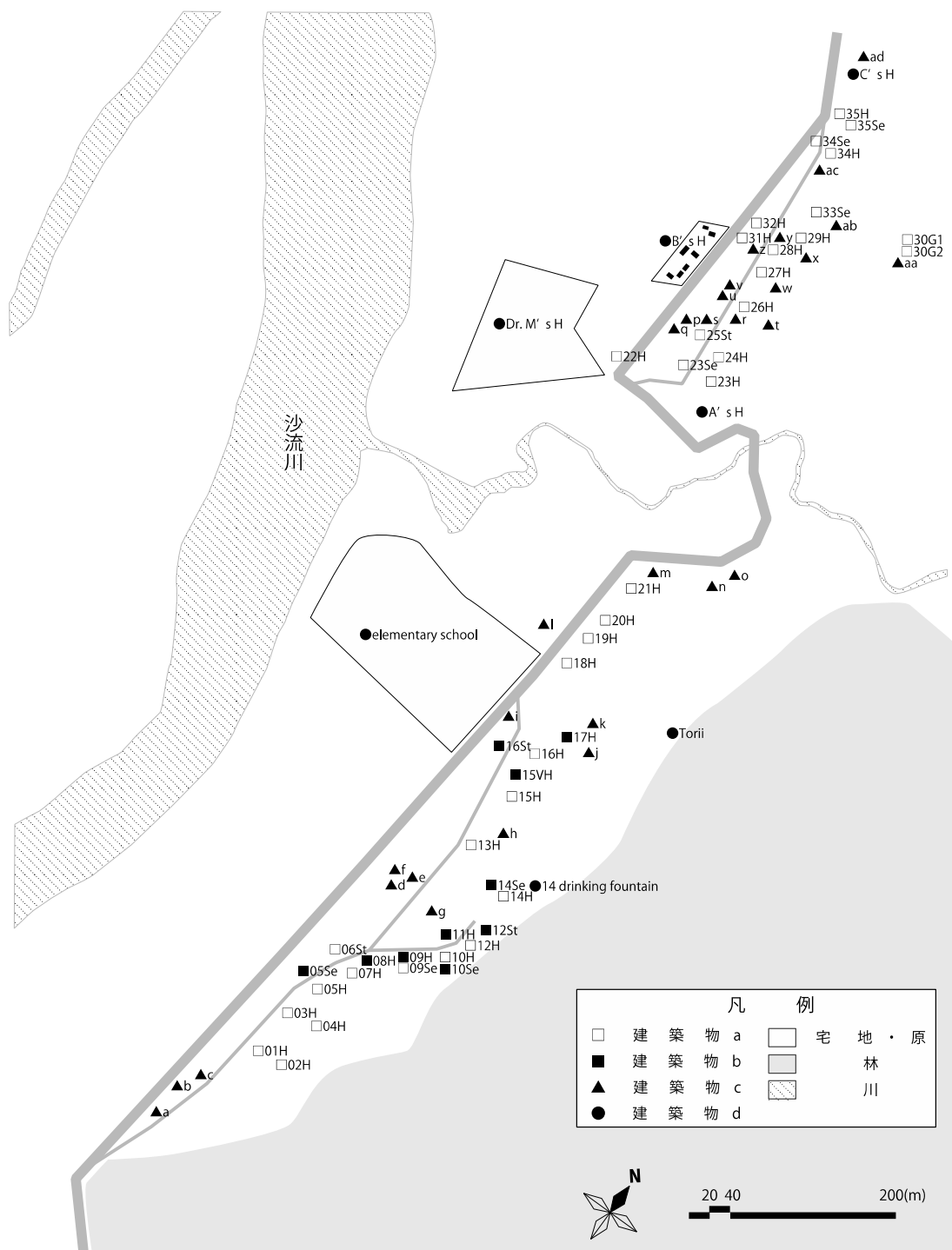
図 5-1 二風谷の位置図

5-2 集落の建築物の配置状況

位置図（図 5-2）から集落の状況を見ると、集落は沙流川沿いにあり、現在の国道 237 号の東側に密集して建築物が建造され、アイヌ民族と和人が共にアイヌ集落内で生活をしてきた。建築物の周りは畑であり、アイヌ民族は農家として生計を立てていた^{注 3)}。道路の西側には、二風谷小学校、マンロー氏の診療所があった。

鷹部屋氏が調査した 36 件の建築物（建築物 a）の配置を見ると、主屋長軸が南北軸である建築物は 36 件の内 31 件（件数比 86.1%）と大半を占め、また、建築物の入口は 36 件の内 26 件（件数比 72.2%）が道路に面していた（図 5-3 を参照）。道路の東に位置する建築物は、主屋長軸が南北軸で西側に入口を持つ平入の建築物となる傾向が見られた（□14H の建築物は、南側に入口を持つ妻入の建築物となっている）。

納屋の役割をはたす高床倉庫（プー）は、1940 年の二風谷村には確認できず、住居と同様の平地式の建築物を納屋として利用している。また、イナウ（祭壇）や熊檻も確認できなかった。



注

建築物 a : 「写真と平面図が存在し、建築用途が分かり、人名表にアイヌ人名が記載されている建築物」

建築物 b : 「平面図はなく写真が存在し、建築用途が分かり、人名表にアイヌ人名が記載されている建築物」

建築物 c : 「平面図はなく写真が存在し、建築用途が不明で、人名表に記載のない建築物」

建築物 d : 「アイヌ民族以外の建築物（和人住居、学校等の建築物）」

図 5-2 位置図

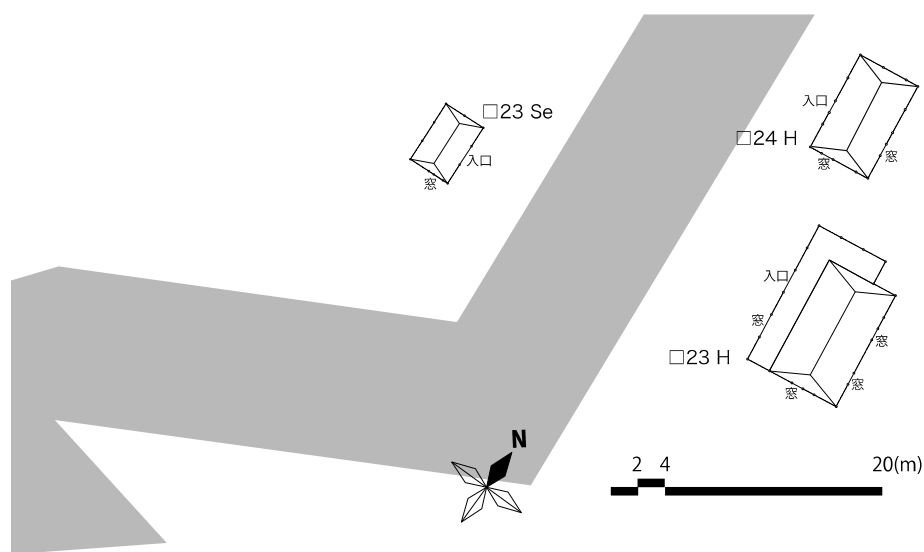


図 5-3 配置図（□23H 周辺）

5-3 二風谷村アイヌ集落の建築物の類型化

類型化は、資料の検証において、アイヌ民族の建築物である「建築物 a」及び「建築物 b」を基に、行った。鷹部屋氏は、1940 年当時の二風谷村の建築物について、「本村の民家は和人家屋とアイヌ家屋の二種類であって、前者は柂葺又はトタン葺であり、後者の多くはアイヌ家独特な段々茅葺のことが多い」と記している^{注 4)}。

二風谷村アイヌ集落に見られた屋根部は、「茅葺寄棟屋根」、「茅葺切妻屋根」、「改良住宅」の 3 つであった。「1860 年代から 1950 年代」においては、「壁材」が重要になることから、件数の多い「茅葺寄棟屋根」の建築物については、「茅壁」と「マサ壁」により細分化した。よって、二風谷村アイヌ集落の建築物の類型は、以下の 4 つとなった。

「茅葺寄棟屋根の建築物（茅壁）」（以下、類型 A）（図 5-4）

「茅葺寄棟屋根の建築物（マサ壁）」（以下、類型 B）（図 5-5）

「茅葺切妻屋根の建築物」（以下、類型 C）（図 5-6）

「改良住宅」（以下、類型 D）（図 5-7）



図 5-4 類型 A「茅葺寄棟屋根の建築物（茅壁）」

資料：「毛民青屋集」5～6 調査票 18n の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 5-5 類型 B「茅葺寄棟屋根の建築物（マサ壁）」

資料：「毛民青屋集」5～6 調査票 45n の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 5-6 類型 C「茅葺切妻屋根の建築物」

資料：「毛民青屋集」5～6 調査票 50n の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 5-7 類型 D「改良住宅」(写真右側の建築物)

資料：「毛民青屋集」5～6 調査票 52n の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

以下に、各類型の特徴と件数比（表 5-1、図 5-8）を記す。

①類型 A

類型 A は、アイヌ民族の伝統的な建築物の形態であるが、「建築物 a」と「建築物 b」の合計の件数は 11 件（件数比 23.9%）、「建築物 a」と「建築物 b」と「建築物 c」の合計の件数は 14 件（件数比 18.4%）であり、1940 年の二風谷村アイヌ集落では、件数の多い建築物ではなかったと考えられる。

②「マサ壁茅葺屋根の寄棟建築物」（以下、類型 B）

類型 B は、類型 A の屋根形状・屋根材で、壁がマサ壁である建築物であり、「建築物 a」と「建築物 b」の合計の件数は 29 件（件数比 63.1%）、「建築物 a」と「建築物 b」と「建築物 c」の合計の件数は 41 件（件数比 53.9.0%）であることから、最も件数の多い建築物であったと考えられる。

③「茅葺屋根の切妻建築物」（以下、類型C）

類型Cは、切妻屋根の建築物であるが、アイヌ民族の建築物を描いた絵画資料^{注5)}や写真資料^{注6)}に見受けられ、アイヌ民族の建築物の形態の1つであり、「建築物a」と「建築物b」の合計の件数は3件（件数比6.5%）、「建築物a」と「建築物b」と「建築物c」の合計の件数は5件（件数比6.6%）と件数は少ない。

④「葺葺屋根又はトタン屋根の建築物」（以下、類型D）

類型Dは、茅葺材を用いていない葺葺屋根又はトタン屋根の建築物であり、アイヌ民族においては、1937年の北海道旧土人保護法の一部を改正し、アイヌ民族に対して住宅改良のための資金を支給する制度が定められ、その基準として制定された建築物と同等のものである。「建築物a」と「建築物b」の合計の件数は3件（件数比6.5%）、建築物a」と「建築物b」と「建築物c」の合計の件数は16件（件数比21.1%）であり、集落内には2割りほど存在したが、アイヌ民族においては、類型Bほど多くなく、1940年以後に増加したと考えられる。

表 5-1 建築物の件数

	類型A	類型B	類型C	類型D
建築物a	9件	24件	3件	0件
建築物b	2件	5件	0件	3件
建築物c	3件	12件	2件	13件

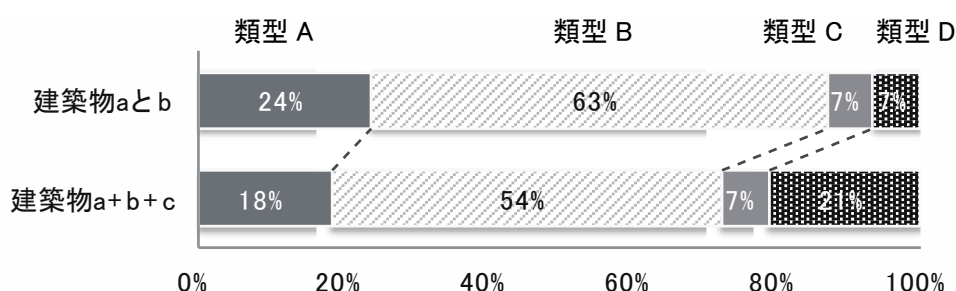


図 5-8 建築物の件数比

5-4 類型化した建築物の用途と平面形と外観形状から見た特徴

資料の検証において分類した建築用途が分かりアイヌ民族の建築物である「建築物 a」36 件、「建築物 b」10 件の計 46 件の建築物に対し、二風谷村アイヌ集落で確認できた平面形（図 5-9）、用途及び平面形別の件数（表 5-2）、用途別件数比（図 5-10）、外観的特徴から各類型の特徴を明らかにした。

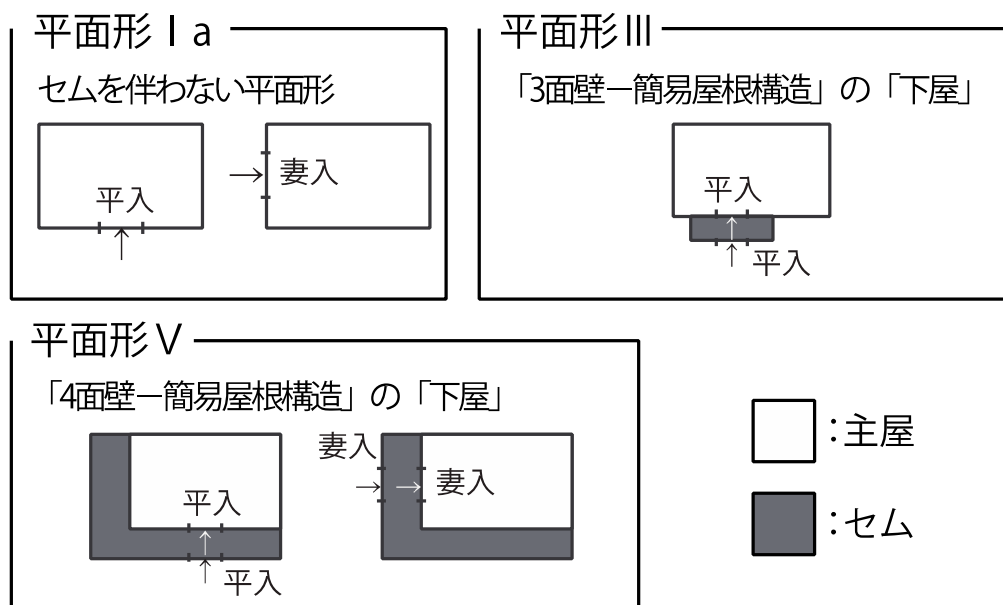


図 5-9 平面形

表 5-2 用途及び平面形別の建築物の件数（建築物 a と建築物 b）

類型	用途	平面形Ⅰa		平面形Ⅲ	平面形Ⅴ	
		平入	妻入	平入	平入	妻入
A	住居・空家	4件	0件	0件	0件	0件
	納屋	5件	0件	0件	0件	0件
	厩舎	2件	0件	0件	0件	0件
B	住居・空家	13件	3件	4件	4件	1件
	納屋	平入1件、不明1件		0件	0件	0件
	厩舎	2件	0件	0件	0件	0件
C	住居・空家	0件	0件	0件	0件	0件
	納屋	平入1件、不明1件		0件	0件	0件
	厩舎	0件	1件	0件	0件	0件
D	住居・空家	不明3件		0件	0件	0件
	納屋	0件	0件	0件	0件	0件
	厩舎	0件	0件	0件	0件	0件

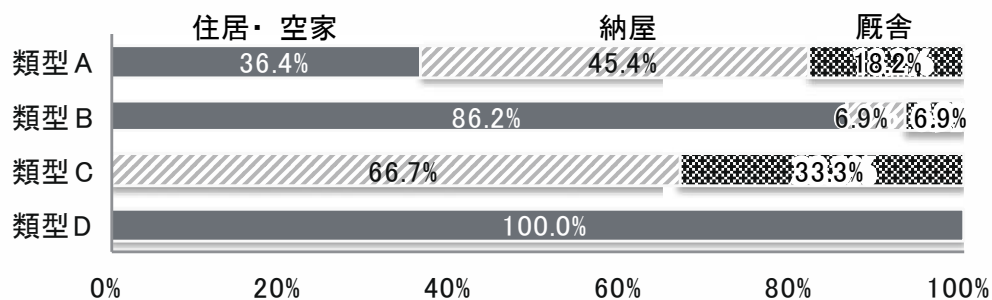


図 5-10 用途別に見た建築物の件数比（建築物 a と建築物 b）

①類型 A

類型 A は 11 件あり、平面形は全て平面形 I a の平入である。用途別件数を見ると、住居が 4 件（件数比 36.4%）、納屋が 5 件（件数比 45.4%）、厩舎が 2 件（件数比 18.2%）であり、用途は多岐にわたる。外観意匠の特徴として、住居と住居以外の建築物を比べると、住居の壁は、住居以外の建築物の壁より、茅が密に葺かれており、開口部を見ると、住居には全て壁に窓があるが、住居以外の建築物には窓の無いものが多く、入口は戸がない傾向にある（図 5-11、図 5-12）。



図 5-11 類型 A の住居

資料：「毛民青屋集」5～6 調査票 27(a)n の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 5-12 類型 A の住居以外の建築物

資料：「毛民青屋集」5～6 調査票 13n の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

②類型 B 「桎壁茅葺屋根の寄棟建築物」

類型 B は 29 件あり、平面形を見ると、平面形Ⅰa は、平入の住居が 13 件、妻入の住居が 3 件、住居以外では平入 3 件と入口が不明なものが 1 件である。平面形Ⅲは、セムの屋根形状が片流れ屋根であり、平入の住居が 4 件である。平面形Ⅴは、セムの屋根形状が片流れ屋根であり、平入の住居が 4 件、妻入の建住居が 1 件である。以上のことから、類型 B の平面形は、平面形Ⅰa の平入が大半を占め、また、セムを伴う平面形Ⅲ及び平面形Ⅴの建築物は、全て住居の用途である。用途別件数を見ると、住居が 25 件（件数比 86.2%）、納屋が 2 件（件数比 6.9%）、厩舎が 2 件（件数比 6.9%）であり、用途は主に住居として用いられている。外観の特徴は、開口部にガラス窓や板戸（ガラス入りの板戸も有）を設置している。

③類型C「茅葺屋根の切妻建築物」

類型Cは3件あり、平面形は全て平面形Iaであり、平入が1件、妻入の建築物が1件、入口が不明な建築物が1件である。用途別件数を見ると、納屋が2件（件数比66.7%）、厩舎が1件（件数比33.3%）であり、全て住居以外の用途である。外観的特徴として、壁は、茅壁が2件、マサ壁が1件を確認できる。

④類型D「桁葺屋根又はトタン屋根の建築物」

類型Dは、写真に全形が写り込まず入口位置等が不明であるが、3件あり、用途は全て住居である。屋根形状は寄棟屋根1件と切妻屋根2件を確認できる。

二風谷村におけるアイヌ民族の建築物は、類型Bでみられるように、屋根構造はそのまま、壁を茅壁からマサ壁、ガラス窓や板戸に改良する建築物が多く、類型Dの改良住宅は、1940年には普及していなかった。

5-5 類型化した建築物の平面図から見た特徴

資料の検証において分類した平面図が付属する「建築物a」36件に対し、平面規模から分析を行った。表5-3は、36件の建築物を主屋の長辺(間)、主屋の短辺(間)、主屋の面積(坪)、セムの面積(坪)、セム以外の主屋に付属する室の面積(坪)、合計面積(坪)でまとめたものである。

主屋の長辺と短辺の組み合わせは、11通り確認でき、長辺が4間で短辺が3間の組み合わせが36件のうち14件(件数比38.9%)で多く、その他はいずれも1~4件程度とばらつきがあり、主屋の平面規模は、類型A~類型Cまで大きな差異は見られない(表5-4)。類型Dに関しては、鷹部屋氏の平面図の記録がない。

用途別で見ると、住居は27件あり、その内、長辺が4間で短辺が3間以上の主屋平面が19件(住居の70.4%)と多く、合計面積の平均は14.4坪(主屋の面積の平均は12.2坪)である。納屋や厩舎の住居以外の建築物は9件あり、その内、長辺が4間で短辺が3間未満の主屋平面が6件(住居以外の建築物の66.7%)と多く、主屋の面積の平均は8.6坪であり、住居の主屋の面積より小さい。

表 5-3 類型別の平面規模（建築物 a）

類型	用途	建築物	主屋 長辺(間)	主屋 短辺(間)	主屋 面積(坪)	セム 面積(坪)	その他 面積(坪)	合計 面積(坪)
A	住居	□02H	4	3	12			12
		□19H	4	3	12			12
		□24H	3	2.5	7.5		2.5	10
		□01H	3	2	6			6
	納屋	□33Se	4	3	12			12
		□35Se	3.5	2.5	8.75			8.75
		□23Se	3	2	6			6
		□34Se	3	2	6			6
	厩舎	□06St	4	3	12			12
B	住居	□10H	5	4	20			20
		□12H	5	4	20	5	1.25	26.25
		□35H	5	4	20	3		23
		□15H	5	3	15	9		24
		□23H	5	3	15	8		23
		□26H	5	3	15	7	8.25	30.25
		□29H	4.5	3	13.5			13.5
		□32H	4.5	3	13.5			13.5
		□04H	4	3	12			12
		□05H	4	3	12			12
		□13H	4	3	12			12
		□16H	4	3	12	8		20
		□18H	4	3	12			12
		□20H	4	3	12	2		14
		□21H	4	3	12			12
		□27H	4	3	12			12
		□28H	4	3	12			12
		□34H	4	2.5	10			10
		□07H	4	2.5	10			10
		□31H	3	3	9		3.5	12.5
		□22H	3.5	2.5	8.75		2	10.75
		□03H	3	2.5	7.5			7.5
		□14H	3	2.5	7.5			7.5
	厩舎	□25St	3	2	6			6
C	納屋	□09Se	3.5	3	10.5			10.5
		□30Se	2	2	4			4
	厩舎	□30St	4	3	12			12

表 5-4 主屋の長辺と短辺の組合せ件数

(短 辺)

	2間	2.5間	3間	4間
(長 辺)	2間	1件		
	3間	4件	3件	1件
	3.5間		2件	1件
	4間		2件	14件
	4.5間			2件
	5間			3件

以下に各類型の平面規模を記す。

①類型 A「茅壁茅葺屋根の寄棟建築物」

主屋面積は、長辺が 3 間で短辺が 2 間の 6 坪から、長辺が 4 間で短辺が 3 間の 12 坪まで存在する。類型 A だけを見ると、住居と住居以外の建築物に大きな違いは見られない。

②類型 B「桁壁茅葺屋根の寄棟建築物」

主屋面積は、長辺が 3 間で短辺が 2 間の 6 坪から、長辺が 5 間で短辺が 4 間の 20 坪まで存在する。セムの面積は、平面形Ⅲが 2～5 坪、平面形 V が 7～9 坪まで存在する。

セムを伴う建築物は、セムを伴わない建築物よりセムの面積の分、合計面積も大きくなるが、主屋面積を見ても、長辺が 5 間で短辺が 3～4 間の建築物が 5 件（セムを伴う建築物 7 件の 71.4%）と多く、セムを伴わない建築物より主屋平面が大きい。

③類型 C「茅葺屋根の切妻建築物」

主屋面積は、長辺が 2 間で短辺が 2 間の 4 坪から、長辺が 4 間で短辺が 3 間の 12 坪まで存在する。

④類型 D「桁葺屋根又はトタン屋根の建築物」

類型 D に関しては、平面図の添付が無いが、1937 年の住宅改良標準設計図^{注 7)}と同等であったとすると、主屋面積は、15 坪前後を標準としており、他の類型と大きな違いがなかったことが窺える。

5-6 小結

本章は、「毛民青屋集」5～6 を基にして、伝統的なアイヌ民族の建築物だけではなく、これまで研究対象とされなかった改良型のアイヌ民族の建築物も研究対象とし、第 3 章において連絡図、給与地図、航空写真を検討する事により、1940 年の二風谷村アイヌ集落の建築物の配置状況、二風谷村アイヌ集落の建築物の外観の特徴、二風谷村アイヌ集落の平面規模の特徴を明らかにした。

(1) 二風谷村アイヌ集落の建築物の配置状況

鷹部屋氏が調査した 1940 年の二風谷村アイヌ集落は、現在の国道 237 号の沙流川沿い

にあり、二風谷村で生活をするアイヌ民族 47 戸の内 35 戸以上が生活をしていた。集落内には、二風谷小学校やマンロー氏の診療所があり、和人も 3 戸以上が確認でき、アイヌ民族と和人がともに生活をしていた。建築物の配置を見ると、主屋長軸が南北軸である建築物は 36 件の内 31 件（件数比 86.1%）と大半を占め、建築物の入口は 36 件の内 26 件（件数比 72.2%）が道路に面して建てられていた。納屋の役割をはたす高床倉庫（プー）は、1940 年の二風谷村には確認できず、住居と同様の平地式の寄棟建築物と切妻建築物を納屋として利用していた。

（２）二風谷村アイヌ集落の建築物の外観の特徴

二風谷村アイヌ集落の建築物は、その外観形状から大きく「茅壁茅葺寄棟屋根の建築物（類型 A）」、「マサ壁茅葺寄棟屋根の建築物（類型 B）」、「茅葺切妻屋根の建築物（類型 C）」、「改良住宅（類型 D）」の 4 つに分類された。1940 年当時において伝統的と考えられていた類型 A の建築物は、用途は住居、納屋、厩舎と多岐にわたり、平面形は全てセムを伴っていないかった。用途別に見ると、住居の壁は住居以外の建築物の壁より茅が密に葺かれており、また、住居には全て壁に窓があるのに対して住居以外の建築物には窓の無いものが多く、入口に戸がない傾向にあった。アイヌ民族の多くは、類型 B の建築物を住居として用いており、開口部にガラス窓や板戸を設置し、片流れ屋根のセムを接続する住居も見られた。類型 C の建築物は、件数が少なく、納屋や厩舎として用いられ、壁は茅壁とマサ壁を確認できた。類型 D の建築物は、和人が住んでいた建築物であるが、アイヌ民族においても 1937 年以降、改良住居として住むことが提唱されていた。しかし、二風谷村においては、類型 B でみられるように、屋根構造はそのまま、壁を茅壁からマサ壁、ガラス窓や板戸に改良する建築物に住むアイヌ民族が多く、類型 D の改良住宅は、1940 年にはまだ普及していなかった。

（３）二風谷村アイヌ集落の建築物の平面規模の特徴

平面図から二風谷村アイヌ集落の建築物の平面規模の特徴について見ると、類型化別では平面規模に大きな違いは見られないが、主屋の長辺と短辺の組み合わせ、用途別の主屋面積、セムの有無による主屋面積の 3 つに平面規模の特徴が見られた。主屋の長辺と短辺の組み合わせは、11 通りと多岐にわたるが、長辺が 4 間で短辺が 3 間の組み合わせが 36 件のうち 14 件（38.9%）と多い。用途別の主屋面積について見ると、住居は 27 件あり、その

内、長辺が4間で短辺が3間以上の主屋平面が19件（住居の70.4%）と多く、主屋面積の平均は12.2坪である。一方、納屋や厩舎の住居以外の建築物は9件あり、その内、長辺が4間で短辺が3間未満の主屋平面が6件（住居以外の建築物の66.7%）と多く、主屋面積の平均は8.6坪であり、住居の主屋面積より小さい。セムの有無による主屋平面について見ると、セムを伴う建築物は7件あり、その内、長辺が5間で短辺が3～4間の主屋平面が5件（セムを伴う建築物の71.4%）と多く、セムを伴わない建築物より主屋平面が大きい。

（4） 1940年の二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態

二風谷村アイヌ集落の建築物の配置状況、建築物の外観の特徴及び平面規模の特徴から見た、1940年の二風谷村アイヌ集落の建築物の実態は、類型Bの建築物が1940年当時において、住居として多くのアイヌ民族に用いられており、茅壁からマサ壁への壁の変更、ガラス窓の設置が当時の改良住宅であり、類型Dのような改良住宅に住むようになるのは、1940年以降であった。建築物の配置は主屋長軸が南北軸で入口が道路に面する傾向に有り、平面規模は長辺が4間で短辺が3間の主屋が一般的であったが、セムを伴う住居の主屋は長辺が5間で短辺が3～4間であった。伝統的と考えられている類型Aの建築物も見られたが、セムを伴った建築物は見られなかった。用途別に建築物を使い分けていた事も確認でき、特に類型Cの切妻建築物は納屋や厩舎のみの利用であったことが明らかとなった。

注

注1) 鷹部屋福平：アイヌ住居の研究 - 日高平取方面に於ける地方性 - , 北方文化研究報告, 第五輯, pp. 103-142, 1941年7月.

注2) 石原憲治：日本農民建築の研究, 建築雑誌, 1932年10月. 関野克：鐵山秘書高殿に就いて, 考古学会 考古学雑誌, 第28巻7号, 1938年7月. 竹内芳太郎：アイヌの選ぶ住宅(1), 民家 民家研究会, 第Ⅲ輯 2号, 1939年2月. 竹内芳太郎：アイヌの選ぶ住宅(2), 民家 民家研究会, 第Ⅲ輯 3号, 1939年3月. 杉野謙三：アイヌ部落, 満州建築雑誌, 1940年. 村田治郎：アイヌの家の史的解釈, 建築学会大会梗概集, 1950年8月. 村田治郎：原始住居構造の一つの型, 建築雑誌, 775号, 1951年7月. 太田博太郎：古代住居の系統について, 建築雑誌, 775号, 1951年7月. 三田克彦：「えつり」と「こまい」-その語源とアイヌ住居の外殻構造-, 日本建築学会論文集, 第46号, 1953年3月. 越野武：北海道の住宅の歴史, 寒地建築教材 概論編, 1984年. 乾尚彦：アイヌの住居, 住宅建築 別冊37 北国の住まい, 1989年. 宮澤智士：日本列島民

家史，住まいの学体系 022，1989 年 7 月．遠藤明久：アイヌ住居の構造に影響を与えた松前藩の施策，日本建築学会大会梗概集，1992 年 9 月．小林法道：白老地方の北海道アイヌ建築の平面形，民族建築，112 号，1997 年．国文学の見地による研究は以下の通りである．金田一京助：アイヌ芸術 木工編，1942 年．言語学の見地による研究は以下の通りである．地里真志保：アイヌ住居に関する若干の考察，民族建築学，第 14 巻第 4 号，1950 年 5 月．文化人類学の見地による研究は以下の通りである．大林太良：アイヌ家屋の系統に関する一試練-ketun-ni-について，民族学研究，1956 年 12 月．杉本尚次：日本民家の研究，ミネルヴァ書房，1969 年 9 月．

注3) 渡辺茂，河本本道編：平取町史，平取町，1974 年 3 月．

注4) 注 1) と同一の報告書である。

注5) 1799 年成立の谷元旦の『蝦夷紀行』の「居家露柱梁図」に切妻建築の軸組を描いた絵画を確認できる。

注6) 北海道大学付属図書館所蔵、1895 年(明治 28 年)撮影、「釧路国阿寒郡セツリ川上流字ピラカアイヌ部落之景」等の写真において、茅葺屋根の切妻建築を確認できる。

注7) 1937 年(昭和 12 年)に北海道旧土人保護法の一部を改正し、アイヌ民族に対して住宅改良のための資金を支給する制度が定められ、その基準として制定された設計図を指す。河野本道編：対アイヌ政策法規類集，北海道出版企画センター，1981 年 8 月．

第6章 「毛民青屋集」に基づいた 1940 年の白老村アイヌ集落に見られた建築物の実態

6-1 はじめに

本章では、第5章と同様に、第3章の資料の検証から信頼性の高い「毛民青屋集」7～8を用いて、1940年の白老村アイヌ集落（図6-1）に見られた建築物の実態を明らかにすることを目的とした。

研究の手順は、第3章で作製した土地区画図から白老村アイヌ集落の土地区画の特徴を明らかにし、次に、白老村アイヌ集落に見られた建築物を類型化し、建築物の屋根形状や外観意匠や入口と窓の位置といった外観の特徴、平面形や延べ床面積といった平面規模の特徴、及び建築物の所有状況を分析する流れですすめ、1940年当時の白老村アイヌ集落の建築物の実態を明らかにした。

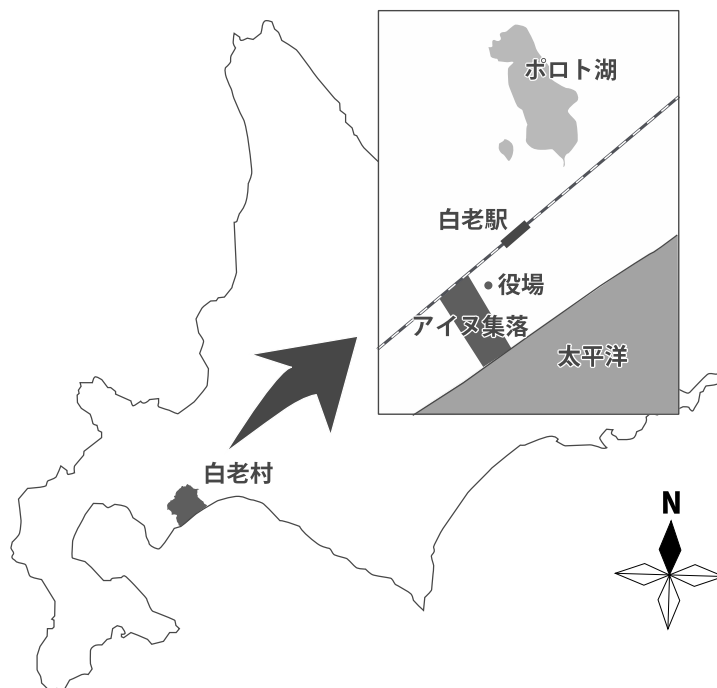


図 6-1 1940 年当時の白老村アイヌ集落の位置

6-2 土地区画の特徴（図 6-2）

白老村アイヌ集落の土地区画は、北は国道、南は太平洋に至る2本の南北道路（南北軸から反時計回りに凡そ30度の傾きがある）と南北道路に垂直な4本の東西道路が交わった土地に対し、1区画450坪（15間×30間）を基本に区画整備されていた。

1912年において、白老村アイヌ集落は96区画で整備されていたが、鷹部屋氏が調査を

行った 1940 年には、96 区画の外側（区画「c」）にもアイヌ民族が住んでいた事が分かる。鷹部屋氏が調査した 20 名の内 18 名は 1 区画の所有であることから、割り渡された給与地は 1 世帯に 1 区画（坪数は凡そ 450 坪）を基本としていたと考えられる。第 2 白老小学校は 630 坪の 3 区画、北海道庁立白老病院は 360 坪と 450 坪の 2 区画に位置し、共に 1912 年以後に区画「a」に建てられた事が分かる。1937 年に両施設が旧土人保護法の改正に伴い廃止された後は、小学校は跡地が残り、病院は高橋医院として開業した^{注 1)}。

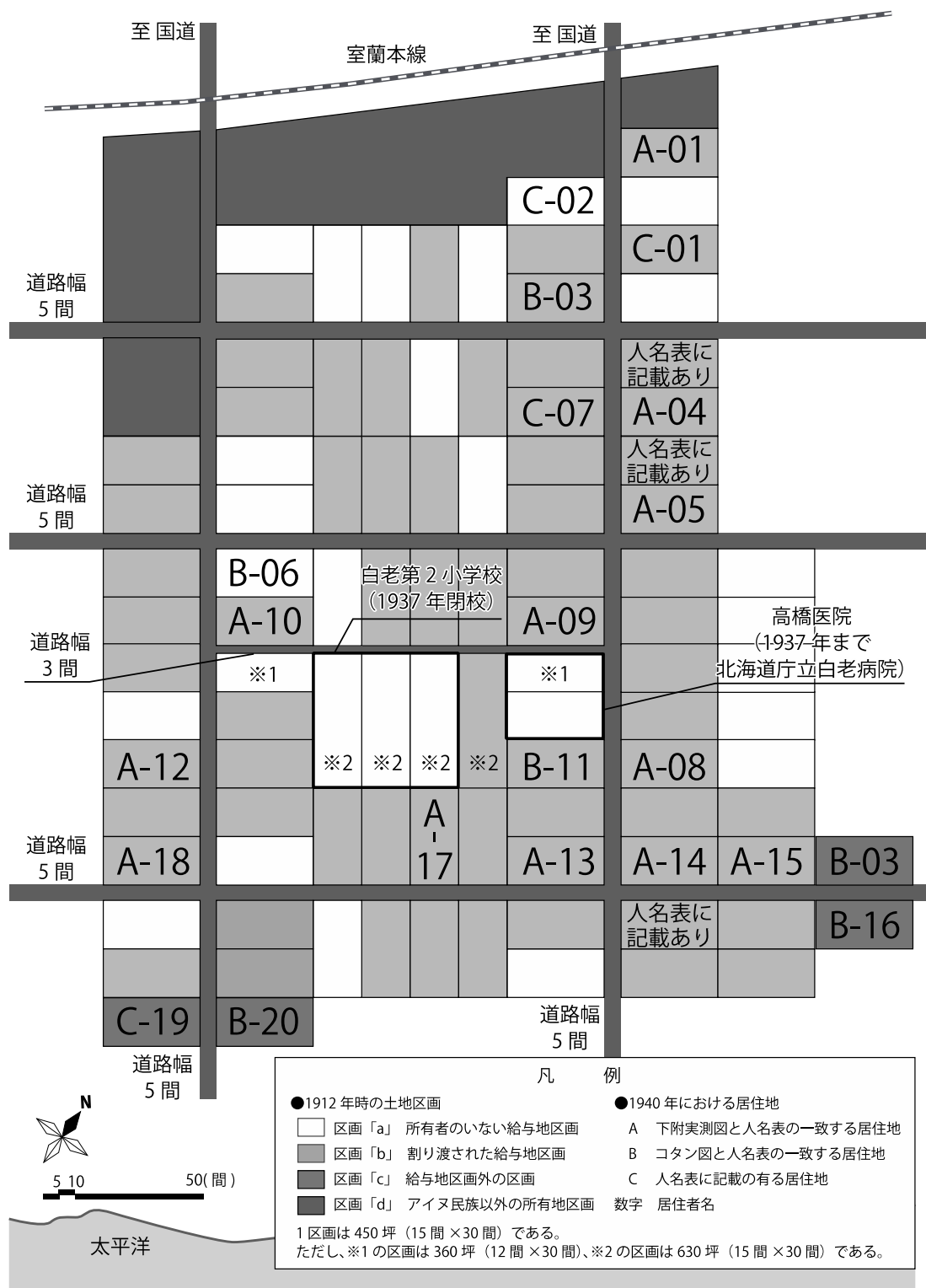


図 6-2 土地区画図

6-3 白老村アイヌ集落の建築物の類型化

類型化は、第3章において資料の検証により抽出した、20名の居住者及び、20名の居住者が所有する「平地式寄棟建築物」23件を類型A、「平地式切妻建築物」7件を類型Bとした。また、「付属建築物」10件については、既往研究を基に分析した。平地式建築物を第4章における類型化に置き換えると、以下のようになった。

【平地式建築物】

「茅葺寄棟屋根の建築物」（以下、類型a）

「茅葺切妻屋根の建築物」（以下、類型b）

6-4 「茅葺寄棟屋根の建築物」（類型a）の特徴

「類型a」23件について、平面形と延べ床面積、外観意匠、入口と窓の位置を分析し（表7-1）、「類型a」の特徴を明らかにする。

表 6-1 類型 a の特徴

建築物	平面形の分類			セムの規模と形状			主屋の規模			延べ床 面積(m ²)	外観意匠		窓位置※3			
	分類	セムの位置	セムの入口	主屋の入口	面積(m ²)	機能	屋根形状	長辺(m)	短辺(m)		面積(m ²)	壁		窓※2		
01H	平面形1a			妻入				13.2	7.3	96.36	96.36	茅壁	茅葺と木蓋	南2東1		
03H-2	平面形1a			妻入					7.0	6.1	42.70	42.70	茅壁	覆い無し	南1	
03H-1	平面形1a			妻入					8.0	6.0	48.00	48.00	茅壁	ガラス窓	南1東1	
06H	平面形1a			平入					7.4	5.9	43.66	43.66	マサ壁	木蓋	南1東1	
11H	平面形1a			平入					6.5	5.2	37.70※1	37.70	茅壁	覆い無し	南1西1東1	
20H	平面形1a			平入					7.0	4.8	33.60	33.60	茅壁	覆い無し	南1東1	
12H	平面形1a			平入					6.0	5.4	32.40	32.40	マサ壁	ガラス窓	南1東1	
13H	平面形1a			平入					6.0	5.2	31.20	31.20	茅壁	木蓋	南1東1	
19H	平面形1a			平入					6.0	4.9	29.40	29.40	茅壁	木蓋	南1東1	
18H	平面形1a			平入					5.3	3.7	19.61	19.61	茅壁	木蓋	南1東1	
17H	平面形1a		平入					3.6	3.5	12.60	12.60	茅壁	覆い無し	南1東1		
05S	平面形1a		平入					3.4	2.6	8.84	8.84	茅壁	窓なし	窓なし		
08H	平面形1b		主屋平側	平入	平入	1.80	小庇	片流れ	9.7	5.9	57.23	59.03	マサ壁	ガラス窓	窓窓	南1東1
04H	平面形1b		主屋平側	平入	平入	1.68	小庇	片流れ	8.8	5.7	50.16	51.84	茅壁	ガラス窓	窓窓	南2東1
05H	平面形1b		主屋平側	平入	平入	0.80	小庇	片流れ	7.4	6.5	48.10	48.90	茅壁	ガラス窓	窓窓	南1西1東1
14H	平面形1b		主屋平側	平入	平入	1.70	小庇	片流れ	6.8	5.3	36.04	36.74	マサ壁	ガラス窓	窓窓	南1東1
01S	平面形1b		主屋平側	平入	平入	1.80	小庇	片流れ	5.8	4.2	24.36	26.16	茅壁	ガラス窓	窓窓	南1西1東1
16H	平面形1b		主屋平側	平入	平入	8.36	小庇	切妻	7.6	5.8	44.08	52.44	マサ壁	不明	窓窓	南1東1
15H	平面形1b		主屋平側	平入	平入	1.56	小庇	切妻	7.4	5.7	42.18	43.74	マサ壁	ガラス窓	窓窓	南1東1
07H	平面形1b		主屋妻側	平入	妻入	1.63	下屋	片流れ	4.7	4.3	22.61※1	24.24	茅壁	覆い無し	窓窓	南1
02H	平面形1b		主屋妻側	平入	妻入	15.60	下屋	寄棟	9.1	7.4	67.34	82.94	茅壁	ガラス窓	窓窓	南2東1
10H	平面形1b		主屋妻側	平入	妻入	17.20	下屋	寄棟	8.0	7.6	60.80	78.00	茅壁	木蓋	窓窓	南2東1
09H	平面形1b	主屋妻側	平入	妻入	12.09	下屋	寄棟	8.8	6.9	60.72	72.81	茅壁	ガラス窓	窓窓	南2東1	

※1 長方形平面の面積の他、平側の突出する下屋部の面積も含む。

※2 窓の表記について、「茅葺」は窓を茅で覆うもの、「木蓋」は窓を木材で覆うもの、「ガラス窓」は木窓枠にガラス窓を設置しているもの、「覆い無し」は窓が覆われていなく開いた状態のもの、「不明」は窓が写真に写らないものをさす。

※3 窓位置の表記について、「南2東1」を例にとると、南面に窓が2つ、東面に窓が1つを設置している事を指す。

(1) 平面形と延べ床面積

平面形は、4つを確認した(図6-3～図6-7)。

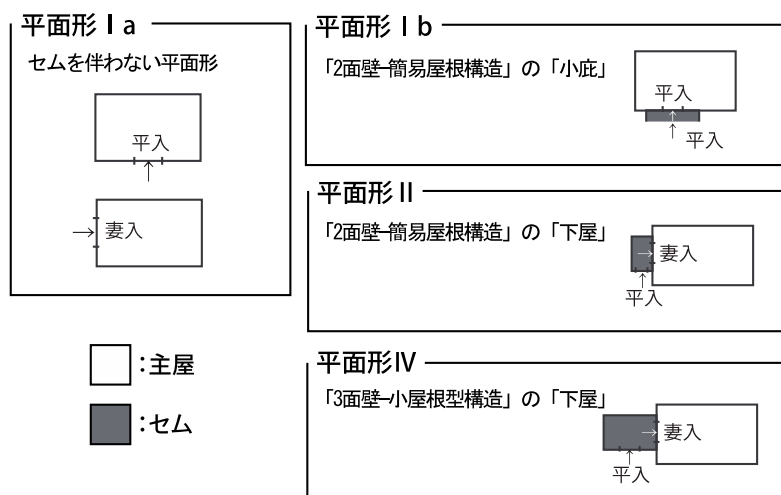


図 6-3 平地式寄棟建築物の平面形



図 6-4 平面形 I a の立面写真

資料：「毛民青屋集」7～8 調査票 29s の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 6-5 平面形 I b の立面写真

資料：「毛民青屋集」7～8 調査票 6s の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 6-6 平面形Ⅱの立面写真

資料：「毛民青屋集」7～8 調査票 35s の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 6-7 平面形Ⅳの立面写真

資料：「毛民青屋集」7～8 調査票 22s の写真部分

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

①平面形Ⅰa

平面形Ⅰaは、妻入が2件、平入が10件の計12件（寄棟屋根の建築物23件の内、件数比52.2%）であった。延べ床面積は、8.84㎡～96.36㎡まであり、30.00㎡未満が4件（内1件は納屋）、30㎡以上50㎡未満が7件、70㎡以上が1件であった。納屋である「□05S」の延べ床面積は、8.84㎡と住居より小さかった。

②平面形Ⅰb

平面形Ⅰbは、全て平入の平面形であった。セムの屋根形状は、片流れ屋根が5件、切妻屋根が2件の計7件（平地式寄棟建築物23件の内、件数比30.4%）であった。セムの面積は0.80㎡～8.46㎡、延べ床面積は26.16㎡～59.03㎡まであり、30.00㎡未満が1件（納屋）、30㎡以上50㎡未満が3件、50㎡以上70㎡未満が3件である。

③平面形Ⅱ

平面形Ⅱは、主屋の妻側に接続し、主屋妻入の平面形が1件（平地式寄棟屋建築物23件の内、件数比4.35%）確認できた。セムの屋根形状は片流れ屋根であり、セムの面積は1.63 m²、延べ床面積は24.24 m²であった。

④平面形Ⅳ

平面形Ⅳは、主屋の妻側に接続し、セムは平入、主屋妻入の平面形が3件（寄棟屋根の建築物23件の内、件数比13.0%）確認できた。セムの屋根形状は寄棟屋根であり、セムの面積は12.09 m²～15.60 m²、延べ床面積は72.81 m²～82.94 m²であった。

（2）外観意匠

建築物23件の屋根は全て段々に仕上げた茅葺きである。壁は、「茅壁」が17件（件数比73.9%）、「マサ壁」が6件（件数比26.1%）である。窓の有る22件の建築物の窓の葺口は、「茅葺と木葺」が1件、「木葺」が5件、「ガラス窓」が10件、「覆い無し」が5件、「不明」が1件である（図6-8～図6-10）。



図 6-8 窓の葺口（茅蓋）

資料：「毛民青屋集」7～8 調査票 2s の写真部分拡大

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 6-9 窓の葺口（木蓋）

資料：「毛民青屋集」7～8 調査票 74s の写真部分拡大

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室



図 6-10 窓の葺口（ガラス窓）

資料：「毛民青屋集」7～8 調査票 29s の写真部分拡大

所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

(3) 入口と窓の位置^{注2)}

建築物 23 件の建築物の配置は主屋長軸が各土地区画の東西軸にあたり、入口は平入では南で妻入では西に位置していた。窓の位置は、「南面に窓を 1 つ東面に窓を 1 つ設置（以下、「南 1 東 1」の様に表記）」が 23 件のうち 12 件（件数比 52.2%）、「南 2 東 1」が 5 件（件数比 21.7%）、「南 1 西 1 東 1」が 3 件（件数比 13.0%）、「南 1」が 2 件（件数比 8.7%）、「窓無し」が 1 件（件数比 4.3%）であった。

6-5 「茅葺切妻屋根の建築物」(類型 b) の特徴 (表 6-2)

「類型 b」7 件は、平面形、外観意匠、平面規模の特徴を明らかにした。平面形は、セムの伴わない矩形 (平面形 I a) で、入口は平入を 1 件、妻入を 1 件で、その他 5 件は不明であった。壁は 7 件全て茅壁であり、窓は設けていなかった。延べ床面積は、平面図が無い
ため写真から判断すると、隣接する「類型 a」より小さかった。

表 6-2 平地式切妻建築物の特徴

建築物	所有者	入口	壁	窓	平面規模
▲a	04	平入	茅壁	無し	□04Hより小
▲b	08	妻入	茅壁	無し	□08Hより小
▲c	15	不明	茅壁	無し	□15Hより小
▲d	16	不明	茅壁	無し	□16Hより小
▲e	16	不明	茅壁	無し	□16Hより小
▲f	18	不明	茅壁	無し	□18Hより小
▲g	20	不明	茅壁	無し	□20Hより小

6-6 付属建築物の特徴

「高床倉庫」4 件、「熊檻」6 件の「付属建築物」については、構造、平面形、外観意匠、平面規模の特徴を明らかにした。

(1) 高床倉庫 (表 6-3、図 6-11)

「高床倉庫」4 件は、柱を建て込み高床を設け、その上に檻本体を乗せた、高床と倉庫が分離している建築物 (高床式・分離型) であった。平面形は、短辺が 1 間で長辺が 1 間の 4 本柱からなるものが 2 件、短辺が 1 間で長辺が 2 間の 6 本柱からなるものが 2 件であった。屋根形状は、寄棟屋根が 1 件、切妻屋根が 3 件である。壁及び屋根の仕上げは全て茅葺、入口は全て妻側であった。延べ床面積の分かるものは 3 件あり、2.25 m²~4.37 m²であった。

表 6-3 高倉倉庫の特徴

建築物	構造	柱数	柱間数		屋根形状	壁	入口	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)
			短辺	長辺						
●01P	高床式・分離型	4	1	1	切妻	茅壁	妻入	2.3	1.9	4.37
●02P	高床式・分離型	4	1	1	切妻	茅壁	妻入	1.5	1.5	2.25
●09P	高床式・分離型	6	1	2	切妻	茅壁	妻入			
●10P	高床式・分離型	6	1	2	寄棟	茅壁	妻入	2.1	1.5	3.15



(左) 切妻屋根で4本柱



(右) 寄棟屋根で6本柱

図 6-11 高床倉庫（高床式・分離型）の屋根形状と柱数

資料（左）：「毛民青屋集」7～8 調査票 108s の写真部分

資料（右）：「毛民青屋集」7～8 調査票 77s の写真部分拡大

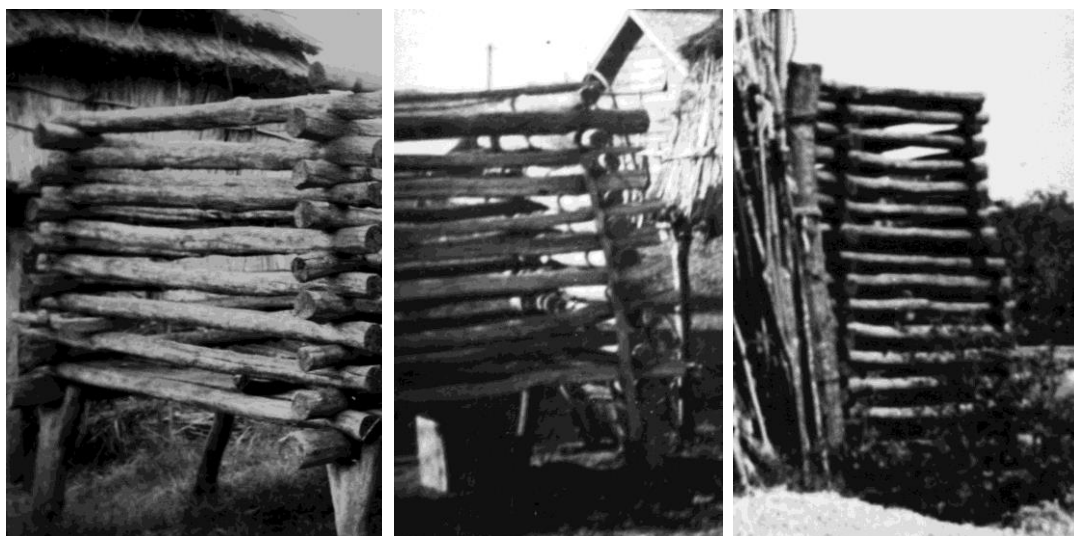
所蔵：北海道大学附属図書館北方資料室

②熊檻（表 6-4、図 6-12）

「熊檻」6 件は、柱を建て込み高床を設け、その上に檻本体を乗せた高床と檻が分離している構造（高床式・分離型）が 4 件、柱を建て込み高床を設け周囲に丸太を井桁状に組む構造（高床式・一体型）が 1 件、柱を建て込み、地上から周囲に丸太を井桁状に組む構造（平地式・一体型）が 1 件であった。柱数と柱間数は、全て柱数 4 本で柱間数が「短辺が 1 で長辺が 1」であった。檻は全て丸太材であった。檻上蓋の分かるものは 2 件あり、全て丸太を平行に並べる型であった。延べ床面積の分かるものは 4 件あり、 $1.40 \text{ m}^2 \sim 1.96 \text{ m}^2$ であった。

表 6-4 熊檻の特徴

建築物	構造	柱数	柱間数		檻上蓋	壁	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)
			短辺	長辺					
●01B-1	高床式・分離型	4	1	1	不明	丸太材	1.4	1.0	1.40
●01B-2	高床式・分離型	4	1	1	不明	丸太材	1.4	1.0	1.40
●02B	高床式・分離型	4	1	1	丸太平行	丸太材	1.4	1.4	1.96
●10B	高床式・分離型	4	1	1	不明	丸太材			
●09B	高床式・一体型	4	1	1	不明	丸太材	1.2	1.2	1.44
●01B-3	平地式・一体型	4	1	1	丸太平行	丸太材			



(左) 高床式・分離型

(中) 高床式・一体型

(右) 平地式・一体型

図 6-12 熊檻の構造

資料 (左): 「毛民青屋集」 7～8 調査票 10s の写真部分拡大

資料 (中): 「毛民青屋集」 7～8 調査票 97s の写真部分拡大

資料 (右): 「毛民青屋集」 7～8 調査票 106s の写真部分拡大

所蔵: 北海道大学附属図書館北方資料室

6-7 イナウ^{注3)}

「イナウ」を確認できる居住者は「01」「02」「10」の3名であり、「イナウ」は住居の東側に位置し、住居の東窓（神窓）から「イナウ」をのぞくことができた。「イナウ」の配置位置について、□01Hの住居と「イナウ」までの距離は8.0mと鷹部屋氏が平面図に記録していた。

6-8 所有者別に見た建築物の所有状況と比較

(1) 建築物の所有状況 (表 6-5)

新白老町史^{注4)}には、白老村アイヌ集落のコタンコルクル (村長) の家系 (本研究での居住者記号「01」、「10」) の記載があり、また、1911 年の東宮殿下の白老村の来訪時に東宮殿下を案内したアイヌ民族 (「01」、「02」、「09」、「10」) の 4 名が記載されており、この 4 名は「村長及び村長に準ずる人^{注5)}」と考えられる。白老村アイヌ集落の人々を「村長及び村長に準ずる人 (4 名)」と「その他の人 (16 名)」に分類すると、建築物の所有状況は以下のようになる。

なお、図 6-2 の土地区画と建築物の所有状況と鷹部屋氏が記録した平面図から、居住者 20 名の計 43 件の建築物は配置作製が可能であり (平面図の無い建築物は写真から建築物の位置関係や平面規模を検討する必要がある)、本章では図 6-13～図 6-16 の 4 例を記している^{注6)}。

表 6-5 建築物の所有状況

居住者分類		住居分類			住居以外の 建物の有無		付属建築物の有無		
居住者	分類	住居	平面形	延べ床 面積(m ²)	納屋	切妻	高床 倉庫	熊檻	イナウ
01	村長及び 村長に 準ずる人	□01H	平面形Ⅰa	96.36	□01S	無し	●01P	●01B-1 ●01B-2 ●01B-3	●01I
02		□02H	平面形Ⅳ	82.94	無し	無し	●02P	●02B	●02I
10		□10H	平面形Ⅳ	78.00	無し	無し	●10P	●10B	●10I
09		□09H	平面形Ⅳ	72.81	無し	無し	●09P	●09B	無し
03	その他の人 (9名)	□03H-1	平面形Ⅰa	48.00	無し	無し	無し	無し	無し
		□03H-2	平面形Ⅰa	42.70	無し	無し	無し	無し	無し
06		□06H	平面形Ⅰa	43.66	無し	無し	無し	無し	無し
11		□11H	平面形Ⅰa	37.70	無し	無し	無し	無し	無し
12		□12H	平面形Ⅰa	32.40	無し	無し	無し	無し	無し
13		□13H	平面形Ⅰa	31.20	無し	無し	無し	無し	無し
19		□19H	平面形Ⅰa	29.40	無し	無し	無し	無し	無し
17		□17H	平面形Ⅰa	12.60	無し	無し	無し	無し	無し
14		□14H	平面形Ⅰb	36.74	無し	無し	無し	無し	無し
07	その他の人 (7名)	□07H	平面形Ⅱ	24.24	無し	無し	無し	無し	無し
20		□20H	平面形Ⅰa	33.60	無し	▲g	無し	無し	無し
18		□18H	平面形Ⅰa	19.61	無し	▲f	無し	無し	無し
08		□08H	平面形Ⅰb	59.03	無し	▲b	無し	無し	無し
04		□04H	平面形Ⅰb	51.84	無し	▲a	無し	無し	無し
15		□15H	平面形Ⅰb	43.74	無し	▲c	無し	無し	無し
16		□16H	平面形Ⅰb	52.44	無し	▲d,▲e	無し	無し	無し
05		□05H	平面形Ⅰb	48.90	□05S	無し	無し	無し	無し

①「村長及び村長に準ずる人」が所有する建築物

「村長及び村長に準ずる人」の住居（□01H、□02H、□09H、□10H）は、□01Hは平面形Ⅰaで、□02H、□09H、□10Hの3件は平面形Ⅳであり、延べ床面積は72.81㎡～96.36㎡である。

居住者「01」の住居以外の建築物は納屋を1件、高床倉庫1件、熊檻3件、イナウを所有している（図6-13）。居住者「02」及び「10」の2名は、高床倉庫1件、熊檻1件、イナウを所有している。居住者「09」は高床倉庫1件、熊檻1件を所有している（図6-14）。

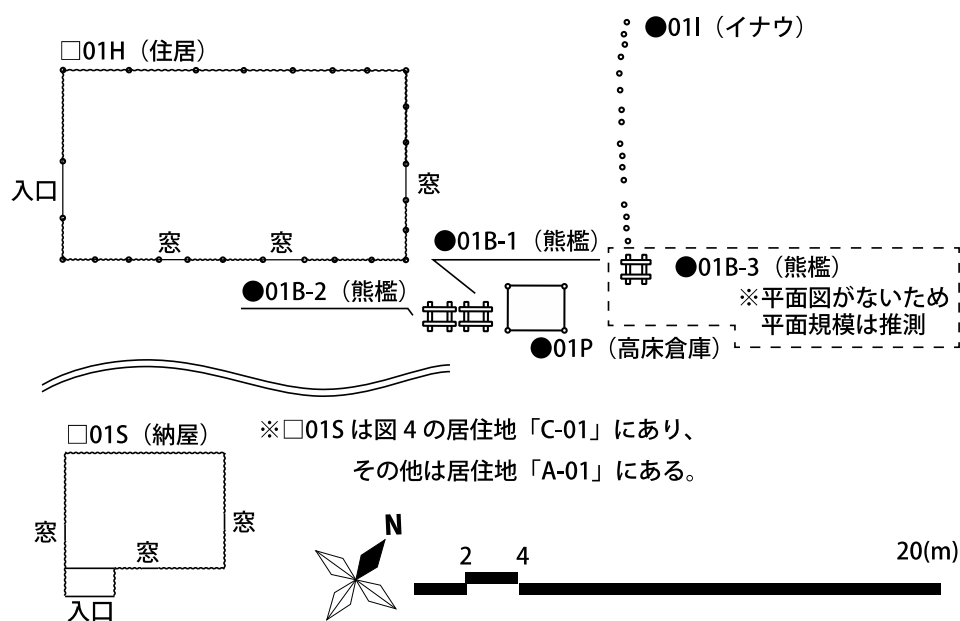


図6-13 「村長及び村長に準ずる人」の建築物の配置図（居住者「01」）

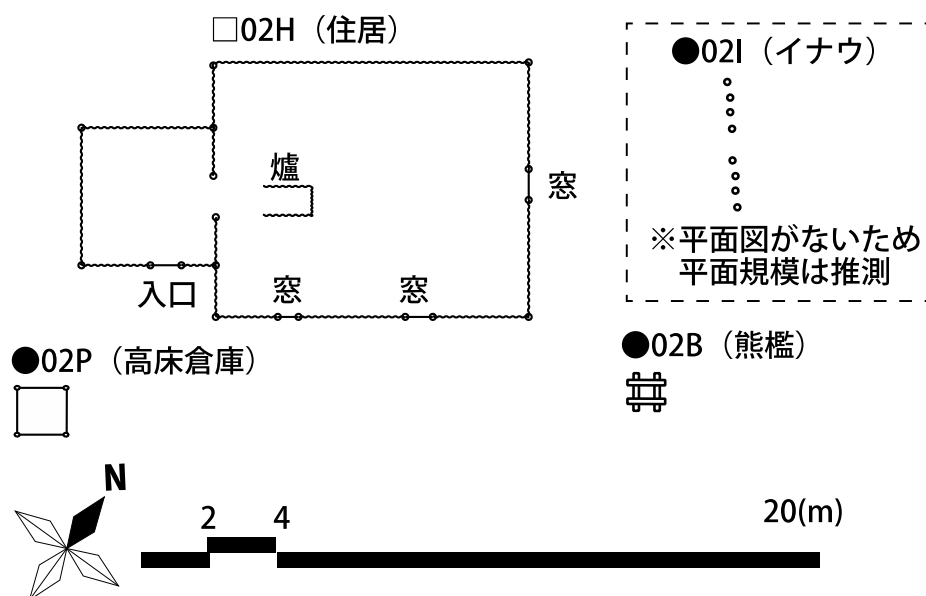


図 6-14 「村長及び村長に準ずる人」の建築物の配置図（居住者「02」）

②「その他の人」が所有する建築物

「その他の人」の住居は、平面形Ⅰaや平面形Ⅰaに小庇を伴った平面形Ⅰb及び平面形Ⅱであり、延べ床面積は12.60 m²～59.03 m²と「村長及び村長に準ずる人」の住居より小さい。建築物の所有状況を大きく分類すると、「住居のみを所有する人々（図 6-15）」9名と「住居及び住居以外の建築物^{注7）}（「平地式寄棟建築物」1名と「平地式切妻建築物」6名）を所有する人々（図 6-16）7名の2つに分けられる。

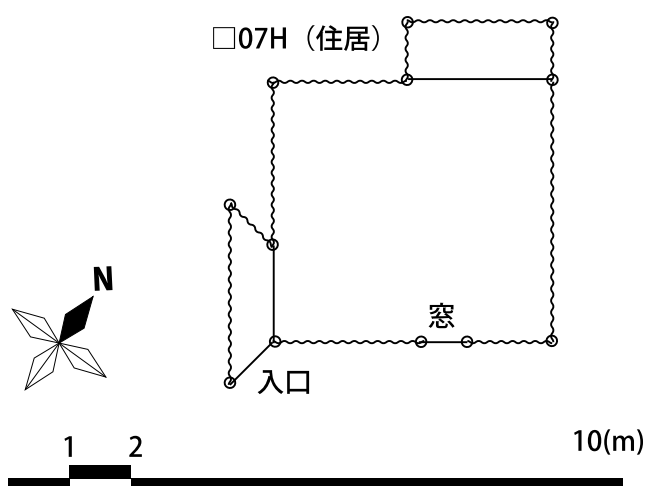


図 6-15 「その他の人」の建築物の配置図（居住者「07」）

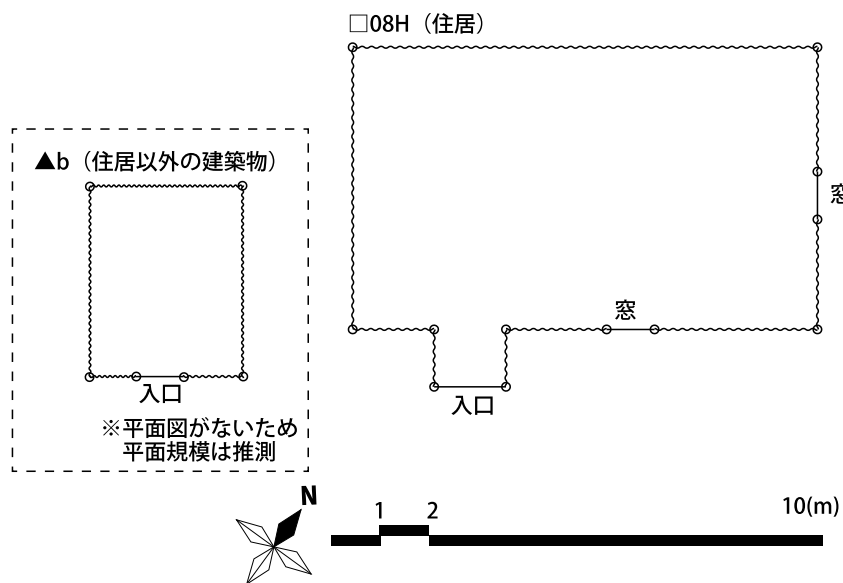


図 6-16 「その他の人」の建築物の配置図（居住者「08」）

6-9 所有する建築物の比較（表 6-6）

「村長及び村長に準ずる人」と「その他の人」が所有する住居を比較すると、住居の延べ床面積、主屋の規模、セムの規模に違いが見られた。「村長及び村長に準ずる人」の所有する住居の延べ床面積は $72.81 \text{ m}^2 \sim 96.36 \text{ m}^2$ 、主屋の規模は $60.72 \text{ m}^2 \sim 96.36 \text{ m}^2$ 、セムが接続する住居におけるセムの形状は寄棟屋根の玄関（室）で（平面形Ⅳのセム）、セムの規模は $12.09 \text{ m}^2 \sim 17.20 \text{ m}^2$ である。一方で「その他の人」の所有する住居の延べ床面積は $12.60 \text{ m}^2 \sim 59.03 \text{ m}^2$ 、主屋の規模は $12.60 \text{ m}^2 \sim 57.23 \text{ m}^2$ 、セムが接続する住居におけるセムの形状は片流れ及び切妻屋根で（平面形Ⅰb及び平面形Ⅱのセム）、セムの規模は $0.80 \text{ m}^2 \sim 8.36 \text{ m}^2$ であり、延べ床面積、主屋の規模、セムの規模（セムの形状も含む）の全てが「村長及び村長に準ずる人」の所有する住居より小さい。

「村長及び村長に準ずる人」及び「その他の人」の所有する住居に共通して見られた特徴は、住居配置は主屋長軸が各土地画面上の東西軸にあたり、入口が平入では南で妻入では西にあった事、採光用に南窓を1～2つ設け、神窓として東窓を1つ設ける窓位置が「村長及び村長に準ずる人」の住居の全て、「その他の人」の住居17件中12件（件数比70.6%）に見られた事である（なお、主屋の規模が 50 m^2 以上の住居は、「村長及び村長に準ずる人」の住居4件と「その他の人」の住居2件の計6件あり、内5件が南窓を2つ設けている事から、主屋の規模の大きな住居の南面に窓を2つ設置する特徴も見られる）。また、1937年

に北海道旧土人保護法の一部を改正し、アイヌ民族に対して住宅改良のための資金を支給する制度が定められたことによる影響と考えられる、「マサ壁」や「ガラス窓」を備えた住居は、「村長及び村長に準ずる人」の住居 4 件の内 2 件（件数比 50%）、「その他の人」の住居 17 件の内 8 件（件数比 47.1%）に見られた。

住居以外の建築物の所有状況を見ると、「村長及び村長に準ずる人」は「高床倉庫」や「熊檻」や「イナウ」等の「付属建築物」を全員が所有するのに対し、「その他の人」は「付属建築物」を所有せず、「平地式切妻建築物」の所有（16 名の内 6 名）と「平地式寄棟建築物」の所有（16 名の内 1 名）であった。

表 6-6 所有する建築物の比較

		村長及び村長に準ずる人（4名）	その他の人（16名）
住居	延べ床面積	72.81㎡～96.36㎡	12.60㎡～59.03㎡
	主屋の規模	60.72㎡～96.36㎡	12.60㎡～57.23㎡
	セムの形状※	寄棟屋根の玄関 （平面形Ⅳのセム）	片流れ及び切妻屋根の小庇程度 （平面形Ⅰb及びⅡのセム）
	セムの規模※	12.09㎡～17.20㎡	0.80㎡～8.36㎡
	配置	主屋長軸が土地区画上の東西軸	主屋長軸が土地区画上の東西軸
	窓位置（件数比）	4件中4件が 南に2つ、東に1つ（100%）	17件中11件が 南に1つ、東に1つ（64.7%） 17件中12件が 南に1～2つ、東に1つ（70.6%）
	「マサ壁」や 「ガラス窓」を 備えた住居	4件中2件（50.0 %）	17件中8件（47.1%）
住居以外	「付属建築物」 その他の建築物の 所有状況	4名全員が 「付属建築物」を所有 4名中1名が 平地式寄棟建築物を所有	16名中6名が 平地式切妻建築物を所有 16名中1名が 平地式寄棟建築物を所有 （残り9名は住居のみ）

6-10 小結

本研究は、「毛民青屋集」7～8を基にして、下附実測図（1912年）、コタン図（1926年から1937年）、航空写真（1944年）を検討する事により、1940年の白老村アイヌ集落の土地区画の特徴、白老村アイヌ集落の居住者20名の「平地式寄棟建築物（類型a）」23件、「平地式切妻建築物（類型b）」7件、「付属建築物」13件の計43件の建築物の外観の特徴、平面規模の特徴、建築物の所有状況を明らかにした。

白老村アイヌ集落の土地区画は、2本の南北道路（南北軸から反時計回りに凡そ30度の傾きがある）と南北道路に垂直な4本の東西道路が交わった土地に対し、1区画450坪（15間×30間）を基本に区画整備され、1940年時におけるアイヌ民族に割り渡されていた給与地は、1世帯に1区画（坪数は凡そ450坪）を基本としていたと考えられた。

一方で建築物においては、「村長及び村長に準ずる人」と「その他の人」に居住者を分類すると違いが見られた。「村長及び村長に準ずる人」が所有した住居は、延べ床面積、主屋の規模、セムの規模において「その他の人」が所有した住居より大きく、また、住居の他に「高床倉庫」や「熊檻」や「イナウ」の「付属建築物」を所有していたのに対し、「その他の人」が所有した建築物は住居のみの所有もしくは住居と「平地式切妻建築物（類型b）」か「平地式寄棟建築物（類型b）」の所有であった。なお「高床倉庫」は、柱を建て込み高床を設け、その上に檻本体を乗せた、高床と倉庫が分離する構造（高床式・分離型）であり、屋根形状は寄棟屋根と切妻屋根が見られた。「熊檻」は、柱を建て込み高床を設け、その上に檻本体を乗せた高床と檻が分離している構造（高床式・分離型）、柱を建て込み高床を設け周囲に丸太を井桁状に組む構造（高床式・一体型）、柱を建て込み、地上から周囲に丸太を井桁状に組む構造（平地式・一体型）の3構造が見られた。「イナウ」は住居の東側に位置し、住居の東窓（神窓）からのぞく事ができた。「平地式切妻建築物」は住居の西側に位置し、セムの伴わない矩形平面（平面形Ⅰa）で、壁は茅壁で、窓は設けていなかった。

「村長及び村長に準ずる人」と「その他の人」が所有した住居に共通して見られた特徴は、住居配置は主屋長軸が各土地区画の東西軸にあたり、入口は平入では南で妻入では西に位置していた事である。また、採光用に南窓を1～2つ設け、神窓として東窓を1つ設ける窓位置は共に7割以上に見られ、「マサ壁」や「ガラス窓」を備えた住居は共に5割程に見られた事である。アイヌ民族の建築物の所有状況については、今日まで十分な研究が行われていないが、その中でも村長クラスのアイヌ民族のみが平面形Ⅳの建築物に住んでいたことは、重要な新知見である。

注

- 注1) 北海道庁立白老病院の院長、高橋房次氏は、1937年の旧土人保護法改正によって白老病院が閉鎖された後も、同じ場所で「高橋医院」を開業し、1960年に医師の仕事を全うし78歳でこの世を去った。以下の資料を参考とした。白老町町史編さん委員会：新白老町史上巻及び下巻，第一法規出版株式会社，1992年11月3日。
- 注2) 平面図から入口及び窓位置の他、入口幅と窓幅が分かる。入口幅は0.6～1.6m、入口幅は0.6～2.2mまでである。
- 注3) イナウはアイヌ民族の祭具であり、ヌササン（祭壇）にまつるものである。
- 注4) 新白老町史下巻を参考とした。白老町町史編さん委員会：新白老町史下巻，第一法規出版株式会社，1992年11月3日。
- 注5) 注4)の資料である新白老町史から、村長の家系と東宮殿下の白老村来訪時の案内役を務めたアイヌ民族の人々の4名の総称を「村長及び村長に準ずる人」と定義した。なお、「村長に準ずる人」について、村長の家系の居住者「01」及び「10」が所有した建築物と村長の家系の他に案内役を務めた居住者「02」及び「09」の所有した建築物の特徴は共通し、「その他の人（16名）」が所有した建築物と異なるので、「村長」以外の案内役を務めた人は「村長に準ずる人」であったと考えられることから定義している（4名の人名は新白老町史に記載があるが、表1の調査票の記載内容の居住者番号を用いている）。
- 注6) 配置図の建築物は、「毛民青屋集」7～8の調査票に添付されている平面図を基に作製し、寸法表記は省略し、代わりにスケールを表記している。なお、図11の●01B-3（熊檻）、図12の●02I（イナウ）、図13の▲b（平地式切妻建築物）については、調査票に平面図が添付されていないため、写真から建築物の位置関係と平面規模を推測して表記してある。
- 注7) 住居以外の建築物のうち「平地式寄棟建築物」の用途は、鷹部屋氏の記載から納屋であった事が分かる。

第7章 「毛民青屋集」を基にした1940年に見られた集落の比較と歴史的変遷過程の考察

7-1 はじめに

第5章では二風谷村アイヌ集落の実態について、第6章では白老村アイヌ集落の実態を明らかにし、研究が十分に行われていない「1860年代から1950年代」のアイヌ民族の建築史を補うことを目的に行ってきた。本章では、アイヌ民族が古くから生活をしていた場所として知られているこの二風谷村と白老村について、集落の成り立ちや生活状況等の異なる歴史的変遷の中で、1940年の調査時に集落の建築物にどのような違いが見られたのかを比較し、通史としてアイヌ民族の建築を捉える際に、この2集落に見られた建築物の実態の重要性を提示し、類型化を用いた1940年までの建築物の歴史的変遷過程を考察することを目的とした。

7-2 集落の成り立ちと土地区画

(1) 集落の成り立ち

鷹部屋氏が調査した1940年の2つの集落の成り立ちとして、北海道旧土人保護法の第一条「北海道旧土人ニシテ農業ニ従事スル者、又ハ従事セント欲スル者ニハ、一戸ニ付土地一万五千坪以内ヲ限り無償下附スルコトヲ得」に代表される、アイヌ民族に制限付の土地所有権を与える法律が制定され、様々な給与地が指定された。二風谷村アイヌ集落は、以前から住んでいた場所に給与地が指定され、移住することは無かった。一方で、白老村アイヌ集落は、1889年に胆振国白老郡白老村字古潭（現在の白老町大町1丁目）に給与地が指定され、ウヨロ、ブーベツ方面に散在していたアイヌ民族が移住させられたことから始まった^{注1)}。以上のことから、二風谷村アイヌ集落は、以前から住んでいた場所が給与地となり住居はそのまま利用し、白老村アイヌ集落は、1889年以降、新しく住居を建て生活を始めたことが分かった。

(2) 土地区画

二風谷村アイヌ集落の給与地区画は、集落の成り立ちからも分かるように以前から住んでいた場所に給与地が指定されたことから、給与地の大きさは一定ではなかった（資料編P270、日高国沙流郡二風谷村旧土人給与地図を参照）。一方で、新たな場所に給与地が指定された白老村アイヌ集落の給与地区画は、第3章の「資料の検証」において記した通りグリット状の計画された土地区画であり、450坪を一単位としてアイヌ民族に割り渡されていた。

7-3 生活状況

二風谷村のアイヌ民族は、給与地が農業に従事することを条件に割り渡されているように、農家として生計を立てていた^{注2)}。第3章の位置図を見ると、集落は沙流川沿いにあり、現在の国道237号の東側に密集して建築物が建造され、アイヌ民族と和人が共にアイヌ集落内で生活をしていたことが分かる。

一方で、白老村アイヌ集落は、1911年の東宮殿下（後の大正天皇）の白老村の来訪を契機に、白老村はアイヌ民族の居住地区として知られるようになり、多くの皇族や研究者が来訪し^{注3)}、しらおいポロトコタンとして知られるようになり、また、室蘭本線がすぐそばにあることから、白老村のアイヌ民族は、観光業で生計を立てるものも多かったことが窺えた。鷹部屋氏は、論文（アイヌ住居の研究 - アイヌ家屋の地方的特性 - ，北方文化研究報告，第三輯，1940年5月）の中で同様の記載をしており、「観光業のおかげで、アイヌ民族らしい生活を維持した」と白老村を訪れた時の感想を記載している。

7-4 類型別にみた建築物の比較による考察

二風谷村アイヌ集落と白老村アイヌ集落で見られた建築物について、「主屋の屋根部」の分類と「壁材」で「茅葺の寄棟屋根の建築物」を細分化した類型の件数比は、表7-1のようになった。また、茅葺寄棟屋根の建築物を平面形別に見た件数比は、表7-2のようになった。集落の成り立ちから考えると、二風谷村アイヌ集落のほうが白老村アイヌ集落より古い型式、伝統的なアイヌ民族が残されているように思われるが、実際には逆であり、白老村アイヌ集落の建築物は「マサ壁」の建築物は全体の2割りほどであり、今日の復元建築等に見られるアイヌ民族の建築物を代表する「平面形Ⅳの建築物」も存在していた。あくまで、鷹部屋氏が調査したアイヌ民族の建築物に限った事実であるが、白老村アイヌ集落は、二風谷村アイヌ集落よりも伝統的と考えられる建築物が存在していたことは明らかである。

改良住宅について、二風谷村では、第5章において、集落全体で見ても、それほど普及していないことが明らかとなったが、白老村においては、鷹部屋氏の調査範囲が広域にわたるが全てを網羅した調査ではないので、厳密に断定することは出来ないが、二風谷村と白老村の比較関係から見ると、より伝統性の残されていた白老村では、改良住宅は、それほど普及していなかったことが予想される。

表 7-1 鷹部屋氏の調査した建築物の件数比

	茅壁茅葺の寄棟屋根	マサ壁茅葺の寄棟屋根	茅葺の切妻屋根	改良住宅	付属建築物の有無
二風谷村	11件(23%)	29件(63%)	3件(6%)	3件(6%)	無
白老村	17件(57%)	6件(20%)	7件(23%)	0件(0%)	有

表 7-2 茅葺寄棟屋根の建築物の平面形別の件数比

	平面形Ⅰa	平面形Ⅰb	平面形Ⅱ	平面形Ⅲ	平面形Ⅳ	平面形Ⅴ
二風谷村	31件(78%)	0件(0%)	0件(0%)	4件(10%)	0件(0%)	5件(12%)
白老村	12件(50%)	7件(29%)	1件(4%)	0件(0%)	4件(17%)	0件(0%)

注 平面形Ⅰa：「セム」を伴わない平面形

平面形Ⅰb：「2面壁-簡易屋根構造」の「小庇」

平面形Ⅰc：「2面壁-半円筒型構造」の「小庇」

平面形Ⅱ：「2面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

平面形Ⅲ：「3面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

平面形Ⅳ：「3面壁-小屋根型構造」の「下屋」

平面形Ⅴ：「4面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

7-5 二風谷村アイヌ集落と白老村アイヌ集落の位置付け

アイヌ民族が旧土人保護法に代表される和人社会への同化政策の影響を受ける中で、二風谷村は変化の過程にあった集落、白老村は観光業を通じてアイヌ民族としての生活を保った事例と位置付けることができる。この2集落は、通史の中で、旧土人保護法成立後（本研究が対象とする「1860年代から1950年代」の後半）のアイヌ民族のおかれた状況の代表として、重要な事例である。

7-6 類型を用いた建築物の歴史的変遷過程の考察

1940年の二風谷村及び白老村アイヌ集落の実態を最終地点に、建築物の歴史的変遷過程について類型を基に考察した。建築物の類型は、「主屋屋根部」による分類と「セムの平面形」による分類を合わせて行った。1940年の二風谷村と白老村の建築物状況は表7-3であり、表7-3を図で表現したのが図7-1である。上に行くほど二風谷村に見られた特徴であり、下にいくほど白老村の特徴となっている。

ここで、18世紀中期から19世紀後半に描かれた絵画資料の東蝦夷地を描く資料と13世

紀前後から 18 世紀中期までの発掘資料の柱穴から見た平面形を同じように類型化した。
 なお、絵画資料および発掘調査資料は、小林孝二氏の論文（アイヌ文化期の平地住居跡に
 関する基礎的研究 - 発掘資料から見たアイヌ民族住居の寸法体系に関する考察 -，日本建
 築学会計画系論文集，第 615 号、2007 年 5 月．近代以前の絵画資料に描かれたアイヌ民族
 の建築に関する研究，日本建築学会計画系論文集，第 608 号，2006 年 10 月）より引用し
 た。

表 7-3 「主屋屋根部」と「セムの平面形」の分類から見た
 二風谷村及び白老村アイヌ集落見られた建築物数

	平面形Ⅰa	平面形Ⅰb	平面形Ⅰc	平面形Ⅱ	平面形Ⅲ	平面形Ⅳ	平面形Ⅴ
寄棟屋根	31件(二)	0件	0件	0件	4件(二)	0件	5件(二)
	12件(白)	7件(白)	0件	1件(白)	0件	4件(白)	0件
切妻屋根	3件(二)	0件	0件	0件	0件	0件	0件
	7件(白)	0件	0件	0件	0件	0件	0件
変形屋根	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件
	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件
改良住宅	3件(二)	0件	0件	0件	0件	0件	0件
	0件	0件	0件	0件	0件	0件	0件

注（二）は二風谷アイヌ集落、（白）は白老村アイヌ集落を指す。

平面形Ⅰa：「セム」を伴わない平面形

平面形Ⅰb：「2 面壁-簡易屋根構造」の「小庇」

平面形Ⅰc：「2 面壁-半円筒型構造」の「小庇」

平面形Ⅱ：「2 面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

平面形Ⅲ：「3 面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

平面形Ⅳ：「3 面壁-小屋根型構造」の「下屋」

平面形Ⅴ：「4 面壁-簡易屋根構造」の「下屋」

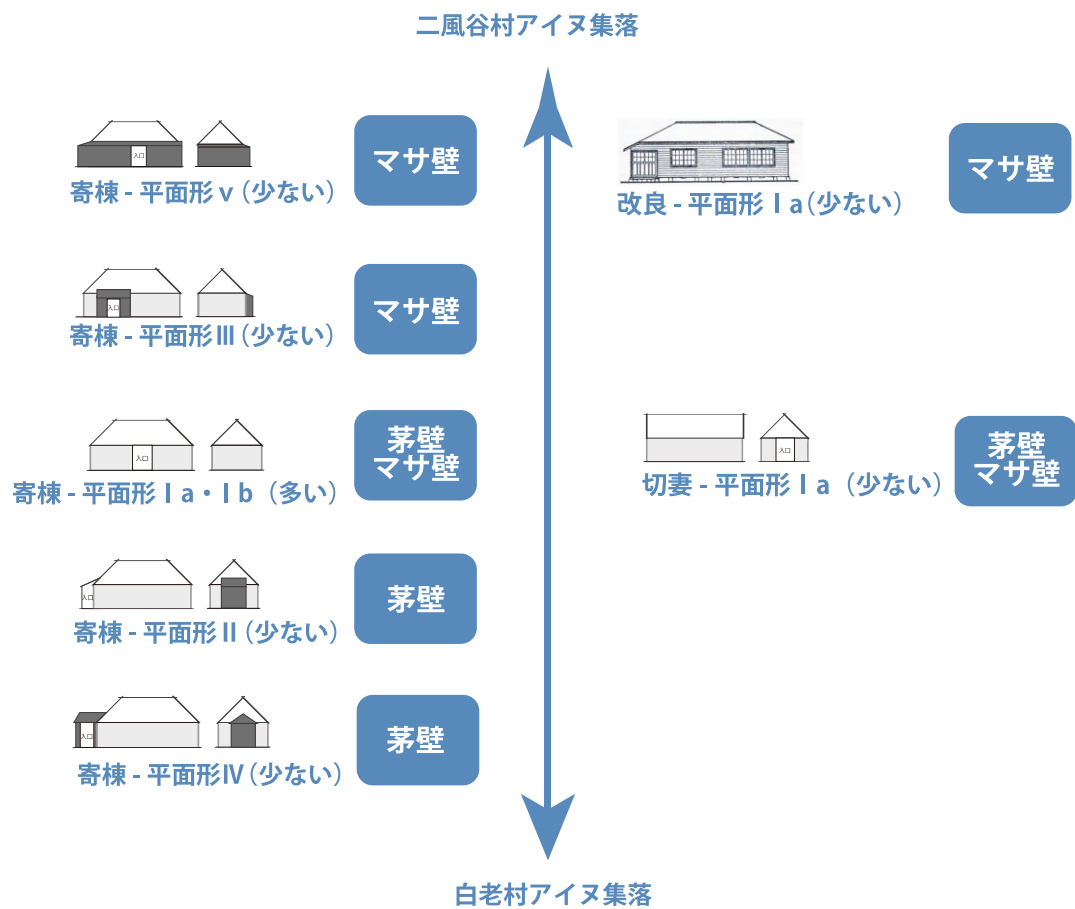


図 7-1 1940 年における二風谷村及び白老村アイヌ集落見られた建築物

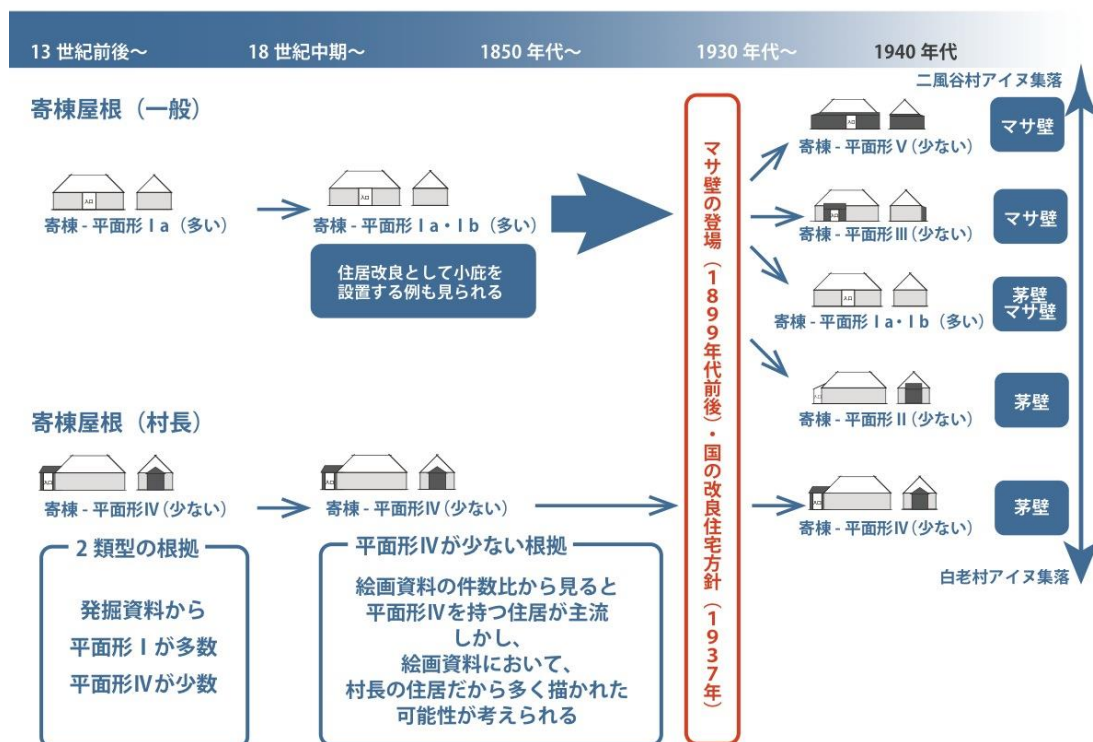


図 7-2 13 世紀前後から 1940 年までの寄棟建築物の変遷過程（仮説）

(1) 寄棟建築物の変遷過程（図 7-2）

1940 年において、二風谷村アイヌ集落と白老村アイヌ集落に 5 種類の平面形（平面形 I a 及び平面形 I b をまとめて表記）の寄棟建築物が見られたことは事実である。この事実の中で、本研究は、「平面形 IV」の建築物は、元来「村長及び村長に準ずる人」の住居であった可能性があるとした。「平面形 IV」を「村長及び村長に準ずる人」の住居と仮定して変遷過程を見たのが図 7-2 である。13 世紀から 18 世紀中期の柱穴跡 88 件の平面形を寄棟屋根だったと仮定して見ると、「平面形 I」が 51 件、「平面形 IV」が 27 件、「その他」が 10 件と「平面形 I」が多数であった。これは、「平面形 IV」が「村長及び村長に準ずる人」の住居と仮定するのであれば、「平面形 I」より少ないことに納得をいく結果となった。次に、18 世紀中期から 19 世紀後半に描かれた絵画の内、東蝦夷を描いた物を見ると、「平面形 IV」を描く物が大半を占めていた。小林氏は、論文（近代以前の絵画資料に描かれたアイヌ民族の建築に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第 608 号、2006 年 10 月）において、「発掘資料の柱穴跡から、付属屋を伴わない単室形住居が先行、その後、附加・分化を目的として付属屋を伴う平面形が現れ、単室形住居と付属屋を伴った住居が併存した時代が

続き、絵画資料に見られるように付属屋を伴った住居が主体となった」と指摘している。

しかし、13 世紀前後と 1940 年の白老村アイヌ集落の流れがあるとするならば、「18 世紀中期から 19 世紀後半」においても、「平面形Ⅳ」を持つ寄棟建築物が少ないと考えたい。

そうすると、「村長の家だからたくさん描かれている可能性が出てくる。その意味でも、発掘調査や「毛民青屋集」のような件数を扱える資料は、非常に有効である。

最後に「18 世紀中期から 19 世紀前半」までと「1940 年」の変遷の中で、寄棟建築物において、マサ壁を利用するようになったことが、さまざまな平面形（様々なセム）を作り出した反面、伝統的と考えられる建築物が減少したことにもつながったと考えられる。その中で、「平面形Ⅳ」の建築物は、「壁材」は「茅壁」以外で確認することが出来ず、由緒ある建築物として、アイヌ民族にとって伝統的な工法から作られた建築物であることが窺えた。

寄棟建築物以外についてまとめたのが、図 7-3 である。

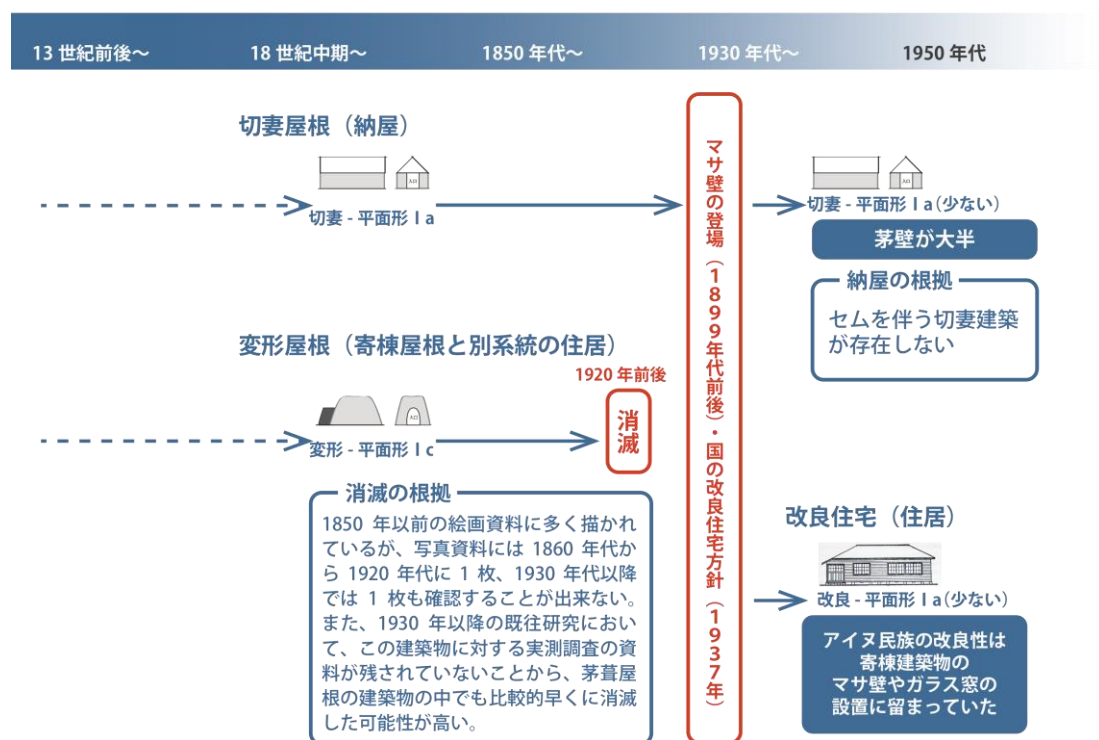


図 7-3 13 世紀前後から 1940 年までのその他建築物の変遷過程（仮説）

(2) その他変遷過程の考察 (図 7-3)

茅葺切妻屋根の建築物について、絵画資料及び写真資料においてその存在を確認することが出来るが、そのどれもが「平面形 I a」のセムを伴わない平面形である。このことから、茅葺切妻屋根の建築物は、元来、納屋などの住居以外の用途で用いられていた可能性が高いことが窺えた。1940 年の二風谷村及び白老村アイヌ集落においても、その用途は、納屋や厩舎としての利用であった。次に、茅葺変形屋根の建築物について、絵画資料から、和人地から離れた遠隔地に多く見られたことが分かっており、絵画資料には多く描かれているが、写真資料からは、1920 年代にとられた物が 1 枚あるのみであり、また、既往研究において、茅葺変形屋根の実測調査をした記録が残っていないことを考えると、他の屋根形状の建築物よりも早くに消滅した可能性が高いことが窺えた。最後に改良住宅については、1937 年の旧土人保護法の改正に伴って国の改良住宅方針が制定されたが、実際にそのような住居に住むアイヌ民族は 1940 年においては少なかったことが窺えた。

7-7 小結

本章では、二風谷村アイヌ集落と、白老村アイヌ集落に見られた建築物の実態を比較することにより、集落の成り立ちや生活状況の違いにより、アイヌ民族の建築物の存在状況が変わっていたことが分かった。通史としてアイヌ民族の建築物を見る際に、この 2 つの集落の建築物の実態は、当時のアイヌ民族がおかれていた立場が見え、その中で、二風谷村は和人と同等の生活、白老村はアイヌ民族としての生活が営まれていたことが分かり、意義のある比較対象であった。また、本章では、絵画資料や発掘調査記録の柱穴跡の資料を用い、断片的ではあるがアイヌ民族の建築物の変遷過程について類型を用いて、考察を行った。あくまで、仮定の話であるが、主屋の屋根部と平面形による類型化は、全ての年代に対応できる可能性のある指標となり得た。

注

注1) 新白老町史下巻より。白老町町史編さん委員会：新白老町史下巻，第一法規出版株式会社，1992 年 11 月 3 日。

注2) 以下の資料より。渡辺茂，河本本道編：平取町史，平取町，1974 年 3 月。

注3) 主な皇族の来訪者は以下の通りである。1918 年の閑院宮載仁親王殿下、1928 年の徳川喜久子姫、1932 年の澄宮殿下、1934 年の北白川永久王殿下、1936 年の朝香宮鳩彦王殿下等。主な研究者は、棚橋諒、鷹

部屋福平、杉野謙三等であり、1940 年前後に白老村を訪れている。

第8章 結論

8-1 はじめに

本研究は、これまでに研究に用いられてこなかった写真資料を研究資料とし、外観意匠に基づいた平地式建築物の類型化手法を確立し、点として存在する各年代のアイヌ民族の建築物の特徴を繋ぎ、その変遷過程について考察した。また、特出した写真資料である「毛民青屋集」を基に、これまで十分に研究が行われていない「1860年代から1950年代」を対象とした、1940年の二風谷村及び白老村アイヌ集落に見られた、建築物の実態を明らかにした。

本章では、本研究で開発した「平地式建築物の類型化手法」について、本研究で明らかとなった「1940年の二風谷村及び白老村アイヌ集落の建築物の実態」及び「歴史的変遷過程から見た建築物の特徴」についてまとめた。また、本研究で明らかとなったことから、「平地式建築物の類型化手法の整合性」を検証し、研究を通じて分かった「写真資料の位置付け」に関する見解を述べ、最後に「今後の展望」について明示した。

8-2 平地式建築物の類型化手法

1. 外観意匠を基にした平地式建築物の類型化手法

外観意匠から分かる9項目の指標を設定し、指標の組合せから類型化を行った。

(1) 主屋の屋根部

指標①「主屋の屋根材」、指標②「主屋の屋根形状」、指標③「軒出の有無」から、アイヌ民族の建築物は、「茅葺寄棟屋根建築物」、「茅葺切妻屋根建築物」、「茅葺変形屋根建築物」、「改良住宅」の4つに分類される。

手順は、以下の通りである。

【手順1】

指標①「主屋の屋根材」が「桁屋」である建築物を、「改良住宅」とする。

【手順2】

指標①「主屋の屋根材」が「茅葺（草葺）」の建築物は、指標②「主屋の屋根形状」から、「寄棟」である建築物を「茅葺（草葺）寄棟屋根建築物」、「切妻」である建築物を「茅葺（草葺）切妻屋根建築物」、「変形（稜線の不明瞭な屋根を持つ）」である建築物を「茅葺（草葺）変形屋根建築物」とする。

【注】

「茅葺（草葺）変形屋根」は、厳密に分類する事が難しいが、その判別基準は指標③「軒出の有無」の「軒出がないもの」が該当する。軒出のない建築物は、柱が低く（もしくは柱が無く）竪穴式住居の外観と類似する屋根主体の構造となる。

（２）セムの平面形

指標④「セムの壁数」、指標⑤「セムの入口方向」、指標⑥「セムの屋根形状」から、アイヌ民族の建築物は、『平面形Ⅰa：「セム」を伴わない』、『平面形Ⅰb：「2面壁-簡易屋根構造」の「小庇」』、『平面形Ⅰc：「2面壁-半円筒型構造」の「小庇」』、『平面形Ⅱ：「2面壁-簡易屋根構造」の「下屋」』、『平面形Ⅲ：「3面壁-簡易屋根構造」の「下屋」』、『平面形Ⅳ：「3面壁-小屋根型構造」の「下屋」』、『平面形Ⅴ：「4面壁-簡易屋根構造」の「下屋」』の7種類に分類される。

手順は以下の通りである。

【手順1】

指標④「セムの壁数」において、「セムを伴わない」建築物の平面形を、「平面形Ⅰa」とする。

【手順2】

指標④「セムの壁数」が「2面」であり、指標⑤「セムの入口方向」が「主屋と同じ入口方向」で、指標⑥「セムの屋根形状」が「半円筒型」以外である建築物の平面形を「平面形Ⅰb」、「半円筒型」である建築物の平面形を「平面形Ⅰc」とする。

【手順3】

指標④「セムの壁数」が「2面」であり、指標⑤「セムの入口方向」が「主屋と異なる入口方向」である建築物の平面形を「平面形Ⅱ」とする。

【手順4】

指標④「セムの壁数」が「3面」であり、指標⑥「セムの屋根形状」が「片流れ屋根」である建築物の平面形を「平面形Ⅲ」、「寄棟屋根及び切妻屋根」である建築物の平面形を「平面形Ⅳ」とする。

【手順5】

指標④「セムの壁数」が「4面」である建築物の平面形を「平面形Ⅴ」とする。

【注】

指標⑥「セムの屋根形状」が「半円筒型」のセムは、指標④「セムの壁数」について、「2面壁」とする。

（３）その他の指標

指標⑦「主屋の入口」、指標⑧「セムの接続位置」、指標⑨「壁材」は、建築物の変形を見ることが出来る指標であり、特に指標⑨「壁材」においては、建築物の改良性や地域性を見ることが出来る指標である。

（４）類型化

類型化は、「主屋の屋根部」、「セムの平面形」、「その他の指標」の組合せから、各年代の平地式建築物の類型を行う手法とする。

8-3 1940年の二風谷村及び白老村アイヌ集落の建築物の実態

二風谷村及び白老村アイヌ集落に見られた建築物は、「主屋の屋根部」、「その他の指標（壁材）」から、大きく「伝統的な建築物=茅壁茅葺屋根の寄棟建築物（類型A）」、「一部改良を加えた建築物=マサ壁茅葺屋根の寄棟建築物（類型B）」、「茅葺屋根の切妻建築（類型C）」、「改良住宅（類型D）」の4つに類型化し、「セムの平面形」で細分化した。

（１）二風谷村アイヌ集落

【集落の成り立ち】以前から住んでいた場所に給与地が指定された集落

【土地区画】南北に走る道路沿い、給与地の大きさは一定ではない

【生活状況】アイヌ民族と和人が共に生活、主に農業

【住居の配置】主屋長軸が南北軸（南北道路と一致）、入口位置は道路に面する

【建築物】アイヌ民族の多くは、類型B（平面形Ⅰa、平面形Ⅲ、平面形Ⅴ）に住み、1937年以降、類型D（平面形Ⅰa）の改良住宅に住むことが提唱されていたが、1940年には普及していなかった。類型A（平面形Ⅰa）も見られたが、復元建築に見られるセムを伴った建築物は見られなかった。用途別に建築物を使い分けていた事も確認でき、特に類型C（平面形Ⅰa）は納屋や厩舎のみの利用であった。高床倉庫等の付属建築物は見られなく、類型A及び類型Cを納屋として用いていた。

【通史での位置付け】同化政策の影響の中で、変容した集落

（２）白老村アイヌ集落

【集落の成り立ち】移住者による集落

【土地区画】グリット状の土地区画、450坪を一単位としてアイヌ民族に割り渡されている

【生活状況】集落にはアイヌ民族のみが生活、主に観光業

【住居の配置】主屋長軸が各土地区画の東西軸

【建築物】「村長及び村長に準ずる人」は、類型A（平面形Ⅳ）に住み、住居の他に「高床倉庫」や「熊檻」等の「付属建築物」を所有していた。一方で「その他の人」は、類型A又は類型B（平面形Ⅰa、平面形Ⅰb、平面形Ⅱ）に住み、住居以外には類型C（平面形Ⅰa）を所有していた。

【通史での位置付け】同化政策の影響の中で、アイヌ民族としての生活を保った集落

8-4 歴史的変遷過程から見た建築物の特徴

「主屋屋根部」により類型化した、「茅葺寄棟屋根建築物」、「茅葺切妻屋根建築物」、「茅葺変形屋根（稜線の不明瞭な屋根を持つ）建築物」、「改良住宅」について、13世紀前後から1940年代前後までの変遷過程から、各建築物の特徴を考察した。

（１）茅葺寄棟屋根建築物

13世紀前後から1940年代前後まで、茅葺寄棟屋根建築物は、アイヌ民族を代表する建築物である。その中で、平面形Ⅳの「3面壁-小屋根型構造」の「下屋」を伴う建築物は、元来、村長クラスの住居であった可能性が、1940年の白老村の事例や13世紀前後の発掘調査の柱穴の記録から窺える。

（２）茅葺切妻屋根建築物

絵画資料及び写真資料においてその存在を確認することが出来るが、そのどれもが「平面形Ⅰa」のセムを伴わない平面形である。また、1940年の二風谷村及び白老村においても、切妻屋根建築物は全て「平面形Ⅰa」で住居以外の用途として用いていた。このことから、茅葺切妻屋根の建築物は、元来、納屋などの住居以外の用途で用いられていた可能性が高い建築物である。

（３）茅葺屋根の変形建築物

絵画資料から、和人地から離れた遠隔地に多く見られたことが分かっており、絵画資料には多く描かれているが、写真資料からは、1920年代にとられた物が1枚あるのみである。また、既往研究において、茅葺変形屋根建築物の実測調査をした記録が残っていないことを考えると、他の類型よりも早くに消滅した可能性が高い建築物である。

（４）改良住宅

1937年の旧土人保護法の改正に伴って国の改良住宅方針が制定されたが、実際にそのような住居に住むアイヌ民族は1940年においては普及していなかったと考えられる建築物である。

8-5 平地式建築物の類型化手法の整合性

（１）主屋屋根部の分類

主屋屋根部は、外観意匠から分かる9つの指標のうち、指標①「主屋の屋根材」、指標②「主屋の屋根形状」、指標③「軒出の有無」を基に、以下の4つに分類した。

アイヌ民族の代表する建築物としての「茅葺寄棟屋根建築物」、納屋としての利用であった「茅葺切妻屋根建築物」、「茅葺寄棟屋根建築物」とは発祥が異なり早くに消滅した「茅葺変形屋根建築物」、国の政策によって作られた「改良住宅」といったように、この4つの建築物は、用途の違い、消滅時期の違い、国の政策によりできた建築物であるなど、意義のある分類となっている。

（２）セムの平面形の分類

セムの平面形は、指標④「セムの壁数」、指標⑤「セムの入口方向」、指標⑥「セムの屋根形状」を基に、7つに分類した。

『平面形Ⅰa：「セム」を伴わない』は最も一般的な平面形であり、時代の変化と共に『平面形Ⅰb：「2面壁-簡易屋根構造」の「小庇」』といった小庇の機能を備えた建築物が見られるようになった。さらに壁材が「茅」から「マサ壁」に変化した1900年前後以降では、『平面形Ⅲ：「3面壁-簡易屋根構造」の「下屋」』や『平面形Ⅴ：「4面壁-簡易屋根構造」の「下屋」』といったセム自体も「マサ壁」である簡易な構造の下屋を接続する建築物も見られるようになった。『平面形Ⅰc：「2面壁-半円筒型構造」の「小庇」』は茅葺変形屋根

建築物のみに接続したセムであり、『平面形Ⅱ：「2面壁-簡易屋根構造」の「下屋」』は茅壁の茅葺寄棟屋根建築物のみに接続するセムであった。そして、『平面形Ⅳ：「3面壁-小屋根型構造」の「下屋」』は、村長クラスの住居にしか接続しなかった特殊な下屋であったことが窺えた。このように「セムの平面形」も、「主屋屋根部の分類」と同様に、建築物の階層性や時代背景、ある建築物にのみに接続する等がわかる意義のある分類となった。

（3）その他の外観意匠の指標

その他の外観意匠の指標には、指標⑦「主屋の入口」、指標⑧「セムの接続位置」、指標⑨「主屋の壁材」がある。1940年の二風谷村及び白老村を見ると、住居の配置は、土地区画の影響を受けていたことが分かった。よって、指標⑦及び指標⑧は、土地区画の影響が大きい指標であり、建築物の類型においては、補足的な指標であることが分かる。指標⑨については、本研究の対象年代において、壁が「茅壁」から「マサ壁」に変わり始めた時代であるため、アイヌ民族の改良性を図る指標として意義のある指標であった。

8-6 写真資料の位置付けについて

信憑性の高い資料であることを前提に、アイヌ民族の文化を考察する資料としての写真資料は、外観的な側面を伝えることにおいて最も優れた資料であるが、それ以上の内容については、新知見を得にくい資料である。本研究において、「村長」や「建築物の用途」について分析を行ったが、この信頼できる記載が無ければ新たな知見を得ることができなかった。

写真資料は、外観的側面以外を考察するには別な事実が必要になる資料であるが、写真の現実性から言葉により説明されてきた事実的信憑性を与える最も優れた資料と位置付けられる。

8-7 今後の展望

通史としてアイヌ民族の建築物を捉えるには多くの課題が残されているが、その課題を解決する資料が十分ではない現状にある。その中で、今後、発見される可能性のある資料としては、発掘調査による柱穴跡や出土する建築部材が有力となることが予測される。新規に発見される可能性のある写真資料については、本研究の資料とした「毛民青屋集」があり、12巻まで存在するのだが、現在、その所蔵先が不明であり、資料の発見が急がれる。

また、他分野からの研究の必要性も窺える。本学の異分野連携において、1961年から1963年に採譜された440曲を基にこれまで明らかになっていないアイヌ民族の歌謡の音階を明らかにした。この440曲のうち、二風谷で採譜された曲と白老で採譜された曲の音階を調べてみると、二風谷においてはアイヌ音階と日本民謡の音階が含むのに対し、白老においては大半がアイヌ民族の音階であった。このように、音楽という文化的側面においても、建築物と同様な結果が得られたことは意義深いことであった。

本研究は、アイヌ民族の建築史として1860年代から1950年代を対象としたが、それは過去の事実だけを明らかにするのではなく、今後のアイヌ民族の建築史、そして、今後の北海道建築史を意識し研究を進めた。学術的見地から本論文の内容は、日本建築学会計画系論文集等で建築史学としての評価を得たが、そこで明らかとなった事実や過去の研究者の成果を基に、どのようにアイヌ民族の建築史を伝えていかなければならないか、現在のアイヌ民族の建築物をどのようにとらえていくのかといった社会的意義について、今後、建築史学を専門としたデザイン学の見地から考え続ける次第である。

研究業績

〈本論文に関する審査付論文〉

札幌市立大学研究論文集

- (1) 佐久間学, 羽深久夫 : 1860 年代から 1950 年代の写真資料におけるアイヌ民族の住居の外観的特徴, 札幌市立大学研究論文集, 第 5 巻, 第 1 号, pp. 3-31, 2011 年 3 月.
- (2) 佐久間学, 羽深久夫 : 1940 年の二風谷アイヌ集落を記録した鷹部屋福平の「毛民青屋集 5・6」の資料整理, 札幌市立大学研究論文集, 第 6 巻, 第 1 号, pp. 81-95, 2012 年 3 月.
- (3) 佐久間学, 羽深久夫 : 鷹部屋福平の「毛民青屋集 5・6」に基づいた 1940 年の二風谷アイヌ集落の建築物ごとの平面と外観的特徴, 札幌市立大学研究論文集, 第 6 巻, 第 1 号, pp. 97-112, 2012 年 3 月.

日本建築学会計画系論文集

- (1) 佐久間学, 羽深久夫 : 鷹部屋福平「毛民青屋集」に基づいた 1940 年の二風谷村アイヌ集落に見られた建築物の実態, 日本建築学会計画系論文集, 第 79 巻, 第 706 号, pp. 2733-2741, 2014 年 12 月.
- (2) 佐久間学, 羽深久夫 : 鷹部屋福平「毛民青屋集」に基づいた 1940 年の白老村アイヌ集落に見られた建築物の実態, 日本建築学会計画系論文集, 第 80 巻, 第 707 号, pp. 167-175, 2015 年 1 月.

謝辞

学部時代からの指導教官であり、唯一の恩師であります羽深久夫先生には、6 年間、継続して研究を支えていただきましたことに深い感謝を申し上げます。先生との共著で論文を発表することができたことが研究の支えとなりました。研究以外においても、日々の生活の中で、毎日、楽しいひと時を過ごさせていただきました。心より感謝いたします。

そして、この度の学位論文におきまして、審査委員主査の中原宏先生、副査の矢部和夫先生、柿山浩一郎先生からは、適切な論考となるよう、ご助言とご指導、そして、励ましを頂き、心から感動し、そして、博士号の重さを実感いたしました。論文を審査していただいた先生にあらためて感謝の言葉を申し上げます。

博士後期課程の同期であり、会社社長であります青塚大輔さんには、たくさんの励ましや喜びをいただきました。孤独となりがちな研究生活の中、社会に目を向けさせていただき、仕事や遊びを通じて、多くのすてきな人々に出会わせていただきました。日々、感謝しております。

そして、何も言わずあたたかく最高の研究環境を与えてくれた両親に感謝いたします。

最後に、アイヌ民族の建築に関する研究の礎を築いた鷹部屋福平博士、アイヌ民族の建築に関する研究を発展させた小林孝二博士、丁寧な資料整理と迅速な対応をしていただきました北海道大学附属図書館司書様、函館市中央図書館司書様、北海道立文書館学芸員様に感謝いたします。

今日まで、多くの方が、継続して研究をさせて頂ける環境を自分に与えてくれました。ありがとうございました。

平成 27 年 3 月

伊在久間 学